
ベクトルマン

連打

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベクトルマン

【Nコード】

N4799X

【作者名】

連打

【あらすじ】

オタク高校生のサバイバル学校生活。

恋も友情も足掻きながら上手に切り抜け、目指すは平凡なNPC。

『ようこそ 村へ』的なポジションをこよなく愛す彼に立ちふさがる恥ずかしいイベントの数々。

赤面黒歴史のコメディライフです。

「はっ……ッはっ」

冷たい風にビンタされながらひたすら左右の足を交互に押し出す。じやりじやりと不安定な足音だけが頼りなく耳に届く午前5時。

「は……はっ……」

かっちり着込んだウインドブレーカーとぐるりと首に巻いたタオルは僕の体温を効果的に押し上げ、まるでセイロの中のシヨロンポ―にでもなつた気分だ。

「……はっ……」

世界はちっぽけな僕なんかにはまるで興味ありません。僕がここで今過呼吸でぶっ倒れても暴走ベントツに跳ね飛ばされたところで……太陽はつるつる昇るし矢口 里はあいかわらず空気を読みすぎて自滅するんだろう。

「……」

自分の呼吸で窒息ってすごいよな。今僕そんな感じ。前例とかあるのかな。えっ？世界初？うそ？取材とかされちゃう？

「キモ……なにブツブツいつてんのよあんだ」

僕の内面世界はこの世界において唯一安住の楽園。ユートピア！サ
ンクチュアリ！デイズニールランドなのに！音も無く自転車で追走し
てくるクサレ3D女は僕に精神攻撃を仕掛けてきた。

「あんたがせめて見た目だけでもまともになつてくれないと私が困
るのよ。もう中身は問わないから。お願いだから」

すいすいと電動自転車のペダルを軽やかに回し、気持ち茶色がかつ
た長い髪を風に泳がせるクサレ3Dオンナ。属性は姉。朝は優しく
起こしにも来ず弁当も作らない。胸だつて背中みただし態度もデ
カイ。

そして……致命的に血縁関係が立証されていた。価値ナシ。逝け。
早く。

「……見てんじゃないわよ。ムカつくわあんたの眼つき」

こっちは酸欠でそれどころでは無い。それにその手の罵倒など聞き
飽きている。

曰く『豚野郎』。

曰く『豚足もどき』。

曰く『ぶたまん喰うか？』。

結局は『ピッグマン』辺りで落ち着いたと記憶している。要はまず
外見がブタなのだ。自分でもヒヅメが付いてないのが不思議に思っ
た程に。

「だから見んなつてば！寒気がするの！」

それほどまでに嫌っている僕に毎日毎朝付き添う姉。決して兄弟愛
的な要素が混ざり込んでいるわけでは無い。まあそんな得体の知れ
ない不純物入れてもらっても困るんだけど。

「はっ……はっ……」

この姉は……なんと高校では美人優等生のイメージを貫いているらしい。清楚で可憐な女子高生なんてものが絶滅危惧指定種なのは知っていたが、もうとつくに絶滅してるんじゃないだろうか？こんな売女寸前のクサレビッチがたとえ偽りであってもそんな大それた看板を掲げているなんて。

そんな姉の砂上の楼閣は今まさに僕の進学によって粉碎されようとしている。

故意ではなかったのだが……推薦で早々と決まった僕の進学先が姉の通う高校と同じだったのだ。

「きゃああああああつ！……」

絶叫。

姉はその事実を耳にした時、日常生活では決して聞けない程の断末魔をひねりだした。

「ふざ……けんじゃ……」

ああ……これが殺意ってやつかあ。あ、今歯軋りの音聞こえた。ア
ニメみたい。カッケー。姉。

僕が姉を眺めながら正体不明の黒い愉悦に浸っていると、ピンクなローターみたいにプルプルしていた姉は唐突にゴトリとした質量を伴った眩きを僕の足元に転がした。

「走れ」

押し寄せる圧迫感に息苦しくなる僕。
覇気？ねえ覇気？

「あんだ明日から。……入学式まであと半年」

推薦だからね。まだ9月だもんね。

「その……醜い体……そぎ落としてやる」

世間体とか体面とか面子といった、僕がいつか落つこととしてきて振り返りもしなかったモノの為。

長いこと僕には目も合わせなかった姉がS属性を纏わり付かせながら亀裂のような笑みを浮かべる。

「その醜い体そぎ落としてやるっ！！」

ビシツと僕の鼻先に人差し指を突き出す姉。

まったく同じことを2回言ったサムさは……今突っ込んだらダメ。それくらいはいくら僕でも分かる。

「はっ……はっ……」

と、まあ。

要はダイエット。

食事はササミと野菜で足りないビタミンは錠剤で補給。肌はカサカサになっていきすっかり胃も縮小した。ナタで叩き切るような大雑把な体重撲滅プログラムはすでに5ヶ月を超えている。

姉が付いてくるのは僕がサボらないよう監視するためだった。事実最初の内は歩いて回るのもキツかったコースが今は半分の時間で走りきっている。

いつものコースを回り終わりぺたんとして腰を下ろした。胸元からイタリア人のようにムワッと熱気が立ち昇りとても不快だったがカプチーノは嫌いじゃないなあ。そっぴやしばらく甘いもの飲んでない。

「何キロ？」

僕を突き抜け後ろの風景を見ているような硬質な視線で僕に声を掛ける姉。話すのも嫌なのだろうし、気持ちは分からなくもないし、今に始まった事でもないけど。

「61.5」

ダイエット前は112キロだった。毎日体重計にむりやり乗せられていたが最近は姉の監視もユルイ。把握してなかったみたいだ。

「……そう」

興味なさそうに吐き捨てると姉はペットボトルをポイと投げて寄越し自転車を漕ぎ出した。

僕は小さくなっていく姉の背中を見ながらゴロンとアスファルトに寝そべる。姉に初めて貰ったペットボトルはウーロン茶のようだ。

「……」

僕はそのウーロン茶をウィンドブレーカーのポケットにねじ込むと、

膝に手を突いて立ち上がる。

もうすぐ入学式だなあ。

今さら学校生活がリア充化するなんて望みはないし、赤面症のPCスペック厨だし、エロゲーよりギャルゲーが好きなヘタレオタクな僕は……それでもユニクロの『Mサイズ』が着れるようになった。友達一人も居なくても、劣等感が背中に貼り付いてぜんぜん取れなくても、ひとの目を見て話せなくなつて。

つるつる昇つて来た太陽を眺めながら、僕は

『 使いの夜』の発売を心から願つた。

ペットボトルを投げて寄越した日を境に姉は僕のランニングに付いて来なくなった。

寂しいとか物足りないとか甘酸っぱい系の感想があるわけではないが張り合いは確かに薄くなっている。春休み中なので誰に会うわけでもないし。いや、学校行つてたとしても誰かに気に留めてもらえるわけでは全くないんだけど。

「なに泣いてんだ？」

自宅マンションの下で柔軟体操をしていた僕に声を掛ける背の高い男性。190センチを超える長身から見下ろされるといふのはかなりの敗北感を伴う。

古い電柱のように自然にそこにあり、気にしだすと圧迫感天井知らずに跳ね上がる、不思議な存在感を持つこの男性……戸籍上は父だったりする。

「泣いてないよ」

僕の返事を聞いているのかハナから聞く気がないのか、『父』はスーツの裾をはためかせ僕に軽く手を振り出勤していった。

ヤツはどう客観的にみても、間違いなく変人の類の人種だ。

小学校3年の時に新しく僕の姉と僕の父となったヤツは何も押し付けず、飾らず、淡々と僕らの相手をしていた。

姉は今でもヤツに馴染めないらしくほとんど話さないし、ヤツは相変わらず飄々と生活を送る。

そんなヤツが意志をはっきり示したのは今までに一回だけ。

他界した母の実家に引き取られようとする僕と姉。それが普通だし自然。

親子と認め合うには6ヶ月という時間は短すぎた。

親戚中誰もがそう思っていたし僕と姉もそれが当然だと思っていた。たった半年一緒に暮らしただけの限りなく赤の他人の僕らに向かつて……

ヤツは言った。

「自分の子は自分で育てる。お前たちは俺の子供なんだから。見るこれ、ほら」

ヤツの手にはヒラヒラと戸籍謄本の写しがはためく。

「……。……にはなんて書いてある?」

突き出された戸籍を目の前に差し出され多少うるたえながらも姉は言葉を吐き出す。

「……長女」

「そーだ！お前は俺の長女！でその肉団子は長男ってわけだ！文句あるやつは今なら受け付ける！」

親戚一同を長身から見下ろしヤツは腕組みをした。って誰が肉団子

だ。

シンと静まり返る畳敷きの大広間。

「君……少し冷静に……」

「却下だ！」

異議を受け付けると言った10秒後に気持ちいい程の完璧前言撤回。まともな大人のすることじゃない。

その後、何度か話し合いの場が持たれたようだが結局ヤツは主張を曲げなかった。『父さん』と呼ばない息子と『父』と認識していない娘を引き取り生活することがヤツにどんな意味があつたのかは今でも分からない。

相変わらず姉は家ではフィギュアのように表情を変えないし、僕はいじめられっこ寸前のデブオタク。

干渉しないのはヤツの美德ではあるが、昔は何を考えてるのか全く分からず恐怖さえ抱いていた。

実はデブ専のシヨタ野郎で虎視眈々と付け狙われてるんじゃないかと貞操の危機さえ感じていたものだ（キリッ）

夜中恐ろしくなってしまう姉の部屋に相談しにいくと「脂汗拭け。

そして失せる」と助言をもらったのはいい思い出。

姉はツンギレの走りである。

デレない事にブレがない。

姉。

「ちょっと……」

意識を幼少期に飛ばしていた僕は姉の接近に全く気づかなかった。本人にだけしか分からない黄金比によって微かに短くなったスカートと品のあるピカピカの革靴、謎のイイ匂い。いつものことながら隙が無い。

「ご飯あるから。父の残りだけど」

姉はヤツを『父』と呼称し距離を縮めようとはしない。あくまで属性としての呼び名を頑なに堅持していた。しかし今、問題はそこではない。

「私今日学校あるから。あんたも明日入学式なんだからちゃんと準備しときなさいよ」

「……」

「……なに？」

「優しい……から気持ちが悪い」

正直な感想だった。

僕の身に何が起きているのか？姉にどんな心境の変化が起きたのか？ちょっと寒気がしてきました。はい、ブツブツとチキン肌。

「……ごめん。よく……聞き」

「キモチガワルイ」

「もう一度……」

「キモチガワルイデス」

軋んだ笑顔の姉の眉間に国境みたいな一本筋の通った皺が刻みつけられていく。しかし今止めるわけにはいかないのだ。姉をいつもの姉に戻すのだ。なぜなら姉は……

血が繋がった3次元のメスなのだ！（ババーン！）

さあオタの誇りと矜持をその手に掴め俺！傷ならこのあいだこっそりamazonで買った抱き枕に癒してもらえ！

さあ！池！

「キモ」

「あなたのあの絵が付いた変なシート捨てといたから。やめてよね
気持ち悪い」

「うああああああっツッ！！なんだよっつッ！！やめてよっつッ！！」

「……ッライ？悲しい？」

くすくすと満足げに会心の一撃を繰り出し学校へと去っていく姉。
ピンポイントに心を抉られた僕はがっくりと膝を地面に突き刺した。

あと涙でタ。

以外たい。

間違えた。

胃が痛い。

なるべく考えないようにしていた入学式初日の朝、僕は原因不明の難病とひとり格闘していた。

枕に頭を押し付け悶える様にうめきを押しつぶす。

遮光カーテンからわずかに漏れた突き刺すような朝日は僕を更に窮地へと追い込む。いやおうナシの現実と待ったナシのタイムボカーン。敵はあまりにも強大で容赦なく、僕の微々たる魔法力などまったく役には

「いつから魔法使いになったのよ。設定キモい」

なぜ？

はて？

敵の幻覚攻撃は更にエスカレートしているようで、姉の姿をこんなにも正確に投影している。確かに僕は姉に頭が上がらない。いや、本気出せばメスの一匹二匹どうってことないよ？いやほんとにほん

とに。

「さつさと起きなさい。遅刻するわよ」

シャツ、と勢い良く結界が破られた。それこそ年単位で築いた僕の完璧な固有結界（遮光のカーテン）をいともたやすくものの数秒で……姉……恐ろしい娘。

「ってなんで僕の部屋に！？なにしてんのっ！？」

ふとんを跳ね飛ばし異常事態に対処すべく立ち上がる僕。

「あんたは入学式とか始業式になると仮病使うからね。わざわざ起こしに来たんだからありがたく起きなさい」

仮病ではなく精神攻撃なのに。何度言っても理解しようとしなないメスブタめ。ここが戦場だったら至近距離で罵倒してやるのに。あ、もちろん僕が上官役ね。

「父も待つてるから。早く来なさいよ」

口汚い捨て台詞（意識）を吐き静かに僕の部屋を出て行く姉。僕の部屋なんて入ってきたのはもう覚えてないくらい昔、しかも一度きりだったはず。母さんが死んだときだけだった。

え？死ぬの？姉死ぬの？

……。

ま、それはそれ。

さて……僕は強大な敵とのバトルが大変な事になっていたのを思い

出し、もぞもぞと温もりの残る戦場へ帰還すべくふとんを翻そうと

「マジで早く来ないと……怒るから」

「うんすぐ。すぐ行く」

僕の部屋の扉の隙間から姉の詠唱した魔法により僕は迅速に着替えを開始させられた。だってマジじゃんあいつ。マジで怒んなくてもいいじゃないですか。

「つと」

とてつもない違和感。

鏡の前に見知らぬ人影。

「……………」

なんだ僕か。

そういえばこの姿見を覗き込むなんて何年ぶりだろうか？部屋にあるのは知っていたが使い勝手の悪いハンガーの役目しか果たしてなかったな。

「……………」

見れば見るほど違和感が首をもたげる。なんせ半年前までの体から丸々一人分の体積が消えうせているのだ。最近では食事の時に汗がかかなくなっただし、股ずれも消えた。なんか鼻息も荒くなくなっただけで胸焼けがした。

毎朝食べてたカレーパン4個。思い返しただけで胸焼けがした。

なにより重宝するのは体が軽いこと。これなら満員電車で露骨に嫌そうな顔をされることも、長い階段で圧倒的な絶望感に襲われることも無さそうだ。

定食屋で頼まなくても大盛りにしてくれる『デブ育成プロジェクト』に参加させてもらえなくなりそうなのがちょっとイタイが。

「……いい度胸してんじゃないの」

「すぐ！もう行くから！」

隠密スキルの高い姉は怒っていた。僕は即座に従順に姉へつらい付き従う事で危機を回避することにする。

だってマジじゃん。

マジ怖いじゃん。

無難に朝食を済ませた僕と姉はなぜか仲良く連れ立って登校中。朝の清々しい空気とは無縁な殺伐とした気配を身にまとった姉は僕の方をノールックで言葉だけを寄越した。

「あんだ趣味は」

「へ？」

「いいから答えな。趣味は？」

イライラしている。姉は誰が見てもイライラしている。媚びる！へつらえ！

僕の中のちっちゃい僕が絶叫する。

しかし僕は男だ。いや、漢なのだ。そんな情けない真似はできん！

「……趣味は？」

「ギャルゲー。たまにエロゲー」

危機管理リミッターが勝手に作動した！？恐るべきは姉！このメスめ！思わず正直に答えてしまった！

「好きな食べ物は何？」

「はぶッ？」

僕の頬を鷲掴みにした残酷なメスブタは今日初めて僕の目を射抜くように見詰め、少しだけ笑った。

「あんたの処刑は帰ってからにしとくわ」

こいつ後悔してないよ？自責の念は？あれ？

「今日あんたを学校の友達に紹介しなきゃなんないの。協力してくれる？してくれるよね」

ぎりぎり僕と僕の頬に姉の指が食い込んでいく。以前のように肉が付いてない僕の頬の痛覚を実に効果的に責めつけている。

「何の為？瘦せたのな・ん・の・た・め？」

「おねえひやまに、はふいをかかせまいひやめれす」

「だよね。その本番が今日、今からなの。自覚してる？」

血走った目を隠そうともしない姉はすっかりヤンギレへとジヨブチエンジを果たしていた。

足が浮くんじやないかと心配になるくらい渾身の腕力でぎりぎり頬を掴む姉。彼女の、元々短い導火線はもはやライフゼロ！

「もう一回聞いわよ？……趣味は？」

「……………きや」

「ギャ！？なに！？聞こえない！！」

「映画鑑賞れす」

「最近見た映画は！？」

「マクロス」

「はああ！？」

「す、すたーとれッく。SFれすSF」

「……まあいいわ」

あれ？おかしいな？

これ……中学時代より過酷になってない？

レベルデザイン間違えてるよ神様。

いきなり無理ゲーじゃん？

少し学校からは離れた場所で姉と別れた僕はテクテクと彼方に見える校舎を目指す。

周りには民家以外ほとんど見当たらない。駅からもバス停からもいい具合の距離感を保つこの学校ははつきり言って不便だ。

偏差値の高さも手伝い僕のいた中学からこの高校に進学したのは二、三人だと聞いている。

公立の進学校であり制服も男子生徒は学ラン、女子は地味なブレザー。『質素は美德』が校風のガリ勉ばかり集まる面白みのない高校。サリカットだというから学生に不人気ナンバー1との触れ込みものを得た評価なんだろう。

……だがそれがいい。

まさに僕にとって理想的な学校だった。

『ひとりにはみんなの為に』的な忌々しい作業が纏わり付く行事が全くと言っていい程ない。学生は勉強だけしてして！細けえこたあいいんだよ！とがんじがらめの管理教育。私語のない授業。ステキじゃん？

僕は別に頭がいい訳でも上昇志向が強いわけでもない。

そんな僕がこの学校に推薦で入学できたのは単純な理由が一個あるだけなのだ。

『勉強が出来る』んじゃなくて『勉強をする』から。デブでオタクな僕の唯一の処世術。成績という明確な物差しは僕にとつて『盾』であり『命綱』だっただけのハナシ。

陰湿で狡猾ないじめヒラエルキーは取り柄がある奴には矛先が向きにくいのだ。

当たり障りのない学校生活を送るために僕のような人種には能動的な努力が不可欠で、それがたまたま勉強だった。

だから予習、復習は欠かさないし決してそれを表に出さない。姉は単に成績が良かったんだろぅが僕は違う。バカなりの努力が偶々うまくいった。そんなだけ。

この学校のレベルに付いていく自信は全くないし、落ちこぼれたって構わない。

目指せぎりぎり卒業！このガチガチの学校で僕は人知れず息を潜めながら淡々と高校生活を過ごすのだ！

「…………あの」

それで訳の分からない大学にドサクサ紛れに滑り込み、行ったり行かなかったりしながらなんとなく中小企業に就職するのだ！

「あの……………すみません」

結婚！？バカ言っちゃいかん！あんなものは情報弱者、……………そう！情弱に任しとけばいいんだよ！ポコポコ子供生まれて養育費にヒ―ヒ―あえぎながら目減りする人生を突きつけられてればいいんじゃないかな！だつて僕の嫁は子供産まないもの！液晶というスイートホームで僕を待つ嫁は出産なにそれおいしいのだもの！

「あの一！」

「ひっ!?!」

びっくりした!びっくりした!

「あ、ごめんなさい。何度も声掛けたんですけど」

「…………?」

「あ、…………あの、ちょ」

ぐるんと振り返る僕。僕の後ろには用水路、そして田んぼ。案山子すら立っていないかった。しかし僕みたいなデブオタに女子高生が声掛けないよな。んなこたあ分かってる。こちとら何年モノだと思ってるんだナメヤガッテ。

「買いません」

「え?」

未だに姉以外に話しかけられると赤面してしまい、しかもメスとなると失語症まで併発する可能性大。しかし最近のキャッチは手が入るな。制服まで着込んでくるとは。

しかしあいにく僕はコスプレスキーでは無かった!はっはっはっはっは!勝った!!

「絵なら買いません。は版画とかもま、間に合ってます」

僕は自分の革靴を凝視しながらきっぱりと宣言した。
……が、危ない！失語症が顔を覗かせている！

たたかう

逃げる

僕はくるりと踵を返し逃げ出した。

「ちょ！待って下さい！」

しかし回り込まれてしまった！

「なななななんですか！？そんなにノルマとかキツインですか！？」

なんて職業意識の高いメスだ！若く見えるけど3人くらい子供育ててるのか？狙った獲物は逃がさない13のゆかりの者なのか！？ト
ップセールスを挙げるのはこんなにも必死な作業の繰り返しなのか
！？

「なんの話してるんですか！？」

「スゴ腕セールスウーマンの日々……」

「全く意味が分かりません！それより早く見てください！ほら！」

謎のウーマンは僕の袖をぐいぐいひっぱり学校からは逆方向へと誘導する。背はかなり小さいが天パーなのかシロガネ - ゼなのか、ゆるくかかったウェーブの明るい髪にカバンにぶらさがった正体不明のストラップ。謎のウーマンは細部にまで女子高生を再現していた。このコスプレは見事と言うにヤブサカではない。こだわり気質は好ましい属性だと思うんだ。

「あそこ！あれです」

何の木かは知らないし知りたくもないのだが、小動物が枝の先に乗っかっているのだけは確認出来た。

「降りられないんだと思うんです！」

異論は無い。子猫には良くあることだと思うしそれ以上でもそれ以下でもない。

「早く！」

えっ!?

「お願いします！」

……いやいやいやいや。木登りなんて。よく相手見てモノ言っただなお嬢ちゃん。

「普通にむ、無理。僕があそこまで？僕のこのバデーを見ても……」

「？」

キョトンとするウーマン。固まる僕。

そうだった。

僕の愛くるしいミート・サブマリン（イミフ）はクサレ3Dに奪われたんだった。

「すっかり懐かれちゃいましたね！」

最悪だ。最悪のスタートだ。

僕の初登校の風景は暗雲立ち込める見るも無残な大敗北となった。いや、なっている。今も。

ニコニコと僕の横から付いて離れないウーマン。これはコスプレでは無く本物だと……同じ学校の生徒なのだと気付いた時には僕は完全に好奇の目に晒されていた。

新入生の癖に女連れで仲良く登校。僕の頭には偶ににやあと奇声を発する小動物。感慨も何も無い、僕の背中にはじつとりと汗でシャツが貼り付き赤面症は出っ放し。自意識過剰だとの自覚はずっとあるのだがやはり僕は極端に『他人の視線』が苦手なのだった。

「……で、どとうするんですか？」

ウーマンの目を見られない僕はうつむいたまま首の後ろを掻きながら問う。しっぽがあたってこそばゆい。

「うーん、どーしよつか。飼えない？」

おいおいおいおい。丸投げ？バシツと言ってやれ。この三次元の悪魔に誰が一番偉いのか分からせてやるのだ！！

「飼えない……とお、思う」

無理!!顔もまともに見られないんだよこのやろっ!!オタなめんな!!

「そっか。ちよつとごめん」

えい、と軽々しい掛け声と共に僕の前方に駆け寄るとウーマンはいきなり抱きついてきた。

……抱きついてきた?

「#\$!& amp; ツ!!??」

「ちよつと!暴れちゃだめだよ!」

痴女!?リアル痴女!?どこにフラグあったの!?いつの間に踏んだ!?

唐突過ぎるだろ3次元!!脈絡の無い接近イベントはクソゲー扱いされても甘んじて評価を受けるよ!今回はお布施として諦めるけど今度また同じバグモドキのクソフラグたてやがったら……

「はい捕まえた!あたし職員室行って放課後までこの子預かってもらってくるね」

「積みゲー行きだこの……え?」

ウーマンは僕の頭の上の小動物を大事そうに抱え僕の目を見てニッコリ微笑んだ。不意打ちに噴出す汗。高まる鼓動。息苦しい。

「助けてくれてありがとね！」

「あ……あう」

僕の手のひらを一回握ったウーマンは満足そうに校門へと走り去っていった。

途端ギョウつと視界は開け周りの景色が鮮明に浮かび上がる。

思い出したよう酸素を取り込むと頭の中を洗濯機に放り込んだような新鮮な気分浸った。

澄んだ音色は金属的な剛健さで僕の耳をくすぐる。そこかしこで息を切らせ走る生徒たち。被せる様に響く、おそらく教師たちであるう大人たちの叱咤。

そして僕はようやく気付く。

完全に入学式に遅刻したことに。

まだだ。

入学式でこっそり途中参加し見知らぬ有象無象に非難の視線をいくら浴びようと。

初対面の女子高生にくすくすされながら「猫は？猫」と半笑いで聞かれようと。

滝のように流れる僕の汗を見た養護教諭に保健室に連行されそうになったとしたりして。

まだだ。

挽回できる。

僕はようやくたどり着いた教室の中、汗を拭いながら起死回生のザビ家も真っ青の澱んだ思考に頭まで浸かっていた。

中学時代に培った無機物化のスキルをいきなり全力で発動し誰の意識にも認識されないようになってやる。ここは僕が生きて行くうえで、ベストではなくてもベターではあるはずの学校なのだから。

「私が担任の福島です。皆さん一年間よろしくね」

初対面の教師はまだ若い、20代後半くらいの女性だった。ジャージを着用していることから体育教師なのかと連想させるがそんなことは今の僕には驚く程興味が持てない。所詮有機体のメスだし……やたらはきはきとしたその口調からも友好関係は望めない。

「はい！じゃあ順に名前呼んでいきますから呼ばれたらその場で自己紹介よろしく！」

僕は石。僕は煙。僕は空気。僕は……

「出席番号1番、新木くん！」

僕は虫。薄汚い蟻。

ん？……別にアリは薄汚くないよな。いかんいかん。無意識にM氣質がデロンと漏れていた。これというのも3割位はあのクサレ3Dのせいだ。んで、1割は朝のセールスウーマン絡みのせいで受けた一連の辱めの為。

「新木くんは……」

はっつっ！！じゃあ6割は僕の資質！？なあんだ、所詮醜い肉団子は避けられないカルマだったのか……つって誰が肉団子だ！！加工食品呼ばわりは許さないんだからねっ！！

「新・木・周・蔵・くん！」

「体は剣で出来て……うわあっ!？」

眼前に迫る担任教師の顔。僕の毛穴からは壊れた蛇口のように一気に汗が噴出しプライベート危険信号がミーーミーー騒ぎ立てる。

「はいボーっとしない。呼ばれたら返事、のち起立」

ああ、また見られている。僕は一秒でも早くこの状況から逃れるためおとなしく席を立った。さっさとオワレ。お願いだからオワツテクダサイ。

「君が周蔵くんかあ。シューゾーって呼んでいい？」

「……？」

背中を伝う汗は靴下まで届こうかという勢いで垂れ流れちよつと眩暈がしてきた。呼び方なんてどうでもいいよ。名前なんて記号に過ぎないし、そもそもまともに呼ばれたことなんか無い。

「綺麗なお姉さんには先生随分助けてもらってるからねえ。あ、お姉さんに福島が担任だよって言うておいて」

クサレバイタの陣営のモノか！？ならばこの仕打ちにも頷ける。僕を粘着質に尋問し今朝の鬱憤を晴らしているんだろう。どこまであの3Dの権力が食い込んでいるのか知らないが自分の教室内であっても全く気が抜けないことだけは理解した。

「にしても……美男美女の姉弟かあ。いいね！花があるよねえ！」

ニホンゴ話せ。どんな皮肉だよ。って誰が肉団子だ！！って言われてなかった！！

「この学校に推薦入学って。シューゾーもやっぱり優秀なんだねえ。先生と仲良くしてね！」

教師の皮肉が斜め上過ぎて理解がおっつかないし。一体何が目的で

そんな妄言をノベテいるのか、オトナの話術の奥深さに戦慄をキンジエナイ。

想像以上に高く僕の前に建立されたリアルの壁。

僕はこれから始まるスクールライフという名の魑魅魍魎が巢食うバトルフィールドのご真ん中で、ただ立ち尽くすことしか出来ないでいた。

「はい、じゃあ今日はここまで！」

ジャージ着用の担任教師の号令で一時解散となる。本格的な授業は明日から、今日は簡単な挨拶のみで各自明日に備える……そういう事みたいだ。

がたた、と一斉に椅子を引きずる音が教室中に立ちこめ僕は少しだけ眉間に皺を寄せた。

ジャブの刺し合いのようなおっかなびつくりの会話がソコラ中から聞こえてきてどうにも居心地がよろしくない。

あちこちの中学から上澄みだけをかき集めたようなこの学校は「友達がいるから私もその学校にいくー」なんてスイーツな思考の持ち主は皆無。大学へのトンネル、通過点だとの認識を持って入学してきた生徒がほとんどなのだ。

当然同じクラスに友人がいる者などかなりの少数派、よって出鼻のハラの探りあいは一層熾烈を極めている。

各々が今まで培った対人経験をフル活用させ、クラスでのより友好的な立ち位置を確保しようと男子生徒も女子生徒もぐるぐると大立ち回り。ご苦労様なことだ。

……。

.....。

さあ回れ回れ！

その座席は限られてるぞ！もつと必死に喰らい付かないと隣の池面がゼーンプかつさらってくぞ！？

はーはっはっはっはっは！見る！人がゴミのようだ！！

「参加しろ」

「おぶっ！？」

僕の視界が真っ白！？

「この社会不適合肉団子が。だからあんたは友達一人もいないのよ」

姉だ！なんたるフテブテシイ登場！

3年の分際で堂々と新入生の教室で我が物顔！どや顔！弟の一回も開いてない教科書での顔面殴打！

看守か！？お前は野生のカンシユなのか！？

「あら？どしたの古都ちゃん。弟くんのお迎え？」

新木古都。姉のフルネームだった。自宅では名前なんて呼ばないし呼びたくもないし『コト』なんておかしな名前とつくにボーキヤクの宇宙に置き去りにしていたのでやたら新鮮だった。つてか思い出させんなジャージ教師。

「フクちゃん！このクラス？」

宝物でも発見したかのようなウソクサイ笑顔でジャージに駆け寄るバイト。迎え撃つはジャージーストライプ。どちらも会心の笑みでいざ騙し合え！さあ！肉を抉り骨を食むようなZ指定の罵り合いを展開するのだ！！良い子は真似スナ！

「シューゾーちよつとおとなしいけどいい子だね」

「ただの小心者ですよ。面倒かけると思いますが」

ぺこりと頭を下げる姉。どんな効果を伴った攻撃かはまだ分からないがいずれあの姉のする事である。例えば頭を下げるという、一見無意味な行動こそがジャージーストライプの今後の子孫に致命的で陰湿な悪影響を……

「やめてよ。色男の世話ならこっちから頼みたい位なんだから。ぜーんぜん問題なし」

でーたー！！

一瞬で相手を煙に巻くジャージーストライプの秘奥技！『ニホンゴワカリマセン』だあ！！

痛烈で突拍子も無い、相手を不安の螺旋に叩き込む皮肉の刃！姉はもう前だか後ろだかワカリマセン（乳的な意味でも）！！

「またフクちゃんは……でもまあよろしくお願いしますね。ほら周蔵、いくよ」

「へ？……どどこに？」

急に飛んできた矛先にまたしても汗を噴出させる僕。僕のかばんを

乱暴に寄越すと腕を掴んで歩き出す姉。っていつか名前呼ばれたの5年は前だったよなあ。

「私の友達が紹介してほしいんだって弟。忘れてた？」

「おぼ……覚えてる。から……」

木彫りのような、にこやかながらも無骨な笑顔を僕に向けつつ渾身の体重をのせ僕の足の甲をふんずける姉。ミシミシと嫌な音が僕の体内を通過していた。

「また明日ねシューゾー」

さわやかな笑顔を振りまき去っていくジャージ。

見送るクサレ。

耐える僕。

クラスの生徒たちの視線に気が付いた姉は愛想よく、隙無く、軽くないした後

僕を牽引車のごとくロックをかまし、廊下へと突き進んでいった。

目的地へと邁進する姉に行き先を尋ねる勇氣は僕には無い。
しかし、姉の脚はとづくに校門を出発しており……民家を潜り抜け
歩道橋を渡り切り切りそれでも一言も無い姉の態度に幾ばくかの不信感
が募る。

「どこまで……行くの？」

多少の？みは勘弁していただきたい。

「駅前のカラオケ」

「か……」

死刑囚に死刑を言い渡す裁判官がその死刑囚の目を全く見ないなんてアリエールのか！？

今あんたがしてんのはまさにそういうコトだぞ姉よ！！せめて絶望に打ちひがれる哀れな弟の顔を見ろよ！！見てやれって！！

「天井知らずの音痴つぶりのあんたに歌えなんて言わないわよ」

ああ、ほっとした……じゃない！僕はあのカラオケBOXという空間が大嫌いなのだ。歌手でもないのに自意識垂れ流しのあいつやこいつが密閉された個室で奏でる不快と退屈とちっちゃな自尊心の三重奏！！耐え難い！！耐えがたきは耐え難い！！

「一度顔見せすればみんな満足するんだから。面倒なコトはまとめ済ました方がいいでしょ？」

確かにこの姉が真実友人が多く、毎日入れ替わりで少人数づつ自己紹介を繰り返す事態を想像すると胃がちくちくしてくるのではあるが。

実に合理的。理にかなっている。姉らしい。

しかしホントに自信があるのなら僕の二の腕を掴んで離さないのはどうか？

「私らは受験生だからクラスの決起集會みたいなもんよ。で、あんたはおまけ。ついで。お寿司の緑色の食べらんないやつ」

それはバランと言っただ姉よ。

「適当に相手したら帰っていいから。小一時間くらい我慢しなさい」

高校入学早々縦社会の壁にぶち当たる僕。そっこの無さそうだからこの高校を選んだはずなのに。

僕の誰にも届かない呟きを完全に黙殺した姉はカラオケ店のガラス製自動ドアをスライドさせる。迷いは一切感じられない。ハラを括った人間だけに許される迅速かつ沈着な所作。

泣きたくなった。

「あ、こっちだよ古都！」

たまたま出てきた女子高生に声を掛けられる姉。その扉から漏れ聞こえてくる、よく知らないロック調の音楽は相当のボリュームだった。

「あ、これ弟の周蔵。別に見たって面白くないでしょ？」

「きゃー！ウワサ聞いてる！やっぱカツコイイじゃん！」

たたり、ではなくボタバタ。

開き直った僕の毛穴は大開放中。僕はじっと自分の革靴を凝視しながら羊の数を数えていた。もう姉と女子高生が何を話しているのか全く聞こえない。聞こえるのは自分の鼓動のみだった。

「あんまりいじらないでよ？話下手なんだから」

羊が135匹、羊が136匹、執事が137人……って多っ！！コ
ワっ！？

「無口な男子かー。いいねー。今時じゃない感じで！」

「そんないいもんじゃないのに」

我次郎が156人……我次郎？我次郎って誰？あれ？

たった15分。

この短時間で人はここまで消耗するのか。

薄暗い比較的大きなカラオケBOXの一室。招き入れられた僕と姉のトモダチらしき女子高生にあつという間に囲まれ逃げ道を消された僕は「アア」「うー」とか言いながら質問責めに合っていた。言葉に溺れる、という稀有な体験を楽しむ余裕など無い。僕はただ汗をかき密やかなうなり声を漏らすのみ。完全に不意を突かれたとはいえ情けないことこの上ないと心から思った。

「周蔵君は歌わないの？」

ずいと差し出される辞書みたいな分厚い本。これで選んで今歌えと？この僕に？

「いいいや……ぼぼ僕はその……」

スキヤットマンか！？それとも放浪の切り絵師？？み過ぎだる僕！
！しかも喻え古過ぎ！！

「緊張しなくてもいいって！ほら、選ぶ選ぶ！」

肩を何人かに掴まれソファーに押し込まれる。そのとき誰かの足を踏んだ気がしたので反射的に振り向くと

「いてえ」

ああ………なんで？

なんで進学校の優等生グループの中にDQNがいるの！？この人種は深夜のコンビニ駐車場とか50円で出来るゲーセンとかに生息してるんじゃないのか！？しかもリーゼントとかのオールドタイプじゃなくジーパン脱ぎかけるニュータイプ！！
よりタチが悪いニューアンスの方じゃないですか！！

「すすすすいません……」

「すすすすイマセン？なんだおまえ、ちゃんとしゃべれ」

だらりと着崩れた制服の胸元をさらけ出し僕の鼻先に詰め寄るDQN。その迫力というか威圧感で僕は呼吸が苦しくなっていた。

「ごめん梶君、弟なんかした？」

「ああ、新木サンの……いやたいした事ねえよ」

姉が割って入ると場の空気が途端に柔らかいものにならなくなっていく。この二人の関係は全く分からないがとにかく助かったようだ。

「ダメだよ新入生おどしたら。梶はただでさえ威圧感すごいんだから」

「そーだ！イケメンは正義なんだから！」

気軽に女子高生たちから罵声（？）を浴びせられるDQNを見て少しだけ呼吸が楽になってきた。
意外と風貌に似合わず温和なDQNなのかもしれない。

「わかったわかった。悪かったなイケメン君」

僕の頭にポンと大きな手のひらを乗せたDQNは近くにいた姉と僕にしか聞こえない程度の小さな声で短く呟く。

「シンキクセーんだよ。さっさと失せろ」

ギリ、と掴まれる髪の毛。頭皮はぎゅうと上に持ち上げられ激痛に襲われる。

しかしその痛みも一瞬。ファイとDQNは背中を向けた。「イラつく面さらしてんじゃねーぞ」ときつちり捨て台詞も置いていく周到ぶり。

完璧だ！あんたの狙いはジャストミート！！
見てよこの僕の足！！ガタガタふるえて止まらないし！！ああビビッてるよ！！だってコエーし！！すぐさま退散するし！！

僕は背中に被さる女子高生の幾つかの声を勢いで振り切り、自由の広がる分厚い扉の向こう側へと転がり出た。

リアル恐るべし！！でゴザルの巻！！

「帰るの？」

壁に寄りかかるように……まるで負け試合の後のボクサーばりの脱力感をこれでもかと身にまもっている僕に対しての姉のこの発言はどうなのよ！？あんた聞こえてたろ！？

「かかか帰る！！もうしょしょ紹介は充分だろ！？」

いつもより沢山回しております！！呂律をたくさん！！

まだ体の強張りは取れていないので走り去ることは困難だが、這ってでも帰ってやる！！

「ちょっと機嫌悪かったんだよ。そんなヘンな奴じゃないよ梶君」

「けけ怪我したらどうするんだよ！！なんで僕がこんな目に合わなきゃならないんだ！？」

くだらない！全くくだらない！！こんなのが嫌だから僕はこういう場を全力で避けながら今まで生きてきたのに！

僕はそういうんじゃないんだよ！適材適所！！僕の『適所』は絶対ここじゃない！！今でもない！！

「そっか」

「そっだよー！」

姉はまだ動こうとはせず僕の足元をじっと見詰めている。
なんとなく去りにくい空気。居心地の悪い空間。
音楽は未だに鳴り止まず扉の隙間から溢れ出していた。

「わかった」

不意に跳ね上がる姉の顔。

「ありがとね来てくれて」

なんだよその顔。

「19時には帰るって父に言っというて」

お礼を言われる筋合いなんか……

「気を付けて帰りなよ」

……あ。

くるりと姉は体の向きを軽やかに反転させるとすたすた歩き出す。
その背中を見ながら僕はその場にペタンと腰を落とした。
他のお客さんも通る筈のカラオケBOXの通路。いやここが飛行機
の滑走路だとしても僕はペタンと腰を落しただろう。

「……」

廊下の少しだけ開いた窓ガラスをボーッと眺める。

そうか。そういうことか。

僕が推薦決まったのは9月。姉がその事実を知ったのだったっておんなじ時期。

嫌だったのは分かってる。あたりまえだ。僕が姉の立場だとしても同じ事を考える。

でもあの姉は「止める」とは一度も言わなかった。他の学校だってまだ受験は出来た。姉が本当に嫌ならそう勧めたはずで、僕が断らないであろう事も姉なら分かっていたはず。

確固たる動機があった訳じゃないんだ。僕だってそんな風に言われたら拒絶はしなかったと思う。

でも入学後の事しか姉は言わなかった。

毎朝自転車漕いでのランニング？体重管理？全部僕のためじゃないか。

好きの反対は嫌い？あー確かに姉は僕が嫌いなんだろう。そこは自信あるよ。でも。

好きの反対は無関心だ。姉は僕に無関心だった？うっとうしいほど干渉されたりう！嫌いではあるがチャンスをくれていたんじゃないか？

だから。

さっき振り返った姉は。

.....

悔しそうな顔をしてたじゃないか！！

「おい君……こんなところで」

完全に初対面。

通路を塞いでいた僕に注意を促そうと声を掛けてきたサラリーマンとスーツの女性に対し、僕は座ったままぐるりと向き直り合い対峙する態勢を取った。

「な、……なに」

訝しげな表情を僕に向けた女性。しかし元いじめられっこの僕はその手の視線は免疫付きまくりなので全く効かない。ええ効きません！！

「おおおおお願います！！」

ゴンツと鈍い音がして衝撃が後頭部までつきぬける！！眩暈もするし手足に微かな痺れも伝わってきた……しかし見事！！

誰が見ても惚れ惚れするような土下座！会心の土下座！THE D
OGENZAだった！！

「お、おいどうしたんだ？やめt」

「その上着！！にににに2分だけでいいんです！！貸していたただけないでしょうか！？」

ぐーりぐーり額をプラスチック製の薄いタイルに擦り付ける僕。まだか！？まだたりないのか！？

ほーれぐーりぐーり。

「き、君！血が出てる！額から血が出てるって！！」

へタレオタの精一杯の意地。是非とも見ていただこうじゃあーりま
せんか！！

クサレ3Dめこのままじゃスマサンゾ！！

ぶつぶ。おおお。

いやあ……ぶれるぶれる。

僕はカラオケの個室の扉に手を掛ける。ん？あり？開かない？

「……」

おお。間違えた。UFOキャッチャーのガラスケースだった。ケースの中に居るごむごむの海賊に向かって僕は軽く会釈をしてメガネを探す伝説の漫才師のごとくフラフラと徘徊する。「めがねめがね」と呟きながらも探してるのはメガネじゃなくてノブ。扉のノブはどこだ？

「ちよつと君……大丈夫かい？」

上着を貸してくれたグッド・ガイが僕をある程度の距離を保ちながら声を掛けてきた。仲間になりたそうにこちらを見ているわけでは無さそうなので僕は無言で親指を彼に向けて突き出すことで返事の代わりとする。

サムズアップ！！

サムズアップ！！

「ああ……じゃ僕は失礼するよ……事情は全く見当も付かないけど」

サムズアップ！！
さむずあつぷ！！！！

「わ、分かった分かった！……なんだか知らんが、頑張れよ」

なぜか激励の言葉を口にするグッド・ガイ。しかし僕はそのドン引きの激励を甘んじて受けよう。ありがとう！謎のグッド・ガイ！僕は3重にブレル彼の背中を見送りながら感謝の意を込め一回だけお辞儀した。

額の傷が少しだけ自己主張していたがまあ問題ない。タオルもグッド・ガイにもらったので鉢巻き状に頭に巻いてあり、今の僕は15パーセントだけランボーと化してるからね。い、痛くなんかないんだからねっ！！

僕は『ゴ』の付く台所の主のように壁伝いにズリズリと横移動する。めがねめがね……めがね？ノブ……そうだ。ノブノブ。

こつ、と左の手首に突起の感触。掴んでみるといやらしくヌルリと回転するじゃありませんか。

うへへへへ。上のノブでは嫌がっててもこっちは正直なもんだなあノブさんよう。うへへへ。

僕は扉を思いつきりひっぱり中途半端なBGMを掻き分けながら部屋の中へずい、と足を踏み入れる。

「あー！シューゾー帰ってきた！古都ー！シューゾーきたよ！」

女子高生は能天気な歓声を僕にぶつけるが、そんなオチも無い出口の見えなさそうな笑顔に付き合ってる暇は無い。

「ちょっとあんた……おでこ何したのよ。血が滲んでるじゃないの」

生徒たちを掻き分け僕に詰め寄るクサレ。
クサレの言葉にザワザワと他の生徒たちも僕の傷にトドメを刺さんと群がってくる。

「うわ。痛そう」

「これちゃんと消毒した？」

「わたしバンドエイド持ってる！」

偽りのいたわりを口の端の昇らせる女子高生たち。僕はそんな見え透いた懐柔策には踊らされないぞ。持ち上げて落すのはいじめの初歩だろ分かってんだよコノヤロウ。

「はいシューゾーくん、屈んで」

ひとりの女子高生が僕の正面に立ち塞がり傷口に手を伸ばす。
間抜けに流れ続けるBGM。
瞬間と瞬間の隙間。

「タオル取るよ？せっかくのイケメン台無しだ」

「ごおが。ういー。」

「……………」

ぺたりとしりもちを突く女子高生。何が起きたのか理解できていないように僕の顔を見上げている。キョトンとした表情。開かれた目。どうやら至近距離での僕の防犯カラーボールのようなゲップに恐れおののいているようだった。

「あんだ……一体……」

僕の袖をグイ、と引き寄せ僕に肉迫するクサレ。喰らえ。

ごがぁ。

「ちよ！……あんだお酒飲んでるの！？」

むう。さすが姉。僕のカラーボールの効果が薄い。精神的ショックも受け付けていないようだ。

「僕はいじめられっこでしたっ！！」

「ば！なに言ってるのよ！？」

「空気が読めない！ノリ悪い！気持ち悪い！115キロもあれば鼻息だって荒くもなるし、コロツケだって10個は食べられる！」

「やめろっつってんでしょうがこの肉団子！！あんだ私のイメージ粉碎する気！？」

シンと静まり返るボックス内。僕と姉だけがもみ合い絡まりあっている不思議空間。

「いじめの力学は縦横無尽に教室内を走っているのです！ちょっとだけバランスが崩れてたりちよつとだけ異質だったりするポイントが大好物！！姉だってこの後ろだか前だか分からない胸でいつ標的になってもおかしくなかった！！」

「てんめえっ！！いくら弟でも言ったらダメなことってあるんだぞっ！？身もふたも無いじゃないよっ！！こちとらウツスラ自覚はあったんだから！！」

うつすらなのかずーずーしい。

僕は姉から視線をずらし名前も知らない女子高生にロックする。

「誰をよぶ？」

「え……え？」

姉は僕の背中にしがみつきありったけの暴言を僕に投げかけているようだ。僕は姉をロックしていないので居ないのと同じだ。デビルメイクライの法則より。

「誰をよぶ？」

「だれって……え？」

「だから！！」

なんでわかんないかな！？これだから3Dオンナは苦手だよ。察しが悪い！悪すぎる！

「あなたが理不尽な力の矛先を向けられ！唐突な嫌がらせを日常的にリピートされ！！誰にも言えない相談できないそんなとき！！ヤツを呼ぶでしょう！！」

「????????」

なんならもう僕が恐怖の対象にしか見えてないんじゃないだろうかこの女子高生。んーしょうがない。わからないってのは別に悪ではないからなあ。彼女を啓蒙するのも僕の役目なのかも。

「ベクトルマン」

「え？」

「ベクトルマン、はい言って」

「ベ、ベくとるまん??」

「そつだ!!」

「きゃっ!!」

僕は人差し指を彼女の鼻の頭に押し付け啓蒙を開始する。恐れおののいたこの顔を眩しい笑顔に変えるその日まで！！

「どうにもならなくなったとき。誰にも頼れないまさにその時！どつすんのどつすんの！！困るよねこまったよねえー！！そこでベクトルマンですよ！！全ての理不尽な力学を自分勝手に粉碎する！そう！ヤツの名はベクトルマン！！」

シネマ・ハスラーと言いつづいたのは内緒だ。

「『タスケテ！。ベクトルマン』だ！！言つて、はい！！」

「た、助けてえ。べくとるまん……」

僕はひよい、と軽くその場でジャンプする。ゆっくり流れる時間の一部であるかな女子高生はただ僕をあほうのように眺めるだけ。だがそれでいい。いまはそれでいい。

そして僕はゆっくりと着地した後、勝ち誇ったようにこう宣言するんだ。

「はいベクトルマンきました。なんか用？」

姉

最悪だ。

「ベクトルマンー！！たすけてー！！」

「とーっ！！」

皆ノリノリである。ベクトルマン（？）に変身を遂げたバカヤロウの姉であるところの私こと新木古都は暴走肉団子のランチキ騒ぎをただただ呆然と見詰めていた。

「さあ悩みを吐き出すのだ！！悩める子羊の胸倉つかんで、このベクトルマンが即解決！！泣こうが喚こうが即解決してやるぞーっ！！」

「カッケー！！カッケーよベクトルマンー！！」

煽るな。煽らないでお願いだから。

「ベクトルマンー！！私彼氏が欲しいんです！！どうしたらいいですか！？」

一人の女子生徒がバカの前に躍り出た。ノリが良過ぎるのは私のクラスの良い面でもあり悪い面でもある。

今は間違はなく悪い面が出てるんだけどね。

私は頭を抱えひとりソファーに沈み込んだ。

指を突き出し赤面症なのか酔っ払いなのか分からない顔色で女子生徒を睨み付けるバカ。

「ドンキで買え!!」

「即解決!?ベクトルマンスゲー!!」

彼氏販売してないから。解決してないから。

「さあ次はどいつだ!?薄毛ならリーブ21!!整形なら高須院長!!それ以外の悩みならこのベクトルマンが一刀両断してやるぞ!!」

なんだ、解決する気ないのか。ってバカ。両断するな。

訳の分からない盛り上がりのカラオケBOX内。まっすぐ私に接近してくる男子生徒の影が視界の端に映りこんだ。

「新木サンの弟は……アタマおかしいのか?」

私の隣まで移動してきた梶くんはなぜかにやにやと笑顔を浮かべながら私の顔を覗きこむ。

「おかしいんでしょうね見たら分かるでしょ?」

「かっかっか!!間違いない!!ありゃキチガイだ!!」

梶君がこんな風に笑ったところは初めてみた。

コワモテで無口。ウワサでは女子大生やOLをとっかえひっかえ遊んでる、ウチの学校始まって以来の問題児らしいが。

特に私たちになにかするわけでもないのに別に嫌われてはいないが、結構シャレにならないウワサもまことしやかに囁かれている。

「まったく……姉の立場も少しは考えろってんのよ。弟がアレじゃ恥ずかしくて明日から学校行けないじゃない」

「そうか？俺は楽しいぜ、新木サンの意外な一面も見れたし」

確かに大声をあげての醜態をさらす、なんて今までの私の学校生活には入り込む隙間さえなかった。てか、そんなものあってたまるか。

「それに、新木サンの事考えてない訳でもないみたいだぜ？ホラ」

梶君はあごで私の視線をバカの方角に促す。ずっと目を背けていたのになあ……なんであんな醜悪な肉団子を

「よく見てみる。足震えてるだろ？」

「……」

飛んだり跳ねたり……せわしなく動かしてはいるが、動きの止まった短い瞬間確かに周蔵の脚は小刻みに震えている。注意深く観察しなくちゃ分からない程の暴走肉団子の悲鳴だった。

赤面症、失語症、対人恐怖症。私にはよく理解できない見えない荷物。

「あいつが話すの苦手なのはすぐ分かったよ、どもりまくりだったしな」

「……」

「頑張つてんじゃねえの？やり方は完全に阿呆だがな」

俺もガンバロ、そういつて梶君は静かにカラオケBOXから出て行った。大盛り上がりの中の喧騒の中、私は弟の震える足を見詰める。

私は周蔵のためにあれこれ世話を焼いていた。もちろんそれは嘘じゃない、嘘じゃないんだけど……

醜い弟が嫌だった、その感情のほうがか確かに強かった。素材は絶対に悪くないのに、痩せるだけでそれだけで周囲の評価は全く違ったモノになるのに。

想像を遥かに超えるイケメンに変身したのはさすがに私も驚いたし嬉しかったりもしたんだけど。

そんなことじゃ赤面症とか対人恐怖症は治らないよね。

「ベクトルマーン……！」

「とーっつ……！」

だから

ちよっど、いじめん。

寝返りを打つ。そんな些細な事がこれほど困難な事だったとは。

「……」

自宅のベッドでの目覚めのひととき。これほど甘美で贅沢な時間を僕は楽しむどころか精神的苦痛と肉体的頭痛によって大量の汗をかいていた。もぞもぞと体をずらす拍子にふと禍々しい昨日の夢の映像が顔を出す。

タスケテー

「うあああああああつ!!??」

ふとんを握り締めた僕の手のひらには大量の汗。それを力任せにふり回しぐるぐるとふとんにくるまる。幻聴だ幻聴だ何も聞こえないなにも僕はしていない。

あああそれは僕じゃない！僕じゃないんだ！ぼんやりとした昨日の夢。カラオケBOXでの忌まわしすぎる風景。悪夢にしたって夕チが悪いよ！！そんなバカなことって！！

ししし深呼吸！！酸素酸素！！

「……」

僕の細胞のひとつひとつに少しずつ酸素が行き渡るのをゆっくりと

噛み締めながら、僕は静かにまぶたを下ろしていく。
そして訪れる静寂。平穩。まだ汗は若干噴出しているがなんとか理性を戻していく。

そうだよ。

夢？夢オチ？

ギャルゲーなら不買運動に発展しかねない禁断の秘儀『夢オチ』。
まさかそんな手垢にまみれた恥ずかしい手法がリアルで体感出来るなんて、世の中はやはり何が起こるか分からない。

しかしそうと分かれば何を恐れることがあるのか？所詮は夢。脳が作り出した儚い幻影に過ぎない。

いくらリアルだとはいえ夢は夢！誰にも罪は無く、当然僕にも罪があるはずg

「ベクトルマーン」

「うああああああああああああつっ！！！！？」

「早くおきなよ。遅刻するよベ・ク・ト・ル・マ・ン？」

姉！？

なぜクサレ3Dが僕の枕元で僕の顔を見ながら頼杖をついているのか！？それになんだ！？お前の食欲を奪うのが目的だ、とでも言わんばかりのにこにこヅラは！？気持ち悪い！！

いや、ちがう！そんなことじゃない！問題は……なぜこいつが僕の悪夢を知っている！！！！？

「みんなに会ったらお礼言うのよ？酔っ払って倒れたあんた皆して家まで運んでくれたんだから」

何を世迷いごとをノベているんだこのメスブタめ！！どんな能力を行使して夢の内容を知ったのか知らないがそれは僕の夢だ！！大体僕があんなアタマの悪そうなノリだけの言動で立ち回るはずがないじゃないか！？

全く冗談じゃない！！

「んじゃ私先行くからねー」

跳ねるようなステップで僕の部屋から出て行く姉。にしても。

語尾を延ばすな気色悪い！拾い食いでもしたんじゃないのかりバー

シブルオンナめ！（当然乳的な比喻だ！）

僕は気だるい体調に違和感を感じながらも制服に袖を通す。

僕は何もしてないんだから学校行かない理由はないからね。な、ないんだからねっ！

みる。

それみる。

電車に乗って学校近くの駅で降り、改札を抜けて民家の並ぶ中を縫うように歩く。

歩道橋を渡り、たまに謎の頭痛の為にアタマを抱えながらも僕を待ち受けるのは単なる日常でしかない。

彼方にはあるが学校も見えてきた。大丈夫、順風満帆ヨーソロー。誰にも気付かれずただそこに在る。そんなカツオだしのような学校生活が僕を待っている。そんな理想の実現の為今日も僕は無機質化のスキルをありつただけのマジックポイントで

「おっはよ!」

「うああああっ!」

なんだよ!?!今日は驚いてばかりかよ!?!イキナリ肩叩くなんて傷害罪で告訴してやるからな!!

「そんな驚かなくてもいいじゃん?」

「あ……せせせセールスの……」

「だから違っつてば!自己紹介もしてなかったからしょうがないけど」

目の前のセールス・ウーマンは90度近く腰を曲げきっちりと僕に向かって頭を下げた。

「楠 理子。リコでいいよ！」

おおつ。見たことある。

ギャルゲーでこんな見たことある。礼には礼。挨拶には挨拶で答えねばなるまい。ここはひとつクールに決めておこつ。

「あらららあらかしゅーゾーです」

無理だった。

「あらかきくん？難しい名前だね」

しかも聞き取れなかったようだ。

「しゅーゾーくん、でいい？」

「……も問題ない」

僕らはもうまじかに迫っていた学校を見上げる。古ぼけた……見るからに堅苦しそうな建造物。

学校に吸い込まれていくように消えていく大勢の生徒たちの中、クスノキリコは憂鬱そうにため息を吐いた。

「しゅーゾーくんはトモダチ出来た？」

「……？」

コノ学校に来るような生徒はトモダチなんぞ二の次、あくまで副産物程度の認識しか持つてないだろうと思つていたが、クスノキリコの少しだけ縋るような目を見て「それでもない生徒もいるんだな」とヘンに納得する。あんなものは居てもいなくてもどつてコトない僕からしたらちよつと新鮮な感情だった。

「私のクラスみんなおとなしい感じでさ。みんな『他人なんか知らない』みたいにしてるの。なんだか私浮いちゃつて」

うおおおおっ！！

クラス交換してくれえええっ！！

「私もつと高校つて楽しそうなイメージあつたから………なんか憂鬱」

そつだ！やつと分かつたのか！？

人生なんて所詮消化試合みたいなもんなんだよ！！いくらトモダチトモダチ叫んだところで卒業すれば忘れるし、たまに会つても自慢話くらいしかしないんだから！

人間はひとりなんだよ！！せめて死に場所選ぶ自由だけを心に定め、あとはひたすら孤独なハイウェイをデカイバイクで直進するだけなのだああ！！うはははははははは！！

『たすけてーっっ！！！！！！』

「きゃっ！……なになに！？」

飛び上がるように周りを見回すクスノキリコ。合唱部の朝練のような大合唱に僕の毛穴は瞬間沸騰。あれは夢のはずだろ！？ちよっとタイム！！まった！！ブレイクう！！

「？……3年生のクラスみたいだけど、なに大声出してるんだろっ？」

「ささささささあ？」

三階の教室のベランダから手すりに掛けた洗濯物のようにわらわらと騒がしい人ばかり。こちらを指差す者もいればブンブン腕を振る者も居る。

『ベクトルマーンっ！！！！』

3階という高所から畳がぶつかってきたような声のビッグウェーブに途端込み上げる吐き気、寒気。それに……記憶！！

「なんだろ？こっちの方見てるみたいだけど？」

事情が全く分からないクスノキリコはにこにここと3回の教室に手を振っている。皇族かおまえは！？

「なんか分かんないけど楽しそう……ってどこいくのシューゾークん！？」

「かかかか帰る！」

僕の腕に掴まったクスノキリコを引きずったまま僕は一刻も早く戦
略的転進を敢行する！一部の迷いも許されない切迫した一大事なの
だ！！

「授業はどうするのっ？シューゾークんっつてば！！」

「かかかか関係ない！さぼる！」

転進なんだからね！？後退じゃないんだからねっ！？

「おいおい……サボりは見逃せねえな」

「ぐはっ！？」

ぬるりと突然出現した腕に僕の首は締め上げられる。それはがっち
りと僕の行動をキャンセルしずると校舎方向に引きずられた。

「ほい、仲良く登校中」

ぐい、となんとか視界を確保し暴漢のツラを目に焼き付けてやろう
と必死に首を回す。

「あ……あ……あ……」

カラオケのDQN！！！？最悪だ！！なんでこいつがここに！？て
いっつかなんて僕に危害を！？一体何が目的なんだよこの暴力男は！？

「ようベクトルマン！いい朝だな！」

ふざけんなよ！！締め上げられて『そうですね』って僕が返事する
とでも！？なにニヤけてんだコノヤロウ！！

「あ……あの！」

「ん？」

DQNに立ちふさがるはクスノキリコ！！いいぞ淋しがり屋！！お
前のイジジなネガティブパワーで僕を早く助けてくれ！！期待度
MAXクスノキリコ！！

「なんだあんた？こいつのツレか？まさかもうオンナ作ってンじゃ
ねえだろうなてめえ」

「ぐ……ちち違い……」

なんでこっちの被害が増大するんだよ！？こいつの腕は万力で出来
てんのか！？ちよつとはバファリンいれとけよ！！

「と……友達です！乱暴は止めてください！」

そんな覚えはねえっ！！

「奇遇だな。俺もなんだよ」

あほかああああっ！！てめえの友達は鉄アレイだけだ！！

「ってことはだ。お嬢さんとおれも友達だな」

「え？」

「友達の友達は……友達だろ？」

「そうなりますね」

ならねえよっ！！！！なつてたまるか！！キラキラ目を輝かせてな
いで助けてくれよクスノキリコ！！淋しがりにも限度ってあると思
うんだ僕！！

「俺、梶雄介3年、よろしく。あんたは？」

「1年の楠理子です！よろしくお願いします！」

よろしくすんなよろしくすんなつてば。
なんかもう意識が朦朧としてきたぞ。

『ベクトルマーン！！』

「おい呼んでるぜ？」

知るか！！つてかあんたが首絞めてて呼吸さえいっばいっばいな
んだよ！！

「べくとるまん？つてなんなんですか？」

君の無邪気さと人恋しさは痛いほど伝わったよクスノキリコ。せい
ぜい誘拐されないように、知らない人にはついて行かない様にすれ
ばいいんじゃないかな。

「困ったときは呼ぶんだよ。理子もな」

「困った時ですか？」

「ああ。きっとなんか変わるから。覚えとけ」

「はい！覚えておきますね！」

仲ムツマジンですね。僕の存在はもう端っこなんですよ。うっかり
ます。

『タスケテー！！ベクトルマン！！』

あー！！うるさいうるさい！！
僕のスネークバリの隠匿学校生活。
見るも無残なスタートを切る。
でゴザルの巻。

午前中の授業をこなししばし呆然とする僕。

理解は二の次、ものすごいスピードで黒板に書かれていく文字や数式をただただ書き写していくだけの作業。教師たちは僕ら生徒の理解の度合いを確かめながら授業を進める、なんて無駄は全くする気が無い様でさつさと教科書をめくっていく。和やかさなど微塵も無いコミュニケーションなど不必要。

カタナ鍛冶のように「技術は盗んで覚えやがれ、このペーパーが！」的なオーラをどの教師も満遍なく醸し出していた。

……。

いやあ、快適！悠々空間！

和気藹々と進む授業なんかマツピラな僕は理解出来たかどうかはさておき、その突き放された授業内容にとりあえず満足していた。知識を詰め込むだけ詰め込み、後は内容を生かすも殺すも個々人の努力しだい。知識を消化し続ける自信は全く無いがそのクールなスタイルには大いに共感を覚えた。

「なんだよコノ授業……コピー機になった気分だよ」

僕の前に座っていた男子生徒ががっくり肩を落す。まあ、気持ちには分からなくもない。僕のようにハナから底辺すれすれの泥仕合を覚悟していなければ絶望感にも浸るといふものだ。それほど圧倒的な知識の物量攻勢だったからなあ。

「そう思わない新木君？」

「へっ!？」

いつの間にか振り向いていた男子生徒は僕の顔を覗きこみ苦笑いを浮かべている。

いかにも優等生、縁の無いシンプルなメガネをかけ屈託のない物腰よく通る声。それに随分と整った顔立ち。

リア充臭が半端じゃない。よってこいつは敵味方で分類すれば間違いない敵である。

「ああ!でも新木君はお姉さんに教えてもらえばいいのか!あんな美人の家庭教師がいるんなら新木君の余裕の態度も納得だ」

さて。

そんなにいつぺんにボケ倒されてもツツコミ切れないぜ坊主。

まずオネエサンは美人じゃないし、何か教えを請うつもりもさらさらない。そして、僕には余裕など皆無!分かったらその爽やかな笑顔をやめねーかこのリア充がああ!!

「なになに?なんのハナシ?」

横の席から唐突に掛けられた明るい声。その声の主はニコニコと笑みを浮かべながら僕とリア充の様子を伺っている。

「新木君はうらやましいって話。智花ちゃんもそう思わない?」

「あー、そうかも!イケメンはいいよねー。で推薦組でしょ?隙ナシって感じ。でも藤崎君だって結構イイ線いってると思うよ」

「はいはい。気を使わせて悪いね」

「どういたしまして」

僕が陶器のタヌキのように存在感を消している間、僕の目の前で応酬される言葉のピンポンだま。知らない固有名詞が気軽に飛び交う異空間。一体いつの間に己の個人情報を交換し合っていたのか、「藤崎」と呼ばれたりア充と「智花」と呼ばれた女子生徒は実にナチユラルに会話を楽しんでいた。

……。居心地悪い。落ち着かない。

なんだろう？このいけ好かない感じ？

「新木君はお弁当？」

誰が作るっていうんだよ！？……しかし僕の家庭環境など知る由も無いこの女生徒にいきなりブチ切れるほど僕も小さな男じゃない。

「ててて適当に……パンでも」

「お姉さんに頼めばいいのに。そしたら僕にもお裾分けよろしく」

だからコイツは何がそんなに嬉しいんだよ！？いちいち爽やかな空気振りまいてんじゃねえ！！

「あー！わたしもわたしも！」

調子に乗ってんじゃねえぞ女子生徒！！てめえなんざ名前が僕の嫁

の『智花』と一緒にやなけりや顔写真に『わたし寂しいの』ってキャプション貼ってネットにばら撒いてやるとこだ！エロ親父の鼻息で毎朝目覚めやがれ！！

「シューゾークーン！お昼買いにいこー！」

ガラガラと扉が開いたかと思うと同時、小学生のようなテンションで片手をピンと伸ばしちっさい女の子が僕に向かってきた。

「？新木君の知り合いかい？」

「あー、さすがなんだー？」

にやにやし・て・ん・じゃ・ね・え！！てめえらリア充と一緒にすんなー！！

「シューゾークーンの友達の楠理子です！シューゾークンがいつもお世話になってます！！」

友達大好きクスノキリコは元気にニッコリと笑って挨拶する。

「あ、藤崎です。よろしく理子ちゃん」

「きゃーちっちゃい！カワイー！わたし智花！！」

余程理子はうれしいのか二人の手を握ったままブンブン振り回し握手のつもりで興奮していた。なんつーか捨て犬みたいだよな理子つて。

「理子ー。周蔵いたか？」

ぬぼつと立ち昇る不穏な陽炎が教室内を嘗め回すように観察する。
一瞬にしてクラスの雰囲気の硬度が増したような気がした。

「あ！梶せんぱーい！！こっちこっち！」

ぴよんぴよん跳ねる理子を尻目にひそひそと僕に声を掛けるリア充。

「あの人も……新木君の知り合いかい？理子ちゃんとギャップがあまりすぎるよっな……」

……。
う。

うははははははははははっ！！そっだその顔だ！！その絶望を湛えた目、ビビッて引きつった歪な笑顔！！
はじめてDQNが役にたったぞー！！あいつにはあとで褒美に窓枠のホコリを進呈しようじゃないか！！

「ほんものだー。はじめて見た」

「え？智花ちゃん知ってるのかい？」

「うん、割と有名人だよあのひと。雑誌のモデルとかのバイトしてるし」

「へー！ワイルド系ってことかあ。すごい人と友達なんだね新木君」

……。

万力ゴリラの褒美は取り消し！！アフリカに送り返せ！！全くなん

の役にも立ちゃしねえなあのだQ.N.!!

「なんの罰ゲームなんだよそれは？」

春の陽気に煽られた万力ゴリラの提案で、僕らは四方を校舎に囲まれた中庭で芝生の上にペタンと座り昼食を取ることになった。各々購入したパンやら惣菜やらを自分勝手に頬張るが、僕にひとつ問題が浮上。

「そんなにおんなじ物ばかり食べるの？」

「……」

訝しげな表情をアカラサマに僕に向ける理子とDQN。まあそれはそうだろう。ギトギトのカレーパンばかり5個。そして1個と半分を消化した時点で止まる僕の手。ついクセでほとんど無意識。久しぶりに見た油でテラテラ怪しい光を放つカレーパン、買わない理由があのとときの僕には思いつかなかったのだ。

「さすが元デブ。買った方がいいが昔みたいにはいかねえってか？」

吐き気がする。イヤまじで。

「デブ？誰がですか？」

小さなスナックパンをもふもふ頬袋に詰め込んでいた理子とその作業の休憩がてらDQNに問いかけた。

「周蔵だよ。こいつの姉貴から聞いたんだが100キロ越えてたんだってよコイツ。170そこそこしかねえくせに」

「またー。冗談ですよね？だって今のシューゾーくんに私の体重言う勇氣無いですもん。勝っちゃいそうぞ」

「いや、マジらしい。俺もびっくりしたよ」

姉は…… まあ僕のコトは秘密にしておきたかったんだろが、カラオケの一件で自ら暴露した僕には特に隠す理由も見当たらない。わずかなコンプレックスは持っていたがそもそも僕のフォルムが円形だろうが線形だろうが気にするヤツなんかいないんだから。

しかし、そんなことより……

「梶ー！ピクニック？」

「今度わたしも参加するー！」

「そのちっちゃい子紹介しロー！」

さらし者である。主に3年生の生徒から中庭の僕たちに浴びせられるヤジ。うすうす感ずいてはいたのだが、この中庭で食事をする生徒なんかいないんじゃないか？それどころかほとんどの生徒は教室で昼食を取るのがこの学校の通例のような気がするぞ。

適当に受け流し気にも留めないDQN。目立つ行為は避けたかった僕はまだ春だというのに汗をポタポタ垂らしていた。

理子はもふもふと頬張りながらパックのジュースをチューチュー吸っていて、周りの視線などあまり気にして無い。小動物の食事はいつも全力投球なのだ。一心不乱にワンツーワンツー。

「めずらしいじゃんカジ……あんたが誰かと仲良く食事とか」

一階の廊下の窓に寄りかかり気だるそうにDQNに話しかける3年生と思わしき女生徒。顔には多分に意図的な装飾が施され他人の目を常に意識していることがありありと窺える。

「フリー理子！牛乳買ってきてくんねえか？」

「もふ？いいれふよ！」

DQNは自分のくたびれた財布から1000円札を理子に手渡す。

「お前も自分の好きなヤツ買っていいからな！」

「ふぁーい！ゴチでーふ！」

ひらひら1000円札を振り回す理子の走り去る姿からは電子的な効果音が聞こえてくるようだった。タラちゃんのなアレだ。

「やさしーんだ」

「なんだよつつせーな。失せろ」

友好的とは程遠いDQNと一階の女生徒。むしろDQNの方がイラついているように見える。

……。

うごけねえー！！なになにこの緊迫感！結界！？結界の中にいるの

僕！？

たたたた退散しなくちゃ今すぐに！！

「そいつは？あんたイケメン好きだったっけ？」

「てめえらとツルムよりゃこいつらとメシ食った方がうまいんでいいから失せろ」

なに？

なにこの間？

なんだかあのねえちゃん物凄く睨んでんぞおい！ちゃんと責任取れるんだろうなこのDQNヤロウ！！いや、責任取ってくださいお願いします。

「じゃ……またねーカジ」

「けっ」

ふわりと優雅に立ち去る自意識過剰気味の女子生徒は去り際まで僕を睨んでいた。その証拠に僕の背中中はプールの滑り台のように汗が絶え間なく流れていたのだ。

「ひひひとつ、聞きいてもいいかな？」

「おう」

「理子を……ぎゅ牛乳買いに、いいかせたのって」

「おう、やっぱり気付いたか。あいつにまで危害が及んだら困るから

な。標的はお前にしといた」

なななななななんだよ標的って!!!??わけわかんねえっ!!!
いたいなにを言ってるんだこいつは!!!???

「お前だつて見当付いてただろ?まあそんな急にはこねえから心配
すんなつて!」

来ない?なにが来ないの!?急にはってコトはそのうち来るの!?
何が!?何が来るの?!バイオレンス臭立ち込めてんぞ万カゴリ
ラ!!!

「面白くなりそうだなあおい!」

かっかっか、と高笑いするDQN。僕は足元の余ったカレーパンを
眺めた瞬間吐きそうになった。

放課後……理子とDQNと共に駅までテクテクと下校し（激しい違和感に襲われたのは言うまでもないが）自宅マンションに到着した僕は小ぶりなダンボールに嬉々として対峙していた。

そう。僕の日常はまさにこういうことなのだ。

リア充とおっかなびつくり対話？

隣の席の女生徒とおしゃべり？

迫力満点の自意識だだ漏れ上級生に睨まれつつの食事？

バカ言っちゃいかん！！そんなものはヒ・ニチジョーだ！！そんなものが僕の生活の中に割り込んでくるなんて全くおぞましい！！あほらしい！！

僕はぴりぴりとダンボールに貼られた嚴重なガムテープを剥がす。

w k t k。

いでよ第2世代インテルCore i7 2600K！！4コア8スレッドの神々しい勇姿をいざ白日の下にさらけ出すのだー！！

「……………おおおお」

クール！！ソークール！！

なんで人はこの青いロゴに惹かれてやまないのか！！控えめなデザインに隠された野蠻とも言えるパフォーマンス！！

DDR3トリプルチャネル！！（マザーは交換済みだ！！）当然のよ
うにターボモードも搭載！！

Core i7-980Xの6コア選択も考慮したがまだ様子見！高いからね！！いまはこの選択がベスト！！性能的にも申し分はない！！さようならコア2DUO！！長らくしつこくお世話になりました！！お疲れ様でした！！

「なに買ったの？嬉しそうにして」

移植換装は少々手間もかかるがそれもまたタノシ。サブPCの鈍重なノートでも引っぱり出しじっくり進めるとしようじゃありませんか。あ、最近はメモリも値崩れしてきたし、このさいバルクで構わないからいつそのこと4G×3で万全の態勢を

「おい、周蔵ってば」

「……………」

なぜか最近の姉は僕の部屋にすることが多くなっている。一体何を企んでるのは知らないが不気味で不吉だ。

「そついやあんたお昼中庭いたよね？梶君と可愛い女の子と一緒に」

「そそそそれが……………なんだよ」

「彼女できたらちゃんと紹介すんのよ？私もみてみたいしねー」

「……………」

開いた口が塞がらない、という体験を今初めてしている。一体今日の姉はどうしてしまっただらうか？夕食前には僕のあまり広く

も無い部屋で雑誌を持ち込み寝転がり、夕食後には僕の部屋で教科書を何冊か持参して眺めていた。

そんな姉の挙動不審な態度を恐る恐る眺めていると不意に立ち上がった姉が僕の方を見てこう言い放った。

「なんか飲む？」

ナンカノム？

「私コーヒー入れてくるから。あんた何がいい？」

ナニガイイ？

「コーヒーでいっか。持ってくるから待ってて」

マツテテ！！？？

すいと軽やかに消えていく姉をホーゼンと見送る僕。何が起ころうとしているのか、いやもうすでに起こっているのか。

「……………」

これはチャンス。

姉が部屋から出て行った今、ここしかない！

誰も僕の部屋になんか今まで入ってこようとしなかったから存在さえおぼろげだった『アイツ』の出番なんじゃないか！？

多感な高校生には必要不可欠！！砂漠にラクダ、ロシアに暗殺、メイドにご主人様がいるように！！現代高校生にはこれがあるじゃない

ずるずる、ずるずる。

ずるずる、ずるずる、ずるずる、ずるずる、ずるずる。

「……」

異様。異質。胃痛。

姉の意図が全く理解できない。人間は『分からない』『理解できない』モノは取り合えず排斥するのが人類の歴史とハリウッドの伝統なのだが……あいにく僕はマッチョマンでもタフガイでもない。よってなんら対抗手段は浮かばない。お手上げ、白旗、テン・カウン

んが！せめて死ぬときは前のめり！せめてこの姉の奇行の訳くらいは知りたいわけで。

「ああああの……」

「私寝るときブラしないけど欲情したら警察つきだよ」

「……」

そう言い放った姉は自室から僕の部屋までずるずる運んできた布団にさっさと潜り込む。しかし前だか後ろだか分からない粗末なぼーの分際で『欲情』とは……姉であることを差し引いても充分痛々しい。

「つて、ななななんのつもりだよ！どどどつしたんだよ！」

姉に自覚と精神鑑定を促すのはまたの機会に！今は差し迫ったこの状況をなんとか打破しなければ！！

「あんたは人と距離置きすぎ。そんなんじゃいつまでも対人恐怖症治らないよ」

「だだからってなななんで」

「ほらその汗。ドモリ。家族相手にそんなことじゃあんたの学校生活心配なのよ。せめて私相手に練習しときなさい。触ったら殺すけど」

触ってたまるか気持ち悪い！！僕のプライベート空間は！？男子のデリケートゾーンをどうしてくれるんだよ！？横暴だ！！ウクライナの秘密警察かこいつは！！

「……」

「周蔵？」

僕の脚は実に自然に部屋の扉へと向かう。敗者は去るのみ、いや別に負けたわけじゃないとは思っただけ。

「ちょちょちょっとコンビニ行って来る」

「あ、私抹茶オレ買ってきて」

「え……でででも」

「寝ないで、ま・っ・て・る・か・ら！」

「ひ、ひゃい」

もはや退路は絶たれた。

なんて素早い包囲網。姉はよく言えば意志が強く、悪く言えば頑固娘。意志決定に到るまでの道筋でかなり考え抜いて行動に移すタイプなので、一度決まってしまうと姉自身も自分で決めた決定に振り回されるほどの融通の利かなさ。

なので僕なんかは何を言っても姉のイカレた行動を修正するなどムリ！！

この時点での『悪』とは姉の決定に従わないモノ全て！！プーチンばりの強権主義者、それが新木古都（18）なのだ！！

僕は地面に肩が付くんじやないかってくらいがつくりと、深夜のコンビニを重い足を引きずりながら向かったのであった。

「いいやつぶつづつづつ！！」

コンビニ帰りの薄暗い路地裏で僕は勝ち鬨を上げる。さあ歌え！踊れ！幸運の女神のケツを蹴り上げろつ！！

おつりの200円、それを投入した瞬間手ごたえはあった。微かに心が震えたのを感じつつ、スロットを360度ムリムリつ！と回転！途端ゴロリとそいつは姿を現した！

それをオモムロに捻り上げカプセルを開放、中から出てきたのはまごつち状のピンクの球体。そのド真ん中に配置された大き目のボタンをw k t k kしながら押し込むと……

『おー！』

『ぶちとまとボンバー！』

『なんだっけ』

次々再生される短い台詞の大洪水。僕は声オタではないのだがわかるよ！！君らの気持ちはわかるようっ！！ついつい連打してしまう中毒性があるよ！？ぼち。

『私が……いてもいい居場所がほしい』

あるんじゃないかな！！どこいってもいいんじゃないかな！？

なんだこのむずがゆさ！背徳感！上がったテンションのやり場の無さ！この感情を「キモチガ悪い」と切って捨てるのは容易い。しかし無かったコトにするには余りにも衝撃はデカく、爪あとは深い！！

いかーん、ハマッってしまいそうだ。とりあえずコレを持って帰り姉に見つからないように速やかに中の人を特定するとうしようじゃないか。んで落ち込んだときにそつとポチる……いいんじゃないかな、なんかいい買い物したなあ！！

がちゃり……かこん。

ん？

3台となりのカプセルトイの販売機。そこにいつのまにか人影参上。

がちゃり……かこん。

がちゃり……かこん。

がちゃり……かこん。

がちゃり……かこん。

おいおいおいおい。なんとその人影は機械的に次々お金を投入しぐりぐりとスロットを回す。そして中身を改めることなくすぐ脇に設置されたゴミ入れに放り込んでいた。

がちゃり……かこん。

がちゃり……かこん。

がちゃり……かこん。

がちゃり……かこん。

アレだけ回せば中にはレアモノも入ってるんじゃないのか？ってい

うか興味ないならそんなもの回すなよ。

がちゃり……かこん。

がちゃり……かこん。

がちゃり……かこん。

がちゃり……かこん。

……。いや、いいよ別に。……僕に害があるわけでも無いから。
でもさ、お金の価値ってあると思うんだ。

がちゃり……かこん。

がちゃり……かこん。

がちゃり……かこん。

がちゃり……かこん。

なんなら僕が人影が去った後で回収なり物色なりすればいいわけで。
まあ多分やらないけど。

がちゃり……かこん。

がちゃり……かこん。

がちゃり……かこん。

がちゃり……かこん。

「つて！！あああんた！！」

「はああ！？」

パーカーのフードを目深に被っているので顔は分からないが、ほとんど水着のような面積しかないジーンズから突き出た真っ白く細い足、華奢な肩幅、どうみてもオンナ。オンナDQNだった。

「なな何が目的なのかしし知らないけど……しよしよ職人仕事には敬意をははらえよ!!」

「なにあんた……バカ？オタク？」

「ぼぼぼくがオタではばバカなのは、関係なない!!」

「ん……？あんた……」

オナナはフードをぱさりと脱ぐ。距離の開いた街灯の明かりでもすくに分かった。

「カジと一緒にいた1年？」

自意識過剰なのは深夜であっても健在なようで、薄暗い裏路地に到ってもその睫毛や唇は不自然な威圧感を発している。んが!!しかし!!

「ただだから!!ぼぼ僕が誰といた何年生でああっても!!あんたがどどこかの誰かのここコダワリを踏みにじったことには、かかわりない!!」

「ちょ……おちつけよ。いきなりそんな」

「そそそんなポンポンすす捨てたら僕のおお雄たけびがバカみたいじゃないか!!」

「知るかよ……なに言ってん」

「そそののか、カプセル一個一個に人を一喜一憂させるち力があるのに！！あんたが捨てたそれ！！違う人にはか価値のあったモノかもし、知れないじゃないか！！」

「おいおい、あたしのハナシを……」

「才能のある人からさき、才能を認めた人たちへのバイパスをここ壊すなよ！！」

ああああ！！どんどんむかつてきた！！

そこでしか生きられない、そんな人たちはいつぱいいて……自分の殻からはみ出しても怖くても多分みんな頑張つて折り合いつけてやつてるのに。誰にも迷惑かけてないし彼らの生産活動を啗う権利がこいつにあるのか！？あるわけない！！そんなもの誰にもあるわけないんだ！！

流れる沈黙。しかし引くわけにはいかない。なあと、沈黙には僕は慣れっこだ。

微妙な空気の中に存在する、まさにThe world！！さあ！！酸欠の金魚のごとくのた打ち回りやがれ！！

「……」

「……」

あ……あれ？余裕？

オナナは明るく染まつた量の多い髪の毛をわっさわっさわ揺らしながら僕を睨みつける。僕の心が早くも悲鳴を上げそうです！！ち、……

…沈黙こわい！！なんか言ってくれよ！！お願いします！！

「あーメンドクセー。なんなんだよお前は」

自意識過剰オンナは気だるそうにそう呟くとすつ、と路上に屈み込んだ。

「手伝えよ。サイノーなんだろこれ」

ゴミ箱からカプセルをひとつ取り出しパカと中身を僕に突き出す。

「持って帰るから。手伝ってくんない？」

「……あ、うん」

僕はゴミ箱に身を乗り出し中身の入っているカプセルを選び分けて取り出していく。ひとつひとつオンナに手渡し、オンナはパカリパカリと中身を取り出す。

「……」

「……」

薄暗い中での沈黙。パカリパカリと間抜けな音だけがゴダマしている午前1時。

「ふ……ふふ」

暗がりでおんナの肩が揺れていた。

「あー！夜中になにしてんだあたし！パカパカパカパカ馬じゃねー
つつーのー！」

何がツボだったのか？

おんナは妙におかしげに次から次へとカプセルをパカパカしていく。

「とつとつー！！」 パカ

「つりゃっー！！」 パカ

「ほら、おじり」

「ど、どどどつも」

『ちょっとまってる』そう言われホントにポケットと待っていた僕は阿呆なのか？オンナの手にはぎつちり詰まったおでんの串が溢れんばかりの大きな目のカップ。それを手渡されどうしたらいいのか分からない僕にDQNオンナは声を掛ける。

「でも変わってんな……チャラそうに見えてオタクって。完全に無駄使いつて感じ。あつっ」

湯気が立ち昇るカップから牛スジを取り出しワイルドに齧り付くオンナの横顔は、さっきまでの威圧感は無かったかのように幼く見えた。

「やささつきは……なんで？」

僕のたどたどしい問いかけでも何が言いたいのか察したようで、アタマをワサワサかきながらバツの悪そうな表情でこちらを見る。まあ相変わらず僕の視線は曖昧に泳いでいるわけだが。

「今日中に使っちゃいたい金が余っちゃってさ。何でも良かったんだけど。こんな時間でお店も閉まってるし」

「……………」

このオナナの口から『お店』と出てきたことに危つく萌えそうになった。あつぶねえ！あつぶねえっ！！
しかし言ってる内容自体は僕にはよく理解できない。

「もももったいないよ」

「まあね。でも」

.....
価値の無い金つてあるんだよ、オナナはそう言いながら大根に齧り付く。とことんワイルド、ここは食堂でも自室でもない往来だといふのだ。

「あ、そついやあんたの姉貴、新木古都なんだろ？」

「うっうっうん」

「どつちななのよ.....まあいいや。あの堅物の弟かあ、.....よく似てる」

「はははじめて、いわれたよ」

「そつ？あんだ女顔だし融通利かなそうなたことかそっくりだと思っけど」

「わわわからないけど」

「いいなあ.....あんな感じ。あたしもあんな風になりたかった」

「……？」

嫌味か？でもそんな風には見えないし。

ジジ、と街灯の微かな瞬きにうつすら照らされ一向に動こうとしないオンナ。人影も無くなつて久しいというのに帰る気配ゼロ。多分このオンナは今僕が立ち去つても全く気付かないんじゃないか？そう思うほど虚ろな目をしてビルに背中を預けている。

「なあ」

「ななななに？」

問いかけはするもののやはり空虚な横顔。今の僕にはこのオンナがすごく小さく見えた。

「あんた童貞？」

「がぶばっ！？」

鼻から飛び出すちくわ。なんかっーんてした。っーんて。

「じゃなきゃオタクなんてやってないよねー」

「……！！」

あああああやまれええええっ！！全国の自宅警備の職にイソシム同志たちに謝罪しろおおおっ！！

なんだその余裕の表情！！言っておくがぼぼ僕が本気出したら3次元の女なんかすぐだすぐ！！なんか吊るしたり足とかでされたり…そんなんだろ！？ららら楽勝だよラクショー！！イメトレ何年や

ってきたと思ってるんだコノヤロウ!!

すくりとジーンズのケツを叩きながら立ち上がったDQNは「さて」と呟きながら僕の方を見る。

「相手してやるよ」

と、『シヨージュ取ってくれない?』的なテンションで僕の袖をそつと握った。

「いや、おこわりします」

びくり、と握った僕の袖から伝わる振動。見開かれた派手な瞳。

「いや、だからさ」

「おこわりします」

ぽりぽりとアタマを掻くオナ。なにやら深呼吸をしているようでTシャツの胸の辺りが激しく上下する。

「いいか良く聞いて。あたしB86(D)W57H85で完璧モデル体型なの。てかたまにモデルやってるし。理解した?」

「ははははい!!」

詰め寄る迫力が半端無い。さっきまでの様子が一変、ただのDQNに変化を遂げている!!

「言い寄る男もいっぱい。それこそ学校でも街中でも、スカウトな

んかしょっちゅう」

「ははい！りよりよ了解ししました！おお綺麗だと思います！
」

派手な装飾もコダワリと言えばコダワリだ。毎日毎朝かなりの時間を割いているのだろう。そしてその上でのスタイル維持。その辛さは僕にも経験があるので多少わかる。その徹底振りは尊敬できるコダワリ気質だ。

「そのあたしが相手しゅ」

「おことわりします」

ぶるぶるとわななく唇。かなりの圧力が加わっているんだろう歯軋り。あ、ちよつと涙ぐんだ。

「……黙って聞いてりゃこのオタクヤロウ！！なんで拒否る時だけ噛まずにスラスラしゃべってんのよ！！」

あ、そういえばそうだ。不思議なこともあるもんだな。僕は胸倉を掴まれながらも割りと冷静にそんなコトを思う。

「こっちは善意で言ってあげてんの！わかる！？」

「なななんとなく」

「じゃあ断る理由ないんじゃないの！？」

「でででも」

「でもなによっ…！」

「べべべつにセックスしししなくても、なななにか辛かったんなら、はは話してみればいい、いいんじゃないかな？」

胸倉にぐっ、と込められた力には大して威圧感を感じられなかった僕は……どうんとした重量を持ったオナナのアタマが僕の胸に当たっても断続的なオナナのしゃっくりのような声が聞こえてきたところまで。

もう怖いと思うことはなくなっていた。

怖くは無い。怖くは無いんだけど。

僕の胸にトンと置かれた顔辺りからずるずる蕎麦でも食べてる音が響いてきたかと思うと同時に、痛いくらいの力で僕の手のひらを握り締めるDQN（）。あまりに突拍子もなかったので僕の頭の中の処理はおっついていなかった。

これはイベントなんだろうか？大した選択肢は無かったよ？それに僕はこのオンナのコトを好きな訳でもないし、このオンナだってそうだろう。

リアルは理解しがたい。この展開はグッド・エンド？バッド・エンド？いやそもそも終わってないし。

「ああああの」

「ちょっと静かにして。今キューシュー中。ぐじゅ」

九州？

「吸・収」

「りよりよ了解」

なんでバレたんだ？

.....。

オンナは僕の手をただ握り続ける。硬く目を閉じ息さえ殺して。なんだか必死である。僕は宗教には縁がないが『敬虔な信者』ってのはきつとこんな顔で祈るんじゃないだろうか……などとカッコつけた事を考えていた。

なにかあつたかは決して言おうとしないがきつと僕なんかでは役に立たないだろうし、期待されてもいないんじゃないかな。でもこうしていたいならさせておこうと思うんだ。

震える手に尚、力が籠る。

今必死な顔で何かを無理やり押え付けてるこのオンナは……：DQNでもなく自意識過剰でもなく、捨てきれないモノを捨てきれないでいるだけなんだろう。

そのコダワリはすぐく尊敬出来るし、この真剣な顔ならきつと周りの誰かが手を差し伸べてくれるんじゃないだろうか？

僕はちよつとだけこのオンナを羨ましく思った。

それまでの代用品として、僕の汗ばんだ手のひら、か貸してあげないこともないんだからねっ！！かか勘違いしないでよっ！！

「……よし……」

ぱっ、と顔を上げたオンナが真っ直ぐ僕の間を見つめた。不意打ちだったので避ける間も無くぶつかる視線。

「おお出る出る！お前手汗すごすぎー！」

「しよしよしよしょうがないんだこれはっ！！たたたた体質でー！！」

「いいよ今さら。とっくにヌルヌルだし」

「いいいいからこつち、みみ見るなよ！」

「テレてんのー？言っとくけどもうヤラせてやんないから！残念だったねドーテー君！」

「ちち違っ！！」

やっぱり3次元は理解不能！なんだこの豹変振りは！！まったく謎のジョブ・チェンジだ！！……はっ！！まさか……コレが噂の解離性人格障害ってヤツなんじゃ！！ちよつと……やだなにそれかっこのいい！！正義のシリアルキラーがドキュンと解決！？ややややややっぱりスカート履いててもビュンビュン飛び回ったりするの！？するんだろっうなあ！！

「いやー、悪かったね付き合せて」

「あ……べべべつに」

今ちょうどDQNオンナが炎で出来た剣を振り回していたところだ。別に悪くはない。

「帰るよ」

「あ、あああ」

「なんだよ？大丈夫だよもう……そんな顔で見ないでくんない？」

僕はどんな顔をしていたのか。サッパリ見当も付かないがきつと間抜けな顔をしていたんだろう。証拠にDQNオンナの整った顔まで

クシャツと崩れて、なんだかおかしい顔をしていたから。

「意外に利くのかもね」

「なななにが？」

くるりと背中を向けたオンナは星も見えない夜空に両手をかざし、深夜にも関わらず大きな声で。

「たすけてー！ベクトルマーン！」

と叫んだ。

「なななぜそそそれをおおっ！！」

「じゃ！あたし柚木カナ！忘れたら殺すからな！」

とん、と軽くアスファルトを弾くように細く長い足が駆けていく。どンドン小さくなっていく背中は曲がり角で完全に消えた。残された僕は特に寂しい訳でもなく、不思議とあつたかくて……おでんって体感防寒すごいんだなあなんてどうでもいい事をポケットと考えていた

「……」

んー？でも結局よく分からなかったなあ。でもまあ。

「お巡りさんこっち！こっちから『たすけて』って悲鳴が！！」

ん？

「こっちかい！？……誰かいますかーっ！！」

揺れるライトの明かりは薄暗いアスファルトをなぞりながら間違
なくこちらに向かってくるではありませんか！！

「……………」

うわああああああああっ！！

住民巻き込みでの治安維持、防犯意識の高さ！！お疲れ様です！！

それでは僕はこのへんで！！！！

20 (後書き)

初投稿でイマイチ機能が分かっておりませんが『お気に入り』やポ
イント(?)ありがとうございます!嬉しいです!

毎朝のランニングの成果をフル活用し自宅マンションまで転がるように逃げ帰ってきた僕。何もしてないとは言え公的機関の権力を鵜呑みにしない僕はクール・ダンディー。且つ、ソーキュート。追っ手を隙間風のようにするりとかわし、愛すべき自宅の扉の前でノブを掴んでいるのだが……体が硬直して動けないでいた。

なんだこの邪悪なオーラは。僕は『凝』ばりに注意深く辺りを観察すると入り口の扉、その輪郭に沿って漏れ出している紫色の澱んだ瘴気が窺えた。大型の乾燥機の如くシューシューと絶え間なくあふれ出すソレはとても僕なんかの手に負える類のシロモノではないのは明らか。これはもう彼の出番でしょう。しかめっ面で博識で、黒装束の古本屋である京極 d

「はいおかえり」

「ひゃあああああっ!!」

いつの間にかわずかに開かれていた扉、そこからゆるりと伸びた手が僕の手首を優しく掴む。力自体は入っていないのに解けない!? それどころか体の力が吸い取られるように足腰が固まってしまった!!

「早く入りなよ、近所迷惑でしょう?」

優しい!! 優しいだけにエゲツナイ怒りを感じる!! 音も無く問答無用で開かれていく扉。

「心配したんだから。ああ、もう3時なのねえ」

なぜ笑顔！？姉は玄関の時計を確認し貴婦人のようにふふ、と笑う。姉の威圧感に縦横無尽に蹂躪されていく僕の心。……いや！さて！逆に考えるんだ！！自らの正当性を力の限り掘り返し論理的に対処するのだ！！はつきり言って疚しいことなど何も無い！！それに僕はもう高校生なのだ！！夜遊びのひとつやふたつは許容して頂く！！少々帰りが遅くなったからといって咎められる筋合いではな！！！！

「どこいったの？」

「ちよちよちよつと寄り道し、してた」

だらだら流れる汗が目に入って染みるが堪えるのだ！！ここは分岐点！！今後の行く末まで影響を及ぼすであろう重要なフラグ！！大體新婚夫婦じゃあるまいし引け目など感じるほうがどうかしてるのだ！！

「私待つてるって言わなかったっけ？ひよつとして言い忘れたかなあ」

僕の脱いだ靴を下駄箱にしまいながら独り言のようにぼつりと漏らす姉。当然だが、姉が僕の靴をしまうなど初めての行為だ。姉のメンタル方向への追い込み具合が加速して襲い掛かってくる。

「ぼぼ僕はべ別に」

「香水くさい」

「つて……え」

「香水くさい」

「いや……あの、じじいねは」

「香水くさい」

あのDQNオンナか！！確かに姉のふわりとした謎のイイ匂いとは違う主張のキツイ香り。相手に意識させる事を明確に目標にした人工的なフェロモン。その香水の存在意義は僕をすつとばして姉に作用したようだった。

「まずお風呂、でそのあと話し聞くから」

「いいいまから？もももうおお遅いし朝にでも……」

「なんだか気分が悪くなるのその匂い。はやく落としてきて」

「ああとはね寝るだけじゃ……」

僕の耳の横を物凄い速さで何かが通過したと同時に、ばんっ！！と激しい激突音が響く。一拍置いて姉の腕が僕の背後の壁に手を付いたのだと理解。

態勢的に間近に迫った僕と姉の顔。目を逸らす事も出来ない僕はここ最近では一番の降雨量、記録的な大雨が背中を伝つ。

「まだ朝まで時間あるから。はやくね」

そうニコリと微笑むと姉の背中には僅かの迷いも無く僕の部屋へと消えていった。

「……………」

な……………なんだよ！！なんなんだよあれは！！

僕は何だ！？同棲はじめたばかりのヒモオトコか！？おまえは僕の姉だろ！？がつつり血の繋がった完全無欠の肉親じゃないか！！
ってというか姉の圧が凄過ぎて僕の心の中のツツコミも無くなっちゃってるじゃないかあつ！！僕のリーゾン・デートル返せようっ！！
お願いだから返してくださいようっ！！アブノーマルなラブコメハ
ンターイ！！お笑いバンザイ！！

そう、心の中で血の叫びとも言えるシュプレヒコールをばら撒いた僕は、今風呂場で血が出るほどごしごしタオルを自分の体に擦り付けていた。

だって可愛いもの。

僕は脱衣場に置かれてあつたパジャマを着込みいざ自室へ。なんか息苦しいし、ちょっと足が震えているがいつまでも廊下で突っ立ってる訳にもいかず意を決して扉を開けた。

「……………」

「……………」

黙って僕を見る姉。何も言っただけなのをいいことにさっさとベットに移動する僕。

姉は持ち込んだ布団で横になりながら静かに僕に言った。

「ぶつちやけ、正直に答えて」

沈黙以外返すことの出来ない僕はもぐりこんだベットの中で黙って姉の質問を待つ。星は無いが月の見える薄暗い夜。

「あんた私のコト嫌いよね？」

「うん、……………って痛い、いたってば……！」

ばっしんばっしん枕代わりのクッションで僕を力任せに殴りつける姉。

「そんなはつきり言うことないじゃないの……！」

ばっしんばっしん

「ただだつてしょ正直にっつてー!!」

「それにしたつてもう少しデリカシーとかあつてもいいんじゃない
!?!」

ばっしんばっしん

「ささ最近おおおかしいよ!?!どどどうしちゃつたのさ!?!」

「あーおかしくて結構!!私は決めたの!?!」

ようやくクッションを手放した姉は昔のロボットヒーローのように
目から光線でも出しそうな視線で僕を見る。この眼。これはヤバイ。
CADの設計技師のような僅かのズレも許さない厳格な瞳。つまり
……新木古都の瞳だ。

「間違い続けて逃げ続けるのはもう辞めるの!?!」

「ははあああ!?!」

言っているコトが漠然としていてサツパリ分からない。これは本当
にいい病院を探さなければ……

「タウンページ開くな!?!」

「はぶぶぶっ!?!」

クッションとんできた。

「あんたがそんなふうになんか人と付き合つのが苦手な理由、私なんとなんかわかるの」

暗がりでは表情は全く分からないが少なくとも冗談を言っているわけではなさそうだった。あいかわらずあの『瞳』だけが僕を捕らえて離さない。

「お母さんが居なくなつてあんたがストレスでどんどん太つて。父は最近きたばかり、血の繋がりもない」

ストレスだつたんだろうか？ 自覚は全く無い。が。

「元々友達少なかったあんたは、すぐ孤立した。外見のキモさもあつたし」

おーい！ だれか告訴用紙！ この無礼な姉を告訴するぞー！！

「学校でハジかれたあんたが逃げ込める場所。『家庭』」

なんだかテクニカルに嫌がらせを受けているようでふ・く・ざ・つ！

「なかつたよね、『家庭』」

特に気にしたことないよ。

「避けてたの私。朝ごはんとかなんだかんだ言い訳して一人だけ早く食べたりして」

そんなことはとっくに知ってたぞー。なにをいまさら。

「あいさつもしなかった。だってキモかったし」

「ためえコノヤロウ！！さつきからなにが言いたいんだ！！」

「最終的にあんたを追い詰めたの、私」

ナルシステイックな気分なのか！？自分さがしのOLかつ！？ヨー
グルトでも食べてる！

「逃げ帰ってきた家で、姉の私が学校の皆と同じ目であんた見たら
そりゃあ逃げ場無いよね」

全く覚えてねえし！てか逃げてねえし！

「だってあんた……昔は普通に喋ってたもんね」

そう……だったか？本当に覚えが、無い。

「あんたはいつつもそう。学校はなんだかんだ休まないし、我慢続
けて赤面症やら失語症やら。それでも」

いやもう……止めてくれないだろうかマジで。

「太っても痩せても。そんなこと関係ないのに」

まいった。ここまでへこんだ姉は初めてだ。

「だから」

いや、ちゃちゃチャンス!?ここでコイツの心を抉る。メハメ波をぶち込んで、今後一切生意気な態度を取れなくしてやるうか!!なにがいい?なにか効果的なワンフレーズは……

「ごめん」

「なななに謝ってんだよつ!!」

あ、あり?

「人のせいになんかしない!!ぼぼ僕はぼくで……どうしようもない僕は僕だけの僕なんだつ!!」

エキサイティング!?コレが噂の妖精『エキサイティング』なの!?

「かか勝手に責任背負い込んで、それでまま満足なのか!?!じよじよ冗談じゃない!!そんな風に、いい言われたら」

姉は相変わらずシルエットでしか認識できないが、時折見せるブレ、振るえ。それでも僕はいわなければ。

「姉ちゃんや父さんが……間違ってたってことになるんだぞ!?!」

そうなのだ。ガツーンと言わなければ。

「み、みんな頑張ってたじゃないか!!そそ、そんな人たちが間違ってたって……無責任に言ったらダメだ!!」

「…………周蔵」

イノシミみたいなこの姉は全部背負い込もうとするから。

僕は姉ちゃんに人差し指を突き出し宣言する。

「僕はちゃちゃ、ちゃん何でも出来るから！！みみ見てろよ！！
僕のエンジョイ・ハイスクールライフを！！」

「…………うん」

「りり立食パーティーとかしてやるからな！！」

「…………うん」

「きき金髪の彼女とかつつ連れてきてやるからな！！」

「うん、お姉ちゃん待ってる」

「おおお姉ちゃんとか！！やめるよ恥ずかしい！！」

「周蔵が呼んでくれた。さっき」

「よよ呼んでないっ！！」

「呼んだもん。聞いたもん」

二ヒツと笑った姉の久しぶりに見る何の裏もない笑顔。僕はなんだか背中がむずむずとしていたが、年に一度位ならこんな笑顔もいいなあ、とちよっただけ思った。

「周蔵！ご飯できたよ！」

バンバンと勢いよく叩かれる扉。

ほとんど寝ていないというのに元気な事この上ない。僕はオモムロに時計に目をやるとなんと6時22分。この時間だとまだ父が出る前、今まで姉がずっと意図的に避け続けてきた時間帯。だといふのに……

「……」

食卓にはすっかりパンやらハムエッグやらが3人分ずらりと並べられていた。制服にエプロン姿の姉、飄々とした変人・父も少しばかり落ち着かない様子でコーヒーをガブ飲みしている。

「今日は……早いな2人とも」

こころなし声が震えているようだ。

「お父さん今日は帰り遅くなる？」

びきり、と父に入った亀裂。姉の問いかけに目を丸くして手にした新聞を落とした。

「ああ……そんなにでもない。いつもどおりだ」

僕に視線を寄越す父。僕は姉ほど父に距離を取っていた訳ではないので僕に助けを求めた父だったが……あいにく僕もトバッチリは避けたいので無視。

「そっか。じゃ夜も3人で食べられるね」

真っ赤な顔でニッコリ笑う姉。その顔を向けられた父は無言で立ち上がり、リビングにあるソファーに向かってボスボスと左右の拳を繰り出す。無論はじめて見た姿だった。

「ちよっとお父さん？食事中に……」

「ああ！ちよっとしばらくほっといてくれ！発作だ発作」

ソファーに拳を繰り出さざるを得なくなる発作、実に興味深い症例だ。急いでまとめて来月の学会に報告の準備を……

「あんたもちちゃんと帰ってくんよ！昨日みたいに遊び歩いてたら姉ちゃん怒るからね！」

そう真っ赤な顔で僕に宣言する姉。いやあ、実にキモチワルイ！！清々しいほど醜悪なホームコメディー。

「オトウサン行ってくる！ちゃんと帰ってくるからな！」

見事な棒読み。国籍間違えたかのようなたどたどしさ！

「いつてらっしやい！」

姉も涙ぐむほどテレるならやんなきゃいいのに。

しかし……なぜか否定する気も起きない。

姉は家族を再生する気なのだ。血の繋がらない父と対人恐怖症の弟、当の姉本人だつてセレブぶつてはいるが本性は猪突猛進の近視眼的な高校生に過ぎない。本人もよく分かつてない家族という共同体の輪郭をなぞっているだけなのだから醜悪なものも当然だ。

でも、そもそも醜悪で無い家族つてどんなん？と聞かれてもやっぱりよく分からないのだ。昔やらなければいけなかった軋轢のすり合わせや齟齬の修正。それを意図的にむりやり再開しようというのだから、姉の決断ならびに実行力は凄まじいモノがある。

そのうち僕にもなにか出来ることがあるかも知れない。そのとき僕は姉のようにステキな笑顔で「いつてらっしゃい」と、そう言えるだろうか？

先のコトは分からない。でも……

僕たちの戦いはこれからだ！！新木先生の次回作にご期待k

「勝手に最終回にすんな！」

「ぶぼっ！？」

かばんでアタマ叩かれた。

「なななんだよ！さっきまでやや優しくかったじゃないか！！」

「続かないのよしょうが無いでしょ慣れてないんだから！！さつさと学校行くわよ！！」

ママゴトみたいな朝食を済ませ僕らは学校に向かう。

継続は力、すなわちコダワリの結晶というわけだ。うん、この考え

は悪くない。

じゃあ精々コダワツて一般力テゝってヤツを作ってみようじゃありませんか。モノ作りという響きはオタ心に実に良く響くし。

電車から降りた僕と姉、……僕らの第2の共同体である学校を目指しちょっとだけ暖かくなった風に煽られながら、姉は僕を見て照れくさそうに笑った。

姉2

ここ数日、平穏な日々が続いていた。周蔵は相変わらず家でも学校でも無愛想、というか出来る限り他人との接触を避けているようだが……お昼は必ず中庭で梶君や背の小さな女の子と和気藹々としてる……かは微妙だけど食べてるし、わりと無難にこなしてるんじゃないだろうか。

それに接触を避けている、とはいえ以前のような棘が無くなってきた様に思える。まあこれは家族の贖目かもしれないけど。

それより問題は私だ。

上手にやってきたつもりだった。3年までくまなく隙なくいろんないざこざを処理してきた。

私は3年過ごしてきて初めて訪れるような端も端、体育館の裏にある水泳部の更衣室。更にその奥に足を踏み入れている。こんな場所があったのかと感心してしまうような学校内のエア・ポケット。誰の視線も届かない死角のそのまた裏。

「ハジメマシター」

慇懃無礼。厚顔不遜。人をこんなトコに呼びつけておいてフザケタ挨拶。さて、どうしてくれようか？

「柚木サン？私あなたと面識あったかしら？」

「いや、ないね。同じクラスになってもない」

「で？ハナシって？」

「いや、それがさ……うーん」

不自然なほどアップされた豪華な髪。ぎりぎり見えないくらいの丈しかないスカート。上着のポケットから覗くブランド物の財布。綺麗なコだということは認めるが、全体的に『媚びて』いる。男、視線、欲、e t c。

それが悪いとは言わないし好きにすればいいとは思うがそれは私の目の届かない場所なら、という条件つきである。

「私あまり暇じゃないの。なんにも無いなら帰るけど」

「ちょ！ちよつとまって！お願い！」

意外だった。

私の手首を掴んだ柚木さんの目はあからさまに困惑していて、これではどっちがイジメてるのか分からなくなる。

「どうしたの？すごい汗」

いわゆる『テンパッタ』状態。まるで周蔵みたいな流れる汗に毒気を抜かれる。私はハンカチを柚木さんに手渡した。

「あ、ありがとう」

「いいよ。でもホントになんなの？『ハナシがある』って呼び出されたから私てつきりあなたになにか恨みでも」

「ちが！ぜんぜんそんなじゃない！ホント！」

きれいに纏められた髪に無造作に手を差し入れアタマをかく柚木さ

ん。首筋の汗を拭いながらも「あー」とか「うー」とかうめき声を漏らしている。

「あ、あのさ！」

うつむきながら意を決した様子の柚木さんはそれでもまだ私の顔を見ない。ホントになんなんだ？

「あんたの弟……」

「周蔵？あいつ柚木さんになんかした！？」

ありえなくは無い！大体なににするかわかったもんじゃ無いしあのバカ！

「彼女とか……いるのかな」

「私からでもいいなら謝って……え？」

「だから……付き合ってるヤツとか、いる？」

いまいちよく分からない。顔を真っ赤にした目の前の派手な女の子と周蔵の彼女の有無、これが全く結びつかない。

「いない……と思うよ」

「ホント！？」

ぱっと顔をあげた柚木さんは、なんだかとてもキラキラしていた。

「じゃじゃあ好きなタイプは！？どんなのが好きなのかな！？」

「えーと……」

言えない。とてもアニメキャラクターだとは言えない。この顔を見てそれを告げる勇気は私には無い。

「じゃあさじやあさ！いままで付き合ったヤツのタイプとかどんなだった！？」

「ちょ、ちょっとまって柚木さん！確認しときたいんだけど」

「なに？」

「遊びでちょっかいかけるつもりなら止めて。あなたオトコなんか困らないでしょ？」

「……」

「アイツはバカだけど大事な弟なの。別にアイツが誰と付き合いおうが構わないけどハナから遊びなら誰か適当なオトコでいいでしょ。多分アイツつまんないよ」

柚木さんは黙っている。ただの興味本位なのか悪食なのかは知らないがどちらにしても好ましくは無い。ってかむかつく。

「正直いうと……よくわかんない」

「へ？」

私のなかで柚木さんのキャラクターがさつきからブレまくっている。随分不安定なコだ。会った時から中々要領を得ず矛先を逸らされっぱなしでどうも調子が出ないや。

「わかんないの！妙に声が聞きたくなくなったり、いざ話しかけようと思っても、あたしこんなだし迷惑だったらどうしようとか思っぴびっちやって……どうしたらいいんだこれ？」

「私に聞かれても……ねえ」

「これって遊びなのかな……自分でもホントにわかんないの！近寄ったら嫌われるのが怖いし、でも……あーわかんない！イライラするの！最近！ずっと！」

おーい周蔵。

「やっぱあたしみたいなのが近寄ったら迷惑かな？あいつ真面目そうだし！どどどと思う新木さん？」

あんたエライコトになってるぞー。何したのよ全く。なんかアホらしくなってきたよお姉ちゃんは。

「ねえってば！」

泣きそうに潤んだ目。不審な挙動。発汗。赤面。恋する乙女だね間違いない。

しかしまあギョーザにマヨネーズみたいな見事なミスマッチ、うまくいきそうには全く思えないが。

「……………」

やっぱり、この不安そうな顔を見たら言えない。
なんだかキラキラして……かわいいんだもの。

「おう、コラ」

「ななななんだよ」

相変わらず僕と理子、万力ゴリは誰もいない中庭で昼食を取っていた。なぜか日常化してしまつた異様な景色。僕は不本意ながらも毎日毎日こうして芝生にぺたんくと座つて昼休みを過ごしているわけだが……

「なんで毎回理子がパシリなんだよ」

「し、知らないよ。ちゃんとじゃ、ジャンケンしてるじゃないか」

恒例となつた食後のドリンク。三人でいつもジャンケンして決めているのだが結果は理子の全敗、神がかつている。弱すぎる。僕とゴリは一度も買いに行った事がない。理子に気にした様子は全く見えないのだがこのゴリヤロウは大いに不満のようだった。

「てめえが気い利かせて買って来いよ。カワイソウだと思わねえのか？」

最近気が付いたのだが、このゴリ妙に理子に甘い。しつぽを振るよつに大きな目で懐くのが可愛くて仕方ないようなのだ。極度の寂しがりでちっちゃい捨て犬のような理子だが、ベタベタ甘える訳ではないしむしろ体育会系の機敏さを見せることも多い。生まれ付いて

の後輩気質。性善説を信じさせてくれるヘンな女。ゴリ程ではないが僕だって好感は持っている。

だがしかし。

「ぼ僕は勝負は勝負だと、お思う。いいんちキしてるわ訳じゃないし」

男女逆差別など許してたまるか。全ては理子のツキの無さ！己の生まれ持った星の力！パシリ属性がデフォだった理子はその性能を遺憾なく発揮しているだけなのだ！

「……てめえ、明日グーだせ」

「いイカサマか？そそそれは逆に理子にし失礼なんじゃ」

「オレもグー出す。で、てめえと俺で決勝戦でどうだ？」

「い、異議ナシ」

理子のパー率は確かに高い。僕もゴリも気が付いていたが……多分明日も理子が高いに行くことになるんじゃないかと思う。なぜなら僕やゴリが気を使ってグーを出すとき、決まって理子はチヨキを出す。だから全敗なのだ。勝負運はとことん無い。

「おまたせー！買って来たよー！」

芝生をさくさくと駆けてくる理子。舌を出している幻覚が見えるほど子犬っぽい。

ぷすりとストローを刺しちよつとだけ飲むと理子はパックを僕に両手で手渡した。動作のどこを切り取っても不思議とアザトサは感じられない。稀有な才能だと思う。

「てめえ、まさかそれ飲む気じゃねえだろうな」

ゴリの腕周りが一瞬さらに太くなったように見えたのは気のせいか？

「ちよつとイケてっからって調子乗んじゃねえぞゴリ」

.....。

.....。

「あ！ぼぼ僕牛乳飲みたくなってきた！せせセンパイ交換しシマセシカ！？」

「言えよ！さつさと言えよ水クセえなおい！！」

僕のパックをひったくるように奪い取りチューチュー吸い出すゴリ。危機回避。警戒信号消えました。

見た目は完全にDQNのくせに中学生みたいなヤツだ。

理子はニコニコとゴリに懐き屈託なく話しかけ、ゴリは赤ん坊を前にどついたらいいのか困惑する休日のパパの顔で照れ笑い。芝生のチクチクしたすわり心地と草の香り。

こんなのも悪くないかも。めずらしく僕はそう思った。

姉3

「行かないの？」

廊下の窓から中庭を覗き込む柚木さん。

「いいいけないよ！あのちっちゃい子スゲーかわいいじゃんか！なんだよもー！」

すっかり自信を喪失している。私の記憶では柚木さんはもつと無闇に堂々としていていちいち派手、少なくとも廊下で涙目を堪えオタクバカの挙動を窺うようなコではなかった。

「ああいうのがタイプなのかな！？あたしあのコと共通点ゼロなんだけど！？」

確かに共通点など探すほうがどうかしていると思う。柚木さんとはかく、是非は置いておくとして華美。華やかなモノを纏った華やかなコなんだと思うし。

どこを取っても好対照なあの子は……なんていうか人工的な香りがしない。きつとあのコは星を見れば綺麗だと思っのたろうし、おいしい物を食べればおいしいと言って笑顔を振りまくのたろう。

人の好みは多種多様、もちろん柚木さんの華やかさに魅力を感じるオトコは全体的に見れば圧倒的多数派なのたろうが、あのバカの好みがあく分らないので柚木さんはただただ脅威を感じている。自分と全く違う魅力を持ったあのコに。

しかし……いつまでも廊下で弟の食事を眺めているほど私も酔狂ではない。ここはさっさと声をかけ、お役御免と……

「ちよちよ！…どこいくの!？」

「え？だから周蔵に声を……」

「いやいやいやいや！！待って！ちよつと待ってよ！！」

私に縋りつく柚木さん。形相には余裕の欠片も見当たらない。

「心の準備ってあんじゃなか！！そんな急に！！ムリだよつ！！」

ふう、と目を閉じ溜息を心の中で吐く私。周蔵も外見と中身のギャップは物凄いが柚木さんも負けてないんじゃないだろうか？普段これだけ見せ付けるような格好をし、現に引つかかる男も数知れないだろうに。言い寄られるのは慣れっこだが、逆に拒絶されることを極端に恐れている。どうやらそこまで悪いコではないようだ……よくわからないというのが本音だった。

「なにしてんのカナ」

廊下を私たちに向かって歩いてくる女生徒二人。見覚えはあるが名前は出てこない。柚木さんの知り合いらしいが……なるほど類は友を、ってやつか。柚木さんほど華はないがやはり2人とも何かに怯えている様に過度の化粧、髪型、同系列である。

「いやちよつとね……はは」

友人に弱みを見せるのがイヤなのか必死に作り笑いを浮かべる柚木さん。このコも忙しいコだ。

「新木さん？随分意外な組み合わせだね」

なぜか私の名前を知っていたようだ。品定めのような視線を私に向ける友人A。この学校でのこの手の手合いはほとんどが『高校デビユ』という不名誉な称号を囁かれる者たちなのは皆知っている。威嚇しているつもりなのだろうが申し訳ないが滑稽でしかない。

「ああ、中庭？耳が早いねカナ」

「え……なにが？」

キョトンとする柚木さん。私は彼女らの言動を注意深く観察する。厭な感じがする。

「カナはいつも参加しないから興味ないのかと思ってたよ」

「なんのハナシだよ？」

「今度おしえるよ。ここじゃ、ね」

露骨に私に滑稽な視線を送り、去っていく2人。クスクスと陰湿な笑み。そして見た。

わずかの間、ほんの一瞬……昏く歪む柚木さんの横顔。久しく感じることの無かった不快な空気。

「……柚木さん」

「え！……ななななに！？」

「例えば、のハナシするけど」

「……？」

「あの周蔵と一緒にいる1年生の女の子。あのコになにかあったら私はあなたの事を軽蔑します」

「は！？なななんだよ急に！！」

「嫌いな私。いやがらせとかいじめとか」

「ハナシきけつて！！あたしは別に」

あの中庭。あれは周蔵が手に入れた大事な共同体。本人達にに自覚があるうがなかるうが間違はなく。私にはほとんど奇跡のような光景。なにしろあの周蔵が話し笑えている（分かりにくいが）。

「あなたが状況を事前に知りえる立場なのはなんとなく分かったわ。だから傍観、黙殺、諦観、積極的参加、非積極的参加、消極的賛成、このいずれかの行為を採った瞬間、あなたは私とは相容れない人種」

「おおおどかすなよ！！なんなんだ！？」

その共同体を壊す？しょうもない嫉妬心や僻み根性で？いやいやいや。私は所詮一女子高生でしかないが、学校内のことは学校内の者にしか分からないし実行力は持たない。であるなら。

「脅しかどうか」

「ひっ!?!」

私は柚木さんの顔に肉迫し、その大きな眼球を射抜くように見た。

「試してみたら?」

「ふぁ……ひ」

私は許さない。あらゆる手段で一人づつ詰める。誰であろうと。何人であろうと。あの中庭を壊させない。

「ふぁぁ……っえっ……ぐず」

「あ、え?……ゆ、柚木さん?」

派手で見栄っ張りな柚木さんの顔がくしゃっ、と潰れ漏れ出す嗚咽。

「あたし……関係ないもんっ!!そんな怖い顔で……おこないでようっ!!--」

「あ、あの……あれ?」

他人の目も憚らないおおっぴらな号泣。ままま、まいっ たな。困ったな。

「うわぁぁぁんっ!!なんだよう!!もうやだぁぁ!!」

「ああぁぁ、ご、ごめん柚木さん。お願いだから泣き止んで……」

「しあああああああんっ！..！」

「.....困ったな。」

「お、あれお前の姉貴じゃねえのか？」

芝生に座り足を投げ出したまま顎で方向を指し示すゴリ。

「どれですか！？シューゾーくんっておねえさんいたの？この学校に！？」

パタパタ尻尾を振りながらゴリに詰め寄る理子。肩を掴まれ興奮気味に騒ぐ理子を横目に見ながら薄気味悪い笑みを浮かべるゴリ。悪気は無いのは分かっているが許される範囲であると思うんだ。その顔は懲役モノだぞイカレゴリ。

「……………」

確かに姉のようである。誰かと話しているようだが、ハナシ相手の姿は全く見えない。壁の向こうに座っているようだ。しかし……………誰かと話す姉の表情が少々硬質な棘を感じるのは気のせいなんだろうか？

『……………ああああんっ！！』

！！？？？

これは！？泣き声！？

「あ、あの……………これは？」

僕を見るなよ捨て犬！！そんな顔されたって僕に責任は無い！！てかホントになにやってんだよクサレ3D！！

「こりやあまた。振り切った泣き声だなあ。新木サン怒るとんでもねえから。ま、誰かアホウな事しかしたんだろうな」

……？「しよーがねーな」といった表情で呟くゴリ。ゴリの言葉に僕は違和感を覚える。こいつの言葉には姉に対する非難めいたものが不自然なほど無いのだ。喧嘩は両成敗つてのが世の中の倫理観だと思っていたが。

『ああああんっ！！』

……いたたまれない。すごくいたたまれない。不安そうな理子は僕の顔をずっと見ていて泣きそうになってるし。僕は芝生に手を突き立ち上がる。ものすごく気は進まないが様子を見てくるか。

「あー。ほっとけほっとけ」

退屈そうにそう言うと、ゴリはアイスティーをチューと吸う。

「ででもケン力ななんて」

なんで学校の中で泣かせるまで相手を追い詰めるようなことがあるうか？せめて放課後裏庭とかでこっそりやれよ！！

「ケン力じゃねえぞ多分。新木サンはケン力なんぞと縁はねえ」

「へ？」

「ケンカってんのはお互い様だろ？対等ってことだ。新木サンと対等のヤツがガキみたいに泣くかよ」

「……………」

よく分からない。なんでこいつは姉をここまで評価してるんだろう？単にイノシシの機嫌が悪くて八つ当たりしてるとは考えないのだろうか？

「ってことは…………どういうこと？」

首をかしげゴリの目を正面から覗く理子。ほんとコイツは裏表無い得な性格だ。分からなければ聞く。シンプルはベスト。羨ましい。

「俺は1年のとき新木サンと同じクラスだったんだが……………そんなとき新木サンがマト懸けられたことがあってな」

「まと？」

「要は嫌がらせってやつか？この学校は陰険なヤツが多いからなあ」とても楽しい思い出には聞こえない。なのになぜかゴリはニヤニヤと笑っている。

「ま、3人くらいが首謀者でしみたれた嫌がらせをするわけだ。靴隠してみたりアホウな手紙を机の中入れてみたり。レト口感満載のわかりやすいヤツをな」

「……」

理子は黙ってしまった。きつとその状況に思いを馳せ心が痛んでいるんだろう。その様子はブリキみたいな心しか持たないゴリにも伝わったようで慌てて言葉を繋げる。

「まままあ聞け！でも黙って泣き寝入りする新木サンじゃねえ。俺はオンナを『怖い』と思ったのはあれが初めてだったんだが」

「……！」

ぱっと顔をあげる理子。なんだか……いやつだなあコイツ。ゴリもちよつとだけホツとしたようだ。

「ウチの授業がイカレてんのはもう分かってんだろ？」

コクコクと頷く理子。この理子やゴリだってそれなりの成績がなければこの学校にはいない。しかしやはりあの授業は異質なもののなか。知識を丸呑みさせるかのような絨毯爆撃。理解など求めない一方通行の教養のなすり付け。

「当然わかんねえ問題とかはあるわけなんだが、お前授業中であてられたらどうする？」

「えーと……黙ってます。だって分かんない問題答えられないよ」

そりゃあそつだ。あの視線の集中する嫌な空気は耐え難いものがあるが、分からないのだから答えようが無い。

「そのいやがらせしてた首謀者がそつという状況にいるときだけ、新

木サンは立ち上がって答えを言うんだ。非の打ち所のねえ完璧な回答を」

「助けてあげるんですか？そのひと達を？」

「そつだ。ソレを毎回。半年続ける。するとどうなる？」

「仲良くなる！」

「いや、理子は多分そつなるんだろうが」

ちよつと寒気がする。毎回そんなことをされれば……

「自分は新木サンより『徹底的に劣っている』と思わされるんだよ。ベンキョーだけじゃねえ。運動だって新木サンにかなうオンナなんかこの学校にはいねえんだ。すべてが敵わない、とゆっくり時間をかけて骨の髄まで思い知らされるわけだ」

そんな事態になれば周りの目も明らかに変わるだろう。一連のいやがらせが、ただ矮小でちつぽけでくだらない僻みにしか見えなくなる。

「なんか……すごいですね」

「ああ。んで、とうとう半年後心をへし折られた首謀者のアホウ共は新木サンにアタマを下げることになるんだが」

「仲良くなるんですね!？」

「いや、……アタマを下げているそいつらに向かって新木サンは言

大いに不満だ。ゴリツプクというヤツである。

僕は帰り間際のホーム・ルームで頼杖を突いて遺憾の意をこっそり、しかしれっきとして表情で体现していた。まあ大したコダワリも持たずにこの学校に入学した僕なので下調べを一切しなかった。そこは責められてシカルベキなんだろう。なんだろうが……

入学早々「クラス発表会」なるキテレツな催しを誰が、なんの為に言うというのか？僕は自慢じゃないがクラスの生徒の名前さえ2人しか知らない。前に座る『藤崎』、それに横の『智花』。以上だ。大体この学校はクラスの団結とか高校生活における友情なんてものには興味が無かったはずじゃないのか？

「いやあどうしようね新木君。こっちは予習復習で手一杯なのに」

別に授業中ではないので幾分リラックスした様子で後ろを振り返る

『リア充』藤崎。

「まあまあ。これさえこなせば後はなーんにも無いんだから。学校もホントになにもしません、じゃ通らないんじゃないの？一応公立だしさ」

『嫁』智花は諦めたように苦笑い。一体誰に対する言い訳なのか僕にはさっぱり分からない。誰得の極みである。……しかし『嫁』はいくらなんでも違和感があるなあ。名前が一緒なだけだし。今後は省いて『智花』でいこう。

……48文字。

遑つて48文字は完全に省いてもらっても構わない。なんつーかスマンカッタ。

「この時期に発表会って言われても」

「毎回どこのクラスも『合唱』みたいね。無難にこなしておきましょうってトコみたい」

ジャージ教師の声が黒板の前から響く。耳は閉じられないので何の気なしに仕入れた情報によるとこの催しの大義名分はこうだ。

お互いまだ心を開いていない状態であるからこそ意義がある。この機会にお互いの理解を深いものにし、今後の様々な場面で生きてくるような絆を構築しよう……まあ尤もらしくノベてはいるが。友情や信頼が何の役に立つのか？

崖から落ちそうになったときケイン・コスーギのように手を差し伸べてくれる？

崖って見たことねーよ！！

『お、俺はもうだめだ。先に行け』つつつてそいつが犠牲になって手榴弾で後続の敵を排除？

そんな勇者はチベットいけ！！日本じゃ出番ねーぞ！！

高校生の、特にこの学校における最大の障壁は勉強なのだ！！あのキチガイ染みた授業に友情や信頼は役にたたねーだろ！！『困った時の為にトモダチくらい作っとけ』としか聞こえねーんだよ！！でっけえお世話だ！！

そんな僕とふとぶつかる視線。遅々として進まない議題に業を煮やしたジャージの口端がぐい、と持ち上がる。

「お、シューゾーなんかある？」

「がが合唱でいいんじゃないでしょうか？」

YOEEEEEEEEEEEEEE!! 僕YOEEEEEEEEEEEEEE
EEEE!!

ほかはないかー、とジャージの気の抜けた声が教室内にこだまするが当然何か提案が出るわけも無く。

「じゃ、合唱に決定っと。反対意見無いんだからせめて前向きになー」

とジャージは半ば投げやりにそう言った。

「まあしょうがないよね。演劇だのパフォーマンスだのしてる時間無いし」

「そつだよねー。ちゃっちゃと済ませちゃお！」

前と横の席の男女はお互いの顔を見比べたため息を吐いた。

まあそこまで時間を取られる事もないだろうし波風立てない選択だろうと思う。こうやってなんとかかんとか学校生活を騙し騙しやっていくことこそ僕の望みなんだから文句のあるう筈も無い。なんら問題がなければ僕らは3年後にはここを出て行くのだから。

そして振り返った時、全然楽しくなかった高校生活を思い返し苦笑いを浮かべるのだろう。

僕はソレでいいんだ。

僕は「クラス発表会」で憂鬱な気持ちを引きずりながらも下駄箱へと向かう。理子とゴリが待っているのは最近のお約束だった。すると……

「きゃー！」

「どんくさいなあ。大丈夫？」

文科系の部活なのか3名程の制服の女生徒が階段を駆け上がる際、躓いて転倒しかける。僕はその声に反応し階段を見上げるとチラチラ僕を伺いながらその姿を消した女生徒たち。

「シューゾークーン！」

僕を見つけた理子が駆け寄ってくる。理子のクラスも発表会の相談でもしていたのかいつもより40分程時間がズレていた。

「ごめん遅くなって！梶センパイは今日用事があるからさき帰ってろって！」

「……そそそうなんだ」

「ん？どしたのシューゾークーン」

僕の態度に何かを感じたのか理子は心配そうに僕に聞いた。敏感な感性。ああ、女の子なんだなあ、としみじみ思う。理子に聞いてい

いものか？でも僕には他に聞けそうな女生徒などいない。

「シューゾーくん？」

僕の袖をくいと引き、声までトーンをオトス理子。

夕方の昇降口。

いつもより遅い時間。

紅く染まり始めた下駄箱の列。

人影はまばら。

僕を見詰める理子の不安げで熱心な視線。

そんな空気に当てられたのか……僕は口を滑らせた。

「り理子」

「なあに？」

「ばばばんつってどんなん？」

「ば……え？」

「しし下着」

「パンツ？この？」

理子はスカートの上から自分の腰辺りを両手の人差し指で指す。は

「ん？」

「おおおもいつきりパンツ見えたんだ」

「らっきーってカンジ？」

おどける理子。しかし僕が何を言わんとしているのかは図りかねるようで辛抱強く待っていてくれる。僕が口ベタなのを理解していることなんだと思うとちよっとうれしい。

「そその女生徒は、ぼぼ僕を睨んで去っていったんだけど」

「ふんふん。恥ずかしいモンね」

「それって、ぼぼ僕が加害者なのかな？」

「カガイシャ？」

やはり理子はよく分からないようで首をかしげる。首を傾げたいのは僕なんだが。

「わわ悪かったんなら謝りようもあるけど……ぼぼ僕にはパンツの価値がよくわからない」

「カチ？」

見られて怒るということは、そこに何らかの価値を彼女らは見出しているんじゃないだろうか？しかも一方的である。バツサリ一切の思考を停止させ条件反射で被疑者を断罪する程の価値。それがあるん

じゃないのか？

エロゲよりギャルゲが好きな理由も実はコレだ。生々しい女性のニクタイが耐えられないのだ。CGでさえムリなのだからリアルなどオシテシルベシ、だったりする。理解に苦しむ、ではなくてハナから分らないのだった。割とマジで。

怒ってる訳ではない。僕は知りたかった。その印籠のような価値を持ったコダワリを。男に聞いても（ネットだが）「しまばんはジャステイス！」位しか返答は無い。これまた思考停止。それでは僕は分からない。かと言って女生徒に知り合いはいない。つい最近まで。

僕はここにきて今その謎に迫ろうとしているのだ！！

「なんかよく分かんないけど」

理子は下駄箱の小さな扉をパカリと開きながら僕を見た。

「そんなに見たいなら……とうっ！！」

掴んだスカート裾を元気に持ち上げ僕の正面を向きながら見せ付ける。

「体育だったからパツツでしたー！ざんねーん！」

……いや、そうではなく。

「大サービスですよ！！これすごい事ですよ！！」

ぱっとスカートを降ろし現れたのは耳まで真っ赤な理子の子犬のような人なつつこい笑顔。

「ひやああああ！テレた！！やめとくんだった！！」

ばたばた手のひらで顔を仰ぐ理子。

僕は「ざんねーん」の意味や「大サービス」の定義や「テレた」の根底にあるものが知りたかつたんだが。

これではまるでヘンタイである。

ただスカートを女の子自らの手で捲らせただけのヘンタイである。恥ずかしいことさせている事自体に興奮する徳の高い坊主のようなヘンタイ以外の何者でもない。

「もう！！シューゾーくんはヘンタイくんだったんだねー！！」

ややややややややっぱりいいいいいいいい！！！！！！そりやそつか！！誰が見てもそつか！！

誰に謝ったら許してくれるのコレ！？助けはくるの！？

「かえろヘンタイくん！！」

真っ赤な顔で跳ねるように駆けていく理子。さて問題は。

いかにしてゴリの耳に入らぬよう理子に口止めするかだった。イチローの打率の三倍くらい確立でぬっころされるぞ僕。

……………。

.....。

「りり理子……おおおなか減ってない！？なななんでもおしるよっ
「……」

僕は緊張感を漲らせ自宅マンションへと歩く。

こんなにぎこちなくこの歩き慣れた道を進むのはおそらく初めてだった。なぜなら……

「たのしみー！」

駅から反対方向に帰るはずの理子が隣でニコニコしているから。『なんでも奢る』僕は確かにそう言った。すると理子は

「じゃあねじゃあね！！シューゾーくんのウチ行っつていい!？」

そう言ったのだ。『自宅を奢る』という言葉が成立するの否か。日本語の可能性について考慮する間もなく僕はウチに連絡させられる。

僕は購入の際悩みぬいて決めたinfobarA01を取り出すと自宅にコールする。一回、二回、さん……

「新木だ」

なぜかハードボイルドを気取った父が電話にでた。僕は友人を連れて行ってもよいか聞くと構わない、との返事。夕食を同伴する手はずになった。姉はまだ帰宅して無いが伝えておこう……となぜかどこまでもハード・ボイルドの父にイラツとしながら電話を切る。僕は溜息が出そうになるのを我慢して隣の理子にその旨を伝え

「うん！」「はんもいらない！21時には帰るから！」

既に手配中だった。

とまあ、これが理子と一緒に僕の自宅マンションに向かっている一部始終なのであるが、あの変人の口調につられ回想まで探偵口調になってしまったことをまず詫びよう。え、誰にかつて？そんな昔のことは覚えていない。僕はロック・グラスの中の氷を指でゆるゆると溶かしながらオイルの染み付いたジツポーをカチン、と響かせた。

「じつぽ？」

「いいいやいや！なななんでもない！」

眉間に皺までよっていた！なんなんだあの変人！絶対帰ってもツツコまねえからな！！

「どんな人かな？やっぱり怖いの？」

どうやら理子はゴリのハナシで聞いた姉に興味が沸いたらしく、ビビッてたにも関わらず会いたくなってしまったらしい。その意志の強さに憧れるのだとか。

「ここ怖くはないよ。イメージでいうときよ狂犬ってよりはぐ軍用

犬ってかんじかな」

不安そうな理子の顔。子犬で捨て犬の理子からすればどちらにしても恐怖の対象なのだろうか？

「大丈夫大丈夫！理子ならきききつと仲良くなれると思うし」

ヤツはだれかれ構わず噛み付く類のオンナではない。油断ならぬ人種なのは確かだが常に相手に相応の振る舞いをしているように見える。この場合

「へんなトコ無いかな！？大丈夫かな！？」

自分の足元や背中を気にして不安そうにクルクル回っている理子が相手なのだ。理子に相応の対応なんてアタマを撫で回すかゴリのようにとろんと愛でるのが関の山。それに、大概偏屈なオンナだが僕は知っている。夜な夜な コ コ動画で『わんこ』タグの動画を漁っていることを。つまり理子はヤツの大好物だと言っている！モーマンタイなのである！

「なんか緊張してきた！どんな人かな？どんな人かな！？」

マンションのエレベーターの中で緊張を隠せないでいる理子はそれでも楽しそうで、とても微笑ましい。

目的階に到着した僕と理子はテクテクと通路を歩いて、先導していた僕がドアを開けると

「つけられなかったか？」

首だけ出して辺りを伺う変人・父がいた。

どうやらハード・ボイルドが気に入ったようなのでそっとうしておくとする。

僕は理子を先導し自室にカバンをほ放り投げるとダイニングに向かう。所詮マンションなので向かうってほど大層な事では無いが。申し訳程度の廊下の反対側、その扉を開け

「……」

すぐ閉めた。

「どしたの？」

理子は僕の上着をくいくいとちょっとだけ引つ張り僕の動向を伺うが、さてなんなんだコレ？

なんなんだ！！コレ！！

思わずハード・ボイルドになるのも頷ける。今僕が目にしたのは明らかに日常からは逸脱していたのだ。確かに「僕が友人をウチに招く」というのもかなりの非常事態、なんせ今まで一度も無かったことだ。僕は思わずダイニングに通じる扉に両手を突きそのまま倒れてしまうのをなんとか踏みとどまる。

「今回のミッション、困難は承知なのをあえて聞くが……やれるか？」

たらたら汗を垂らす僕。その脇から変人が僕を覗き込んだ。背が僕より20センチも高い父は新入生の野球部員のように膝に手を突いている。

「ふふ不可能だ」

「お前なら出来る。いや、お前にしか出来ない。私はそう考えている」

「ぼ僕にはて手に余る」

「お前なら出来る。いや、お前にしか出来ない。私はそう考えている」

「いや、だか」

「お前なら出来る。いや、お前にしか出来ない。私はそう考えている」

くっっ!!コノヤロウ……僕の目も見やしねえ。

「あ、あの」

全く事情の飲み込めない理子はただ不安げに僕と変人に挟まれどうしていいのか分からなくなっていた。そんな理子に変人は更に腰を落しバッチコーイスタイルで理子に話しかける。多分身長差は40センチにも達することだろう。

「いらっしゃいお嬢さん」

「はじめまして楠理子です!いつもシューゾーくんにはお世話になっています!」

世話した覚えは全く無いが。それでも勢いよくアタマを下げる理子をぬるい視線で見詰める父。狭い廊下で三人してなにしてたんだか。

「楠さんか。いい名だ」

普通だろバカヤロウ。せめて苗字じゃなくて名前を褒めるよ。

「今日は急に押しかけちゃってご迷惑ではなk」

「楠さんのような女の子を迷惑なんて言う様なヤツは脊髄引き抜いてやりますよ。はっはっは」

その喩えどうにかなんねえのかよおっかねえな。

しかし、父の引きつった笑顔から伝わる緊張は隠しきれぬものではない。こいつも必死なのだ。『来客』にほとんど免疫のない家庭なのは重々承知していたが、それが同じ日に2人。それも女子高生とくればテンパるのもある程度はしょうがないことだと思う。

「なにしてんのよそんなところで。お父さんも早く座って!」

ドーベルマン古都（姉）はダイニングの扉から顔を覗かせる。僕の記憶ではコイツもウチに友人を連れてきたことなどなかったはず。それなのに。

「おおおおじやましています!」

ダイニングに先客。ゆるく余裕を持たせたゆったりとしたパーマに高校生にはあるまじき色気を発散した異分子、カプセル・トイレのオンナだった。

風貌に全くそぐわないワタワタした落ち着きのない目線。絶え間なくこすり合わせる手のひら。なんでコイツがここにいるんだろうか、理解がとて追いつかない。まるでヒトゴトのように現実感が無い。

「ひひヒサシブリー！ゲンキダツタ！？」

その場で立ち上がり僕にメカニカルな挨拶を繰り出すDQNオンナ。それでもやはり持って生まれた素質なのか、見慣れた光景であるダイニングは嫌味なほど華やかに染まっていく。あの時は薄暗くてよく分からなかったが化粧を差し引いても十分整った顔立ちだと思う。

しかし……

「……？」

こんなキャラだったろうか？今のDQNオンナは随分余裕がナイ。と、というか錯乱状態1歩手前の半歩進んだところのように見える。

「周蔵も！突っ立ってないで座る！あなたは……」

「楠理子です！はじめまして！」

「理子ちゃんね、はじめまして。座って」

姉は柔和な笑顔で理子を迎え入れると、理子はぴんと尻尾をたてて付き従う。アイドル歌手をみるファンのように口は半開きで姉の背中を眺める理子。

「柚木さんもいつまでも立ってないで座りなよ」

臆病な者、力の無い者は総じて周囲の状況変化に敏感なものだ。

自らの保身の為努力するのは生物にとって当たり前且つ遺伝子に刻まれた命令であり異を唱えるものは少ないだろう。

今、僕の父であり変人のカレは今まさに危機を敏感に察知し生きる努力をしていた。

味噌汁を飲みながら次のおかずに着を刺しソレを口に運ぶ途中でご飯を手に取る。流れるような一連の動作は熟練のTOYOTAライン作業員のようだった。一秒でも早く与えられたミッションを多くこなすことに魅せられた職人たちのロンド。世間話のついでにこなす恐るべき精密作業。

この父を見ているとまだまだ日本は大丈夫なんじゃないか、そう思わせてくれる頼もしさがあった。

まあ、やってることは一刻も早く食事を済ませ自室に逃げ帰ろうとしてるだけなんだが。

相も変らぬ静寂の中箸の音だけが響く一見華やかな食卓。姉はいつもあまり喋るほうではないしDQNオンナの箸が進まないのもなんとなく分かる。初めてのウチでいきなりガツガツ食事する豪胆なオンナなどいないだろうから。

「理子ちゃんおかわりは？」

「いたらきまふ！」

あ、いた。

僕は料理など出来ないから分からないが、やはり沢山食べてもらえる方が嬉しいんだろうか？ 姉は少しだけ上機嫌に見える。頬袋に詰め込んだ食料をモグモグしながら姉にニコニコと話しかける理子。

「古都センパイはお料理上手なんれふね！ おいしいれふ！」

「そう？ いっぱい食べてね」

マンザラでも無さそうな笑顔がキモチが悪い。

以前姉は言っていた。

料理なんて誰でも出来る、本屋に行けば作り方は分かるしテレビでは頼みもしないのにこう作れと指示される。大事なのは徹底すること。分量、材料、調味料を数字どつりに調理すれば出来ない理由が無い。出来ない人間はありあわせのモノで代用したり個人的な嗜好を取り入れるからだ。数学と同じで自己流では答えが違ってくるのも当たり前前、と。

『料理は愛情』を真つ向から否定する実に姉らしい論だと思う。言っていることは分かるが今の姉の笑顔を見ると単にロジックの結果ではないナニカがあるような気がするが……余計なことと言わない僕はヘタレ・ダンディー。

「おいしかった！ ごちそうさま！」

早っ！？ 僕がダンディーぶってる間に父の皿は綺麗に無くなってい

る！！

「私は読みかけの吉本ば　なの詩集があるから失礼するよ。皆さん
ごゆっくり」

そう言つて皆を煙に巻くと父は笑顔で背中を向ける。あんなアタマ
のおかしいオンナの詩集など読んでなにに役立つのだろうか？

「たまにはアタマのおかしい女性の文章もいいぞ！現実逃避には持
つて来いだ」

はっはっは、と僕の肩をポンと叩き自室に引つ込む父。

……だからさあ！！てめえは思ったことを素直に口にするんじゃね
えっ！！素直が美徳なのは小学生までなんだよっ！！

「ああ、言い忘れた」

ひょいと再度父登場。まだおかしな毒を吐き足りないんだろうか？
全くコイツは変」

「古都は思い込みが強く付き合ひ難いかも知れないし、こっちのこ
いつは引きこもりの肉団子なんだが」

「……肉団子？」

「……肉団子？」

「……」

DQNと理子が気をつかいながらこっさり僕を見たが、僕はヤツを

告訴する算段で忙しい。法的な手段に訴えよう。

「2人とも真つ直ぐなイイヤつなんだ。柚木さんも楠さんも仲良くしてあげてほしい」

どうか、よろしくお願いします。と父は頭を下げた。

「いや！そんな……こつちこそ！！」

立ち上がったDQNはブンブン両手のひらを振り汗を拭いながら恐縮している。初対面のオッサンにアタマ下げられるとは思ってなかったんだろう。

「大事な友達です！こつちもよろしくお願いします！」

ニヒと笑う理子は父に向かって頭上げてくださいと声をかけた。後輩気質の理子は体育会系のスキルを発動させている。

姉は照れくさそうに苦笑いしながら頭を掻き、やめてよお父さんと力の無い口調でぼやいた。つい最近まで寄り合い所帯の出来合い家庭だった我が家のささやかな変容。

僕は以前ほど寒気を感じることも無く、ずっと黙って味噌汁をすった。

おいしかった。

変人・父の三文芝居により幾分打ち解けた感のある姉とDQN、それに理子。愚民は単純でシンプルだからコロツと騙される。逆に羨ましい。せいぜい偽りの団欒を楽しめばいいんだ。そして僕はネットという荒波に人知れず漕ぎ出そう。玉石混合、魑魅魍魎の跋扈する世界の真理に一番近い、あの場所へ！

さあ立ち上がれ！勇気を奮い立たせいざ自室へと！そこで待つものが絶望だろうと後悔だろうと僕は振り向かない！戦いの舞台、27型ミツビシ製液晶モニターの眼前へと

「周蔵」

「ひゃ、ひゃい！」

「リビングにいなさい」

「らららじゃー」

暴君・姉のトップ・ダウンによりリビングでの待機を余儀なくされました。

かちやかちやと台所で洗い物を進める姉は僕の位置からは背中しか見えないがきつと何か企んでいるに違いない。なにやらそういう空気を発散している。

僕は僕で聞きたいことも無いこともない。リビングのソファで自分の膝を凝視しながら座っているオンナDQN。コイツの役割はなんなのか？僕が知らなかっただけで真実姉と友人関係にあったとも考えられるが……どうにも違和感が付きまとう。

「周蔵」

姉の背中越しの呼びかけ。

「お姉ちゃんあんたに聞きたいことあるの」

おお『お姉ちゃん』！？もう嫌な予感しかしねえ！！和やか製造機、人間関係緩和剤の理子はどちらに！？出番だぞー！！

「センパイお皿拭き完了しました！」

「うん、ありがとう理子ちゃん！理子ちゃんも座ってて」

「はい！」

とつくに骨抜きである。理子はひと仕事終えた爽やかな笑顔でリビングの絨毯にペタンと座った。残像が見えるほど尻尾を振って。牙を抜かれた捨て犬……お前は今日、今から只の使えない室内犬に墮落したぞ。

「で、あんたさ」

「？」

姉はタオルで自分の手を拭きながら振り向く。

「理子ちゃんと付き合ってたの？」

「……！？」

反応を示したのは理子。尻尾がピタリと止まり電池切れのアイボのような無機質な佇まい。カチーン、という表現がぴったりの理子には珍しい光景だった。

「やややめてください古都センパイ！そんな訳ないです！」

「……？」

何を言い出すかと思えばこの色ボケ姉。まあコイツも所詮女子。即物的な思考しか持ち得ないメスなのだ。この手の話題が好物だったとは知らなかったが、血迷うにも程がある。僕は3次元は苦手なんだと一緒に暮らしていても理解しないとは。僕は愚かな俗物であるところの姉に憐憫の情を抱かずにはい

「でも今後、そうならちよつといいなとは思わなくも無いです
！はい！」

おお。言つてやれ言つてやれ。

この破廉恥な俗物にもつと己の愚かさを自覚させるような辛らつな皮肉を突き刺してやるのだ理子。なかなかどうしてコイツもワルよ
のう。

「……！！」

ものすごい勢いで立ち上がるDQN。なんだよ、そのまま天井刺さるんじゃないかと思つたじゃないか。ん？お前も愚かな姉に一家言ありそうだな。どんどん言つてやれどんどん。

「あたし、……そうならスゲー困るんだけど」

おおつ？言葉の意味はよく分からんがとにかく（以下略）。姉とて悪気があったわけでは無いのだから。まあ2人ともその辺で許してあげてもよからう。愚かなことは罪ではない。ほーね、今にも泣き出さんばかりのあの姉の……

ん？

「はいどーすんのあんた？」

まさにメタル・ハート。余裕シャクシャク。コイツの心臓はふっさふっさに毛が生えてるのか？DQNと理子にここまで辛らつに皮肉られ尚揺るがない姉に乾杯！

……。

……。

どーすんのって……なんだ？

姉4

アホ面だ。結果は分かっただけがこつも見事にアホ面を晒されては笑うしかない。

「あー。ちよつと柚木さんいい？」

私は柚木さんの袖を引き立ち上がる。我ながら余計な事をしてるなと思うが、これでは余りにも柚木さんが可哀想だ。見てよあのバカのアホ面。
全く分かってない。自分が立っている場所を理解できていない。

「あ……ちよつと」

「いーからいーから」

柚木さんは理子ちゃんとバカを残してこの場を去ることに抵抗を覚えていたようだが、多分心配するような事にはならない。理子ちゃんの気持ちはまだ漠然としたものだし、なによりバカ相手にどうこうしようが無い。

「どどどどどいくの？」

バカはアホ面でそう言った。

「作戦会議よ。理子ちゃんは寛いでて」

「はい」

こころなしに顔を赤らめている理子ちゃんはそれなりに状況を把握しているのか、先ほどまでの無邪気さは薄れている。恋愛とは経験則に縛られがちなモノなので、理子ちゃんは過去に好きな人なり彼氏なりがいた経験があるのかも。だって表情に色気があるもの。

.....。

私はじっとバカを見る。

「..... ななんだよ。言つとくがよ吉本　　なながアタマがおおおかしいつて言つたのは僕じゃ」

..... ダメだこりゃ。

精神年齢は女性の方が総じて高いとは良く聞かすが、もうそういう問題じゃないのよね。なんで柚木さんみたいな綺麗なコや理子ちゃんみたいな可愛い子がこんな大バカヤロウに好感を持っているのか？ つくづく恋愛つてのは勘違いと思ひ込みの産物なんだと再確認させられた。

「冷蔵庫にケーキあるから。理子ちゃんも食べてね」

「あ、ありがとうございます！いただきます！」

ぺこりとアタマを下げる理子ちゃん。..... ホントかわいいなあこのコ。いや、柚木さんだってものすごく可愛いんだけど。全く理解に苦しむよ。

私は自室まで柚木さんを引っ張つてくるとベットに腰掛ける。柚木さんはへなへなと絨毯に崩れ落ちるように座った。随分消耗したらしく苦笑いまでが余裕を失っている。

「やっぱり……ダメっぽい。あたし完敗？」

自己判断では劣勢と踏んでいたようだが、つくり肩を落とす柚木さん。真剣な表情。理子ちゃんのことを恨む訳でもなく、周蔵への気持ちも誤魔化すわけでも無い。不器用で、真摯な態度。だから私は彼女をほつておけない。

「その前にちよつと聞いて欲しいんだけど」

「……？」

なんて言えばいいんだろうか。私は思索を巡らせる。

そのうち通学路に暴走した馬が現れて蹴り殺されない事を祈りながら。

「柚木さんは兄弟いる？」

「え……兄貴が1人」

「好き？」

「キモイ」

「近い関係の人間には嫌悪感を抱くのは普通よね？」

「そ、そりゃそうだと思つよ」

「その理由は単にみつともない姿を日常的に見てしまっているとか、近親婚を避けるための遺伝子の命令だとか、……まあ私は学者じゃ

ないし詳しくは知らないけど」

「……………」

柚木さんは私の意図が分からないようで難しい顔をして聞いている。分からないだろうなあ。私だって想像しただけだから自信無いんだけどなあ。

「今の構図の『枠』をね。ちょっと拡げてほしいの」

「わく？」

自信ないなあ。言いたくないなあ。

「例えば神様とか天使とか、何でもいいけど居たとして」

「……………」

「憧れてたり、崇拜してたり……………してたとするでしょ？」

「？」

「するとね。近しい存在は『ニンゲン』でしょ？神様よりは。ハナシも出来るし触れるし」

「そ、そうなる……………の？」

「で、さっきの話の構図に当てはめると。周蔵にとって嫌悪感を抱くべき『近しい存在』なのは人間ってことになってるんじゃないかなあ？」

神様の席に『アニメキャラクター』が胡坐をかいているのは内緒だ。

「か！かなあつてなによ！？」

激昂する柚木さん。ああ、このコもやっぱり可愛いなあ。真っ直ぐだなあ。

「昔ちよつと考えてただけど、なんか途中で違うような気がしてきちゃった（テへ）」

「ななな！なに舌出して似合わないコトしてんの！？真面目に聞いて損したっ！！」

「ご、ごめん。でも昔はホントにそんな事考えちゃうくらい人間嫌いだったんだもんアイツ！」

「なんだよ！もー！！……もーっ！！」

そっだ。

周蔵も昔の周蔵ではないのだ。

アタマを私の目の前で掻き毟る柚木さんだって愛らしい。理子ちゃんだってスゴク可愛い。

やはりこの手の問題は他人が口を出すべきことじゃないんだろうな。なんて無責任に思ってしまった。

「あんたにしか頼めないんだよっ！！真面目にやっつけてくれない！？」

涙目をふるふる振るわせて私に詰め寄る柚木さん。

「…………ごめんカナ。ちゃんと応援するから」

一瞬目がテンになるカナ。私はこの不器用なコの事をそう呼ぶことにした。

「あ、ああ。ホント頼むよ…………古都」

わしわしわしわし。

せっかくの綺麗な髪が台無しである。全く、外見ばかり派手で華美。そのくせ不器用で気が弱く涙もろい。アンバランスな陶磁器人形に命を放り込んだような不思議な子のことを私は少し気に入ったのだ。

……………

ちよつとだけ周蔵みたいだ、そう思ってしまったから。

「…………なに？」

私はカナに問う。カナの視線がさっきから私を捉えてウルサイくらいだ。

「なんでもない」

一切解決を見なかった『作戦会議』。

それでもカナはなぜかうれしそうに清々しい笑顔を私の部屋に振り

ました。

「が合唱部？」

「そうです！」

理子は乳幼児のような胸を張り誇らしげに宣言した。なぜか鼻息も荒い。

「中学校のときは全国大会に行つたのです！」

ムフーと勝ち誇つた表情の理子は気が付いていない。僕にとって『合唱部で全国大会』など単なる黒歴史でしかないことを。全く羨ましくない。ていうか気の毒だ。ムフーやめるこのやろう。

「だからね？今度のクラス発表会が楽しみなの！」

おいおいおい。そんなもの楽しみにしてるのはお前か受刑者くらいだ。娯楽に飢え過ぎだろう。

「わたしのクラス相変わらず皆おとなしくてさ。こつこつ機会でも無いときっかけが無いみたい」

「そそそつなんだ」

寂しがり室内犬からしたら辛いのかも知れない。僕のクラスは、まあ僕はさておき皆割と打ち解けてきた感はある。その僕でさえ藤崎

やら智花と僅かながらハナシ位するのだから。理子の現状は詳しく分からないが表情から察するにかなり深刻なのかもしれない。

「そういえばシューゾーくんって……柚木センパイと知り合いだったの?」

「あ。ううん。いー回会っただけだけど」

「いつかい!?!」

「……コンビニ行ったときに。ゴリとしし知り合いみたいだったし」

「ゴリ? あ、梶センパイ? そうなの?」

「りり理子も見てるかとおお思ったけど。が学校で」

うーん、どうだったかな。

ゴリが牛乳買いに行かせたからほとんど見てないかも。そういやあの時ゴリはなんか物騒な事言ってた気がするが……多分あのDQNオンナはそんなカンジじゃない。姉も知り合いみたいだしおっかない人間には見えないんだが。

「……綺麗なひとだね」

「ももモデルなんだってさ」

多くの目に晒される雑誌という媒体に掲載されお金を貰えるってことはそういうことなんだろう。大多数の人間が『綺麗だ』と認識していなければそんなバイト出来ないもんなあ。僕がどう思おうと民主主義ニッポンでは最大公約数の勝利なのである。

「なんか仕種とか可愛いし。いいなあ」

拳動不審なだけだった気がしないでもない。対照的に理子がたまに体育会系なのは全国大会とか行く部活やってたからなんだろうな（合唱だが）。それは僕から見たらいいことだと思っただが、理子は思うところがあるようだなにか考えている。

「シューゾーくんの好きなタイプってある？」

「たたタイプ？」

「うん！元気なコとか大人しいコとか」

うーん、どうだろう？あまり考えたことがなかった。なんせ普段は早い者勝ちで『は俺の嫁！』といかに素早く書き込むかだけなので。うーん。

「りり理子っぽいカンジ」

「……！！！！！！」

こいつはあまり生々しくない、というか2次ツぽいのだ。なんといいうかキャラっぽい。

みんながみんな理子のようだったら世界はもっと平和になるのに。国会とかでシッポピコピコしてご飯モフモフして。おおっ、ちょっと萌えてキタ。

「そそ、それってわたしってこと！？」

「それはない」

いやいやいやいや。そんなにエキサイトされてもムリなもんはムリだぜお嬢ちゃん。なにが気に食わないのか知らないがそんなガツチリ肩つかまれても。

「『理子っばい』って言った！ここにいるよ本人！はいはい！わたし理子！どうぞよろしく！！」

「ない」

「な！ちょ！シューゾーくん訳わかn」

「ない」

理子っばい、はあくまで概念の問題であり理子そのものではない。理子のことは好きだし、イヤっだと思っではいるが『好みの異性か？』と問われれば否！断じて否！じゃあどんなだよと聞かれても答えなど無い！そんなものは前世で廃品回収にてトイレット・ペーパーと化しておるわ！！そう！！理子でケツは拭けないのだ！！うはははははははははっ！！

おや？

「はべっ！？」

「わ・け・わ・か・ん・な・い・！！」

わ・け・わ・か・ん・な・い、と一文字づつクッションで殴られた。

どつやら僕はまたやらかしたようで、それでもやっぱり原因が分からない僕はまた繰り返すのだからなあ。リアルはとことん無理ゲーなのである。

「……ちよつとカナ。なに笑ってんのよ。聞こえちやうじゃない」

「いや……やっぱり拒否る時はカマねーんだと思ってさ。ぷっクッ」

理子を駅まで送り届けた僕は来た道を逆に進む。

駅まで母親が迎えに来ていて相変わらず僕はわたたしてしまつたが、娘さんをカドワカス類の人種ではないことが彼女の中で判明したよう目で目に見えてホツとしていた。

やはり愛されているオンナ理子である。

なぜか曲がつっていたヘソも帰り道ではいつもの理子だったので僕も安心していた。全くコロコロコロコロ忙しいやつだ。未だにメスの生態はよく分らん。噂では地図が読めないそうだが今度理子で試してみよう。

「……………」

僕はポケットに手を突き入れ空を見る。

住宅街なので明かりも少なく星やら月やらがチ力チ力しておる。

「……………」

父も姉もなんだかタノシそうだった。食事するだけだったのにすぐタノシそうに見えた。

僕は僕で相変わらずの僕でしかないのだが、不思議と何が変わった訳でもないのに周りは騒がしい。

「……………」

最近、気が付いた事がある。
以前はそんな事全く思わなかったのだが……意外に世界はイイやつばかりなのだ。

今日いたDQNオンナ。これなど以前であれば繋がりなどあるう筈もなかった最たる人種だ。なのに……ちゃんと気も使えるし挨拶だって出来る。DQNなど心の中で「このビッチが!!」といったも罵倒していたにも関わらず、実際は僕などより余程常識人だった。正直名前は忘れていたのでちゃんと覚えておこう。ユズキカナ、と。

ゴリ。コイツなんかは僕には殆どカルチャー・ショックだ。何が気に入ったのかは知らないがやたら僕に絡んでくる見た目犯罪者のこの男、実は心が広いんじゃないか?と感じている。パックジュースにしたってコイツのキャラなら「さつさと買って来い」と唾でも吐きそうなのに、しない。律儀に毎回ジャンケンだ。いっても後輩の僕らに先輩風的なものは一切感じさせない。言動も中立で公平を期すようなどころも見受けられる。妙な生態を持った野生動物だ。

理子。まあ理子は見たままだ。僕はいつか理子が口をすべらせ「わん」と語尾につけてしまう姿を密かに期待している。

「……」

藤崎にしたって線の細いリア充。誰とでも割と親しげに話すいけ好かない男。いつ爆発するのか後ろの席の僕はヒヤヒヤしたもんだが……普通なのである。多分僕に興味があるわけじゃないのにちゃんと会話を成立させる謎のイケメン。不思議ともう敵意も害意も感じない。THE・高校生。

智花は……正直そこまで知らない。意外と腹黒かったりしても僕は

全く驚かないが、どうもそうでもないようだ。いや、確信は無いが。

「……………」

僕はポケットに入っていた小銭を自販機に放り込み缶コーヒーを買った。「つめたーい」やつだ。少し肌寒かったが「あつたかーい」やつが苦手な僕はいつも「つめたーい」のだ。

カキヨ、とプルトップを上げちょっとだけ飲む。そして僕は春のおかしな匂いの中自宅へと歩く。

「……………」

昔怖かったものがよく分からない。

一体何にあれほどおびえていたのか。悪意や敵意が呼吸するたびに増幅されるような『アレ』はなんだったのか？

声に怯え、空気に縮こまり、日が昇るのを恐れた僕と何が違う？ 毎日薄い氷の上に立たされていたあの恐怖は、実はそんなコトなくて、僕が勝手にそう思っていただけで。

僕だけがオカシイんだと思っていた。僕がいつも悪かったんだと思っていた。

喉に詰まって取れなくなるようなあの空気。あれは僕の思い込みであり、只の自意識過剰だったんだろうか。ひょっとしたら僕は……………」

このまま生活を楽しんでいいんだろうか？

僕は缶を唇に付け傾ける。

少し重たい液体の感触が喉を通る。

「……………」

今度、「あつたかーい」「やつ買ってみよう。

意外とイヤツかも知れないから。

気持ちの良い春晴れ。とか人並みに思ってみたりする。

ケチを付ける隙を世の中に探してみるが今日はなかなか見当たらない。断固普通、『ある日』としか言えない、そんな日である。

空から女の子は落ちてこないし、異世界にも飛ばされない。誰も食パン啜えてないし、お嬢様のリムジンだつて見当たらない。

そんな心地よい朝を隠れるように歩く。今日も一日平和でありますようにとアツラーとかイエスとかなんかその辺に祈る。どれか引つかかれば儲けモンだし引つかかなくても「またか」位で済む程度なら、まあいい。

特に声を掛けられない。ので校門をくぐる。きゃっきゃ騒ぐタイプの生徒はこの学校にはあまりいないので静かなものだった。4割くらいの生徒は単語帳を吸い込まれるように見詰めている。あれで前が見えてるのだから慣れというのは恐ろしい。ザ・ガリ勉のあるべき姿がここにはある。

僕は出来杉くん量産型たちの姿に軽く感動しつつ自分の教室へと向かった。

「おはよう」

藤崎に挨拶される。僕はワタワタと返事をする耳障りな音を立て椅子を引いた。

そこへふらりと現れる女生徒の影。

「いいなーあれ」

「あ、おはよう智花ちゃん」

校庭を眺めるように教室に入ってきた智花はなにやら羨ましそうに
呟く。

「『特進クラス』午前中はサッカーとバレーなんだって」

「？」

なんのことがよく分からず僕が首を捻っているとカバンを乱暴に置
いた智花が説明してくれる。

「3年のクラスはね、一クラスだけ『特進クラス』って呼ばれてる
の」

はて？

語感から推測するに成績のいい生徒を集めたクラスのように聞こえ
るが……だとすれば授業中遊んでなんかられないんじゃないだろう
か？

「お姉さん『特進』でしょ？知らなかった？」

「はは初めてきき聞いた」

ヤツは多くを語らない。自信家のクセに自慢は一切しないのだ。ま
あそんなこと聞いたところで「ふーん」とすら出なかったと思うが。

「普通の学校の選抜クラスは今頃血眼で勉強してるんだらうけど、
もうあの人はそういうの超えちゃってるらしいね。今さら誰も焦

らない。気楽なモンだよ、勉強しない高校3年生なんて」

そう呟き、溜息を吐きながら机に倒れこむ藤崎。なんかコイツはいつも困ってるか嘆いてるなあ。

しかしちよつと納得がいった。

以前のカラオケでの姉のクラスの様子はこの学校にはどう考えてもミスマッチだった。やけにノリが良く皆力ラツと明るい人間ばかりだったように思っていたが、なるほどそういうことか。高3にあるべき不安がナイんだ。そりゃサッカーだろうがバレーだろうがなんでもやるよな。

「……」

校庭から聞こえる歓声を少々耳障りなバック・ミュージックのよう聞きながら、みな授業が始まるまでの短い時間を過ごす。

日常。これが『普段』である。

僕は別に『特進クラス』などというクラスに行きたいとも思えないし、多分いけないんだろう。僕は普通に受験勉強にヒーヒー呻きながら聞いたことも無いような大学に行ければゴマンエツなのである。ザワザワと少しだけ騒がしい朝の光景。痛くも痒くもないこの平穏。とりあえずこんなもんだよきつと。

「シューゾークーン！」

「……っ！……！」

瞬間キン、とひび割れる教室内。

理子が廊下の窓からびよこんと顔を出す。いつも通り。じゃあこれ

はなんだ？

「お母さんがよろしくって！今度ウチに遊びに来てって言ってた！」

「あ、ああ……」

理子はいつも通り。じゃあいつも通りじゃないのはなんだ！？
相変わらず校庭からは遠く歓声が届いているのに。

僕は反射的に教室を見渡す。違和感が背中を撫で、冷や汗がツルツルと滑っていく。背中……

「じゃあまたおひるね！」

理子の挨拶を肩口で受け引きつった笑顔で見送った。

「……」

理子が来たから？

藤崎、智花……教室内。

僕の視界には生徒達の背中しか見えなくなっている。

理子が消えた途端振り返すザワザワとした喧騒。雑談の渦。グルグルグルグルと声が万華鏡のように乱反射する。

いまだに頑なに前を向く藤崎。無理やり横を向いているような態勢の智花。

「わって……アレじゃないのか？」

もう授業などほとんど耳に入らない。

午前中ずっと僕はうつむいて汗を拭っていた。

「っ……は、」

息苦しい。汗が止まらない。

「……」

落ち着け落ち着け。僕なら大丈夫だ。なんせ免疫ツキマクリなのだから。

音を立てないようゆっくりと息を吸い込み鼓動をねじ伏せる。開いているノートは腕の汗でヨレヨレになってしまっていた。

しかし、あれだ。その、なんだ。平和ボケっていうの？怖いね。

最近ちょっと毎日平和に過ぎてたもんだから油断してた。何事も備えが大切だし、僕は対処法を知っている。だから大丈夫なのだ。ちよっと試してみよう。

「……」

僕はノートに目を向けると昔に思いを飛ばす。こんなことはしよつちゅうだった。痛くない。アイ・アム・ストーン。ストーン。……すとおおおおんっ！！心まで石になりましょう。コツは何も考えない、何も見ない、何も聞かない。

「……………」

自動書記。ほとんど意識せずにいたのだが僕のノートには一言だけ殴り書きがしてあった。うむ、キレはまだある。まだまだ捨てたモンじゃないね。

僕は『氏ねじゃなくて死ね』と書かれたノートをペラリと一枚めくり文字を隠した。

何がきっかけだったのかは知らないが始まったモノはしょうがない。中学校の延長戦だと思えば気分もそこまで落ちない。

「は……………」

なんだよ。

「痛っ」

おかしいな？なかなか息苦しさか……………というか、痛い。

僕は基本的には変わっていない。そんなに簡単に変われたら苦労はしないのだ。なので免疫バリアが効くはずなんだけどなあ？

体の芯つてのがあるのかどうかは知らないが、座って授業を受けているにも関わらずブレる。汗が冷たく感じる。んー、ホースで水かけられている様な違和感？『冷や汗』とはよく言ったもんだ。

「……………」

……………。

いや！！あれは僕の勘違いだ。
理子が他人に攻撃的な嫌われ方をするなんて考えられない。標的が
理子のはずはない。僕だろ！！
僕は気持ち悪いぞー！！『フヒヒ……サーセン』とか言っちゃうぞ
！！なんか最近抜け毛も多いから多分ハゲルね間違いない！！脂性
のキモオタオヤジ当確！！サラブレツてるね！！将来会社の忘年会
で新人の女の子の初体験とか聞いちゃうね！興味無くても嫌がらせ
の一環として聞くね！！

「……っ」

僕なら大丈夫なんだ。慣れてるから。だから僕だろ。

なんで足が震えてんだ？さんざんやってきたことなんだ。今さら何
を恐れるコトがあるう！さあどっからでもかかってきやがれコノヤ
ロウ！！

「シューゾークーン！！中庭いこー！！」

ビキビキと空気の軋む音が聞こえるようだった。

朝よりもより露骨な悪意の提示。教室内の生徒たちは異分子の登場
で団結を始める。早い。誰も声を発しなくなるまでほとんど時間は
かからない。

「あ………すぐいい行くから、ささ先行ってて」

「はいー！！」

僕は理子の姿が見えなくなるまで自分の席から動かなかつた。やる
ことがあつたから。
前の席、動かない背中に向かつて静かに声をかける。多分僕から声
を掛けるのは初めてだつたと思う。

「ふ藤崎君」

ビク、と微かに揺れた背中はしかし向きを変えようとはしない。藤
崎には多分大した罪は無い。それはこのクラス全員にも言えること
なのだが。
そういうもんだ。大多数を占めるのは、どっちでもいい流動的な生
徒。自分に被害が出なければそれでいい生徒。藤崎はそのうちの
一人。それだけ。

ガガッ、と乱暴に前の席が床のタイルを削る音が響いたと同時に、藤
崎は僕の目を見ずに横をすり抜けて去っていった。

「……………」

藤崎の撤退によりふわりと煽られた僕の前髪が、ちよつとだけ揺れ

る。

「……」

おおつ。大事なコツ忘れてた。

何も考えない、何も見ない、何も聞かない。んで、誰も信じないつと。

中庭に行くには売店や食堂とは全く逆方向。ほとんど誰にも会わずに到着するのがいつもだった。

僕は廊下の端に寄りながら他の生徒とは逆に進む。誰とも目を合わさず、誰にも気付かれない。痩せたため外見が普通になったことによつて僕のステルススキルは跳ね上がっており、考え事にも没頭できる。

冷静に考えて理子が何らかのきっかけを作ったとは考えにくい。あれは憎む対象としては役不足もいitトコなのだ。ちっちゃくてゲンキでいつも笑つてて、寂しがりで裏表の無い捨て犬オンナ……それが理子。こんな女生徒を憎んだり恨んだりは、どう考えても時間の無駄。でも。

朝は藤崎も智花も普通だった。たわいも無い会話をして気だるく溜息を吐く、完全に普通の光景でしかない。異変の発端はやはり理子が姿を見せてから。空気の硬化、ごろりとした違和感。

「……」

吐き気がする。

僕は冷たい汗を拭いながら思い出す。

一切の疎通を断絶する背中。積極的に関わり合いにならなければそのうち頭の上を過ぎていく、そう子供のように信じているかに見える

る残酷な背中。『能動的な無関心』という第三者特有の離れ業、むりやり液晶画面の向こう側に理子を追いやった力技。

いやいやいやいや。お見事。相変わらぬ手際、この手の事象に関する第三者のチーム・ワークに感心する。

なんだよ、出来てんじゃんかクラスのキズナ。

ま、僕はいつものようにそのワツカの外側で『最近平和だなあ』なんて血迷っていた訳であるが。

「……」

正直……気は重かった。

僕だけが対象であったならどれだけ気が楽だったろう。きっと僕なら理子ともゴリとも付き合うのをやめて、取りあえずは石になっていたんだろつなあ。なんならそのまま3年間過ごしたっていい。でも理子はきつとそんな真似は出来ない。なのでどう対応していいのかイマイチ分からない。とにかく陰湿で煩わしい。

沼を掻き分け彼方を目指すような暗澹たる気分をヒサシブリに感じていた。

ホントに

うんざり、……してしまっ。

「シューゾークン！」

誰も居ない裏口から中庭へ出ようと扉に手を掛けたと同時に呼び止められる。

お昼なのにいつも薄暗いこの場所は寒々とした空気が沈殿している。ああ、コイツはいつもゲンキだなあ。僕は正直理子の天真爛漫さに

ある種の負い目を感じる。ひよつとしたら……コイツはこのまま何も知らずに学校生活を送れるんじゃないだろうか？

理子はニコニコと僕の顔を黙って見ていた。

「……？」

弁当は？そう聞きたかった。

手ぶらでこんな裏口に用のある奴はいない。ここは中庭への入り口でしかなく、それ以上の意味なんて

「なんかわたし、無視されちゃってさ」

ぎゅつぎゅつと心臓を握られたような苦しさ。

「だから、中庭でご飯食べるのやめようと思うのです」

照れ笑い。理子は笑顔だった。

薄暗い裏口、理子は奇妙な笑顔だった。

「シューゾーくんにも梶センパイにも迷惑かけたくないの」

ムリだ。理子にはそんなこと出来ないよ。

「古都センパイみたいにやってみるよわたし！見てて！」

あんなキチガイオンナの真似なんか誰も出来ない。出来る訳がない。何から何まで違うじゃないか。優劣の問題じゃない、アレが特殊なんだ。

よし頑張るぞ、そういつた理子はやはり笑顔で僕を見る。僕はどんな顔をしてるんだろうか？少なくとも笑顔じゃない。それくらいしか分からない。なんか足元がフワフワと落ち着かず、僕にしては珍しく汗もかいていなかった。

「じゃあ新木くん、またね！」

なんでだろう？

なんで僕が考えてた事分かったんだろう？

てってつとと廊下を走り去る理子は一度も振り向かない。「新木君」とそう言っていた理子は……あれは本当に笑っていたんだろうか？僕が気が重く、煩わしかったのは理子のせいだったんだろうか？

「……」

なに言ってたんだよアホウト、なぜ僕は理子に言えなかったんだろうか？

陰湿で残酷で粘着質などつかの誰かが僕の態度を見ていたらきつと楽しくてしょうがないだろうな。

理子にあんな歪な笑顔をさせた僕を仲間だと思うかも知れない。

陰湿で残酷だったのは僕だった。どうしようもない僕だった。痛快だ。滑稽だ。

だって

僕がアタマの隙間で理子を疎ましく思ってしまったのはどう考えて

も事実なのだから。そんな僕の残酷さを見透かした理子の笑顔はだから……奇妙に捻じ曲がっていたんじゃないか？

「……ふー」

これはもう「人付き合いが苦手」ってレベルじゃない。

僕は、単なる、クソヤロウ、だ。

「……それで？」

なるべく客観的に、私情を交えず理子の現状をゴリに伝える。白々しい程の晴天なのだが気分はキャラメル・マキアートのようにドロドロでべたべたしていた。陰湿な空気に纏わり付かれてどうにも落ち着かない。

寝そべりながら僕の話聞いていたゴリは、デカイ体を上半身だけ起こし静かな口調で僕に問いかける。その間僕はずっと突っ立っていた。

「なんででめえはここにいるんだ？」

僕を責めているのだろうか、アイニク僕は頭が悪い。遠まわしな言い方をされてもさっぱり分からないのだ。

今の僕に分かるのは空の青と芝生の緑、あとはゴリの顔が蒼ざめていたこと。

「事情はなんとなくわかったよ。こんな学校だ。この時期その手のトラブルは風物詩みたいなモンなんだが」

物凄い劣等感。眩暈がする。

「まさか……このまま理子、ほっとく気か？」

そりゃあそつだ。その疑問は至極全うで健全で非の打ち所がないよ。誰だってそう思うし僕だって出来れば理子を助けてあげたい。

「……と」

「あ？なんだ？」

「ととりあえず、様子を」

バチッと。視界の白さにびっくりした。

座っていたのでそこまで力が入ってなかったんだろうが、僕の鼻から血を出させる位はカルインだろ。痛いというよりは驚いた。たまた、と僕のスリッパに落ちる赤色は普段目にする事の無い生々しい艶できらきら太陽を反射している。

「あ、あー……もう誰もなぐらねえって決めてたんだがな」

手首をぷらぷらと返すゴリ。

「いじめん」

「……てめ、」

反射的に謝ってしまった僕をギラギラした眼光が捉える。

ぐんと、ほとんど体が浮いていた。

立ち上がったゴリは僕の胸倉を掴むとカラオケの時の様な空虚な目で僕の顎辺りに視線を置く。たらりとみっともなく流れる僕の鼻血が自分の手に思いつきり付いてしまっていたがゴリは気にしてないようだ。

「そのバカヤロウ共ブン殴りに行くからてめえも来い」

首謀者のことを言っているんだろうか？

「……………」

ゴリが調べれば判明するんだろう。姉に頼むのもいいかも知れないでも。

「返事をしろよ」

「…………… なな殴つても、かか解決なんかししない」

「あ？」

「いい一年生を端のクラスからじゅ順に、なな殴るのか？」

「なに言ってるんだてめえ。裏で糸引してるアホウがいんだろうが」

「そそそれは対象がかか変わるだけで、な無くなるわけじゃないじゃないか」

「わかんねえよ」

「わわ分かれよ！理子があああなたに頼らないのは、そそそこじゃないか！」

そうなんだと思う。理子はやっぱり根が善人なのだ。僕なんかは真っ先に泣きついてしまうだろう。都合よく知り合いだったマツチヨなゴリラに成敗を依頼し、自分は隅っこでぶるぶる震えていたかも知れない。

「そそそんなゴツイ手でなな殴られたら痛いし、こ怖い！でもそれそれは単に構図が変わるだけだろ！？対象が『理子』から『理子を嫌いな誰か』になるだけで、なな無くなってるない！」

「いいじゃねえか思い知らせてやれば。俺は理子が笑ってればそれでいいんだよ。そのアホウ共なんざ知ったことか」

そうだろそうだろ！僕だってそう思う！みんなそう思うよ！誰が力ガイシヤまで気に掛けるんだよって！
でも！

「りり理子は笑えないだろ？」

お人よしが過ぎる。もうバカである。しかし多分……そんな理子がゴリも僕も好きなんだ。

「……」

黙るゴリ。依然胸倉は掴まれたまま、どんな腕力してんだこいつは。

「じゃあ、どうするよ」

思案の結果、僕の推測に同意したゴリは僕から掴んだ手を離し、ふて腐れたように言う。

「お前の言うこともなんとなく分かる」

なんとなくかよ！

「でもやっぱり俺は……納得できねえ。ちょっと探り入れてみるわ」

てめえはどうする？とゴリは生意気にも視線で語る。しかし意外にハナシが伝わるなあ。やっぱりヘンなやつだ。でもまあ、やれることなんて僕には無いわけで。

「ばば、パン食べる」

「はあ？」

僕は鼻血を撒き散らしながら言う。ハナの奥がツンと痛むのと、口の中が鉄の味で吐きそうになったがなんとか言ったのだ。

「ば僕は！ま毎日ここで！ばばパンを食べる！！」

理子

想像以上なものでした。

教室の中で自分の席、ひとりつきり。もちろん人は沢山居るしざわざわと声は聞こえる。でも、わたしの周りには誰も居ない。

これなら体育館の裏でぼつんとしたほうが随分マシに思える。シューゾーくんと話した日からまだ5日しか経ってないのにわたしは既に辛いのです。

中庭でシューゾーくんと梶センパイは仲良くしてるだろうか？シューゾーくんは隠れて「ゴリ」と呼んでいたがうっかりそう呼んで無いただろうか？

授業は相変わらず凄いスピードで進んでゆく。周りを気にする暇なんか無い。それは他の皆も同じである。でも。

ガヤガヤと話し声の響くお昼休み、わたしは一人なんだと思い知らされるのだ。

一体何がどうなったのか？もちろん気にはなるがわたしにとって原因なんてもうどうでも良くなっていた。

裏を返せば「原因さえあればいつでもこんな事態に陥る」と知ってしまったから。

わたしが嫌われてるのは別にいい。出来れば仲良くしたいのだけけれど、そんな事もあるのかもしれない。でも。

誰かの掛けた号令で瞬時に様変わりするこの様子はなんなんだろう。

最近ではもはや1年の校舎でわたしに話しかける生徒など居なくなっていた。

あ……シューゾーくんだけはいつも「おはよう」とか「ゲンキ？」

とか声を掛けてくれる。わたしは一度も返事してないのにたどたどしい口調で、いつもみたくに不器用に。

やっぱり、こんな思いはシューゾーくんにはさせられない。だから返事しない。古都センパイのように毅然としなければ。別に叩かれたり、蹴られたり暴力に晒されてる訳ではないんだ。キモチ。気持ちの問題。

とは言っても、こんな日は気も滅入る。

校庭は水浸し。少し湿気の籠った教室内はぬるい空気が充満していて、わたしの座っている机の表面にまで霧吹きで吹きかけたように湿気を帯びていた。お昼前位から急に降り出した雨はみるみるうちに勢いを増し、ほとんど豪雨。空は分厚い雨雲で埋め尽くされていた。

「うわ、おれ傘持ってたねえよ」

うんざりした様子で窓際のクラスメイトの葛西君が嘆く。当然話したことはない。

傘か……わたしも持って来ていない。朝は晴れていたのに。

わたしが帰りの手段を考えていると……ていん、と足にナニカが当たった。カカッと椅子を引き足元を覗くと真新しい大きめの消しゴム。誰かが落としたんだろうか？と周りを見渡すと不意にぶつかる視線。

「……………」

斜め後ろの席の生徒。生田さんだった。
おとなしくてつい最近まで割と仲が良かった女の子。その生田さんが遠慮がちにゆっくり近寄ってくる。

「はい！消しゴム」

「……」

一度もわたしに目を合わさない生田さんは機械的な動作でわたしの手に乗っていた消しゴムを持っていった。すると去っていく背中。心が締め付けられる。やっぱり、哀しかった。

半年……わたしはこんな状態が続くんだろうか？いや、半年で終わる保障などどこにも無い。ずっとこのまま……

背筋が寒くなる。足の力が抜けてわたしは倒れこむように椅子に寄りかかった。

クラスの喧騒などわたしには全く関係なく、ただ雨音だけを聞く。わたしはきつと古都センパイみたいには出来ない。最初から分かってた。ただわたしはシューゾーくんや梶センパイに心配させたくなかった。ホントにそれだけ。わたしが耐えられるのかどうかの部分が完全に抜け落ちていたのだ。

妙な意地を張ってシューゾーくん達を遠ざけたわたしを……シューゾーくんや梶センパイは呆れてしまっただろうか？

「……」

ふらりと席を立つ。

誰もわたしを気にしない教室から廊下へ出て、誰もわたしを気にし

ない校舎の中を進む。

「……………」

誰もわたしを気にしない学校の中、誰もわたしを気にしない廊下で息を吐いた。

こころは鉛のように重く、つい最近までの自分が思い出せない。…

…ああと思う。……………そうかと、思う。

わたしは弱かったんだなあ、と崩れ落ちそうな下半身を抑えながら納得する。

廊下の窓枠に縋りつきながら実感した。

……………

いないことにされるということはこんなにも……………

「……………」

……………廊下の窓の縁からボタボタと垂れる雨。その向こう側。確かにわたしと目が合った。豪雨の中、傘もささず、突っ立っている影。

シューゾーくんだった。

啜えたパンは水浸し。制服も既に満遍なく濡れてしまっていてずっしり重そうだ。

それでもシューゾーくんはわたしから視線を外す事をしない。ただ

腕組みしながら雨の中でもしやもしやと濡れきったパンを食べていた。

「なんだあれ。アタマおかしいのか？」

「こええ。最近毎日こっち見てるらしいぞアイツ」

廊下に居た生徒たちはシューゾーくんを見て、みんながみんな眉間に皺をよせ似たような感想を漏らす。

わたしが意地を張って中庭を見ようとしなかったこの5日間。毎日シューゾーくんはああしてわたしの教室の方角を睨みながら突っ立っていたんだらうか？

たったひとりで。わたしが気付かないのも承知で。

「……………」

……………。

くう。なんであのひとはあんな……………

わたしは縋りついた窓に頭頂部を押し付け立ち上がる。まだまだやれる。わたしは大丈夫。

きつと皆が丸く収まる方法があるはずなのだ。わたしはだからまだ大丈夫。

ポタポタ落ちる雨音がさつきほど耳にうるさく感じない。

わたしはひとりきりじゃなかったんだから。
さっきより少しだけ胸を張ってみた。

わたしはここにいるんだから。

ああ、そうだ。そうだろうよ。

ゴリにもっともらしい事言ってみたところで、結局僕は僕でしかないんだ。

ウチに帰ればamazonで買ったRe riteに心躍らせる程度には……バカでオタで人の心なんかわかんないんだよ。

僕はだからこのバカみたいに降る雨の中黙みたいになったパンを咀嚼しているのだ！ギャルゲの為ならなんだってやる！それがボクオリティー！少々寒いのかなクショーなんだよコノヤロウ！

待ちに待ったRe rite！！

僕がどれだけ楽しみにしてたと思っただ！絵はあまり好きになれないが、かのロミオ神脚本！！竜騎士はぐらしやってないから知らん、が！ロミオ神なるぞ！！これをスルーするってのは僕にとつては既に恥！恥辱に該当する！！つまんなくてもお布施として納得できる脚本家が今時いるのか！？いいいいいやっ！いない！！

それなのに。

確かに相当のクオリティーを誇る今作、僕は楽しめない。

モニターの前で違和感の所在を改めた結果……はつきりと分かった。

理子が、苦しんでる。

それだけだ。

僕はそれだけで R e r i t e に入れない。どこか上の空。文字を追ってるだけ。つまんない。だから。

ずしりと重くなった袖を持ち上げ時間を確認する。

「……………」

もう、昼休みが終わる。

理子は気付いてくれただろうか？雨がひど過ぎて目もまともに開けられない。まあ理子が気付くのが気付くまいがこの際どうでもいい。自己満足ってやつだ。「こんな雨の中で突っ立ってる僕ってカコイイ！！」的な恥ずかしい程の自己顕示欲の現れ。

どうにも僕らしくない。柄に無いことしてる。んなこたあ分かってる。

僕はすちやと芝生の上を歩く。

ズチャズチャ。

だって僕……何にも出来ないじゃないか。

ズチャズチャ。

どれだけ理子が苦しんでるかなんて僕が一番良く知ってるじゃないか。

ズチャズチャ。

なのに結局僕はウチに帰ればパソコンの電源を入れるし、理子が苦しんでるのにユーチューブ見て笑ってたりも出来るクソヤロウなんだ。

ズチャズチャズチャズチャ。

僕は自分が存在しない状況を日常化して心にひきこもり、磨り減るのを回避した。理子に同じことが出来る？それとも姉のように鉄の意志で振舞える？どっちもムリだ。僕のやり方だと理子はきつと壊れるし、姉のやり方は多分姉にしか出来ない。

じゃあほっとくか？

なぜか、できない。

どのみちクソヤロウのはずの僕は理子を見捨てない。なんとかするんだ。

僕には人脈もないし腕力もない。度胸もないし知性もない。でもそんなこととは別の場所で誰かが言うんだ。

.....

そんなことは関係ないって。

僕がバカでクソヤロウだとしても、現に理子は苦しんでいる。

ギャルゲの女の子に告白されたとしても、現に理子は苦しんでいる。理子が僕になんか助けを求めていなくなつて、現に理子は苦しんでいる。

ああ……そうか。

ハナから自己満足なんだ。僕は理子がどう思おうと理子が苦しんでる状況が嫌で嫌でしょうがないだけ。
理子がそれでいいと言ったって僕が嫌なんだから嫌なんだ。
ナルホドナルホド。

僕は落ちてきそうな雨雲を見上げたため息を吐いた。

やっぱり僕は単に自分勝手なバカだった。それはそう。そう思う。

でも、どうやったって……そんなこと、カンケー無いんだよなあ。

「1年と2年の一部、随分陰険じゃない？」

私の席に寄ってくるなりいきなりそう呟くクラスメイトの美樹。まあタノシそうな顔しちゃって。

「どうするの古都？ヒサシブリにやっちゃうわけ？」

別にこの子に限った事じゃない。このクラスはトラブルが大好物なのだから。こんな感じで言い寄ってきたのも、むしろ美樹は遅いほうだった。既に二桁近い生徒が私に「どうする？」と詰め寄っている。

こんな雨の日は皆他にやる事がないのだろうか。

「ダメ。様子見」

私が短くそう言うと美樹は特に落胆したそぶりも見せず、そっかーと私の隣の席に座る。

皆が信頼してくれていた。

ノリと勢いが信条のこのクラスは正義感と好奇心がせめぎ合い取っ組み合っているような所がある。ともすれば暴走しかねない危なっかしいクラスだが、なぜか私の意見を尊重してくれるので大いに活用させてもらっているわけだ。

カナの協力により大まかな理子ちゃんイジメの構図は掴めているし、予測の部分にしたって多分当たっている。

だから……困る。動けない。本来理子ちゃんは関係なく、他人が口を出すべき問題でもない。

当人同士でカタを付けてもらうのが一番なんだけど……どうなんだろう？随分こじれてしまっていて解け目が見えない。

「古都ー」

カナは率先して恋敵の理子ちゃんを助けるため奔走する毎日を送っていた。何か分かれればこうしてわざわざ私のクラスまで出向いて報告してくれる。

「なにか分かった？」

「首謀者はとつくに。推測ドウリだったよ」

やっぱり古都はスゲーな、とカナは私に感心してくれているようだが嬉しくはない。私は眉間に指を当てしばし思考を錯誤してみたりするが。ダメだ。これは私の苦手分野だ。

アタマの中は今日の天気のようにどんよりと曇っていて全く光が見えない。

「カジのヤロウ、てめーがガンのくせに今日もフケてんの？」

「ダメよ本人に言っちゃ」

ブクーと頬を膨らませたカナは不満そうに頬杖をついて窓の外を見る。

梶君は知っているのか知らないが、この学校には彼のファンクラブ

が存在する。隠れて写真をとったり覗き見たりしているうちは可愛いものなのだが、今回は様子が違っていた。実はこのファンクラブの元になった生徒たちは梶君のファンなどでは全く無いのだ。実にややこしい。正直関わり合いになりたくは無い。

しかし今回はとぼつちりでわけも分からず理子ちゃんが標的にされている。即止めさせなくてはならないが、そうすると困る生徒が出てくる。ソレは避けたい。でも理子ちゃんをほっておくなど出来ない。さて。

「なんとかなんねーの？見てらんねーよ」

「中庭？」

「……」

あのバカでオタクな弟はこの雨の中ポケットと突っ立っていた。理子ちゃんの教室を向いて、たったひとりで。

梶君も理子ちゃんも居なくなった中庭で一体何を考えているのか。まあ多分考えなんて無いんだろうけど。

「カナ」

「ん？」

「ありがとう」

華美な化粧と高価な装飾品で飾ったこの女の子は、私の弟や理子ちゃんのことで毎日奔走し2人を見かける度に心を痛め悲痛な表情を浮かべていた。最初に出会ったときの印象などすっかり影を潜め、今や完全に一途な女の子にしか見えない。

「れれ礼なんかいいよ！それより早いトコなんとかしようぜ！」

「……そうね」

この件で恐らく梶君は動けない。ぶつちやけていうと2、3人ブン殴ってもらって排除しようとも思っていたんだけど、暴力ではダメだ。誰も救われない。

持久戦もダメ。理子ちゃんがもたない。かといって早期解決の方策も分厚い雲に覆われていてさっぱりだ。

「困ったね」

「うーん」

私とカナは分厚い雲を見ていれば穴が開くんじゃないかと思っっているかのように、ただ教室から重そうな空を見上げていた。

臭い。中学の時からそうなのだが、この制服ってヤツは濡れるとどうしてここまで臭いのか？

僕はせめて力いっぱい両手でねじ切れんばかりに絞ったはずなんだがやはり独特の耐え難い匂いを撒き散らしている。

ぐちよぐちよの靴下とスリッパが不快な感触だけではなく僕の嗅覚まで侵す。

ぐちよぐちよぐちよぐちよぐちよぐちよぐちよぐちよぐちよ。

廊下に響く僕の足音。江戸時代なら妖怪『ぐちよぐちよ』として鳥山石燕先生にイラストを描かれていたかも、それほど僕は気配を消していた。

姿は無くとも足音だけが響く廊下。映画化なら清水崇監督がいいなあ。

「……………」

まあ慣れている。この相手を見ずに視線だけを突き刺してくるカンジ。僕は平気なんだが理子は。考えるとうとうにも頭が真っ白になってしまっとうまく考えが纏まらなくなる。冷静にならなければ。

廊下の端っこをベタベタ歩く僕の視界にその心配の元である理子の背中が見えた。

クラス単位の教室移動なのか生徒の一団の中に居ることは居るんだが、誰も理子に視線を寄越さない。ぼつかりと理子の周りにだけ沈黙が佇んでいる。廊下の生徒も理子に声を掛けるヤツはいない。

日に日に徹底されるイヤな空気は質、量共にどんどん拡大していく。

アカデミック……バックドロップ……ああ、違った、パンデミックだ。

ウイルスが感染していくような被支配され感。当事者とそれ以外の人間の間には物凄い隔たりがあつて、それを乗り越えるのは容易なことじゃない。

今理子に声を掛けるということは、それ以外の大多数を相手にするということになる。誰も好き好んでそんな真似はしない。この学校の生徒であるならそんなことは絶対に避けるだろう。無駄に敵を増やすことはないのだ。

多数派に乗っかっていればそのうち終わる。そう思っているんだろう。

正直僕だつて理子が標的になつてなければ『シラネ』で終わらせただんだと思つ。

だから……僕は誰も責めない。そう決めた。

こうしてずぶ濡れになつてんのだつて僕が好きでやってるだけ。理子の為ですらない。

でも僕はそれでいい。

何年でもやってやる。僕はひとりでもいい。

呆れられようが、味方なんか居なくなつて……僕はずっとそうやってきたしそう望んだ。これからだつてそうだ。

周りなんか関係ない。自分の世界だけでいい。どうせ『こう』なるんならハナから一人でやってやる。

僕は……

「り、理子ちゃん!!」

少し眩暈がした。

聞き間違いだと思った。理子に話しかけるってことは他の大多数……

「新木君心配してた!僕も、!」

……。

……。

理子は振り返らない。少しだけ立ち止まったように見えたが見間違いかも知れない。

廊下の空気は硬直しギコチナイ流れで時間が進む。

開いた穴に水が流れ込むように、廊下の喧騒が徐々に戻っていく。

声を掛けた生徒は教室の窓から身を乗り出したまま理子の消えていく背中を見詰めていた。

「……」

べちよべちよと放心しながら僕はその生徒に近づいていく。

「あ、……新木君」

ぼりぼりとアタマを指で掻きながら照れたように顔を伏せる男。
藤崎だった。

「僕も……なんか納得出来なくて。新木君も雨の中頑張ってるのにさ」

なんで照れる？お前は……お前は。

「早く収まってくれればいいね」

さらっと、コノヤロウ！コノヤロウ！

「ふ藤崎くんっ！いや！ふ、藤崎いつ！」

「ちょ！新木君！？」

僕は宣言する。

目の前のイケメンリア充に指をコイツの額に埋め込む勢いでびしいと指差し！

「ありがとうっっ！」

僕は自分でもよく分からないのだが……前屈のように腰を思いっきり曲げ藤崎にアタマを下げていた。ほとんど無意識、条件反射。

「あ、新木君……ちょ」

「アリガトウっっ！」

このイケメンは心までもイケメンだったようで、悔しいがかっこよく見えた。

コイツは爆発しなくていいお。

陰湿な学校生活は更に3日が過ぎた。

理子は相変わらず孤立していて手の打ちようがない。皆が藤崎のようになれば……そう思った時期が僕にもありました。しかし現実には。

「あ、新木」

「……」

藤崎は僕を呼び捨てにするようになった。これを友人関係と呼んでいいものか僕には分からないが、確認しようがないのでホツタラカシである。まあ別に嫌ではないのでいいか。

んで、その藤崎であるが最近めつきりゲンキが無い。今も半ば上半身を机に投げ出すような格好で溶けかけのアイスクリームのようになっている。

「想像以上に……辛いんだね無視って。出来れば知らないままで卒業したかったなあ」

僕はどつちにしても大して会話をしなかつたからよく分からないが、リア充藤崎には結構クルルものがあるらしく日に日にメンタル面で追い詰められているようだった。

理子を案じて声をかけたイケメンぶりを発揮したまでは良かったが、まさか自分まで被害を被る事態を考えていなかったようだ。イケメンだが、アマチャンである。

「新木は平気みたいだね。鉄の心臓が羨ましいよマジで」

僕はまあ特に凶太いなんてことはない。慣れてるだけだ。それに理子に比べれば僕や藤崎の被害なんてはつきり言っただけだ。

「大丈夫2人とも？」

隣の智花が僕らに心配そうな声を掛ける。……又ルイ。

「僕らに話しかけないほうがいいよ。智花ちゃんまで無視される」

本当は話しかけられて目をキラキラさせているくせに見栄を張って智花を心配する藤崎。なんとまあ、コイツは多分損するヤツなんだな。いろんな意味で。

「それがさ……」

「？」

智花は僕に綺麗に折りたたまれた紙をそっと差し出す。わざわざ机の下から腕を伸ばし、怪しげな取引をしているような抑えた口調で。

「2年の人に渡されたんだ。『新木ってヤツに』って。オトナしそつに見えたけどあの人が理子ちゃん嫌ってるのかなあ？」

「おとこ？」

「それがオンナなの。真面目そうだった」

真面目そうな女生徒が理子を苦しめるだろうか？

僕の知る限り理子は2年と接点は無。何しろ同じクラスであつても「友達が出来ない」と嘆いていた理子だ。それに憎まれるって相当の関係がないとそもそも成り立たないように思う。大して知らない人間を憎んだり恨んだりするのは前提として不可能なんじゃないのか？

「で？智花ちゃんは敵の手先となり僕らに引導を渡しに来たってわけだ」

厭味たらしく藤崎は智花を責めるような口調で呟く。もちろん冗談なのは智花も分かっているがいささかメンドクサイってのが本音だろう。智花は逆に藤崎に口撃を加える。

「短期間で藤崎君すっかりスレッツカラシみたいになつてるね。……周蔵くんを見習ったら？全く、そんなんじゃモテナイよ。ねー周蔵くん」

智花は……それでも多少のリスクを呑んで僕らに話しかけているのだ。感謝こそすれ皮肉なんて出ない。もちろん藤崎だってイヤツなのはもう分かっている僕は思ったことを智花に伝えた。

「ふ藤崎は、カッコイイよ。もちろんとと智花も」

正直な感想だった。なのに智花はうわぁ、ともともと大きな目を見開いて僕と藤崎を見比べながら言う。

「う……器で負けてるよ藤崎君！藤崎君の唯一勝てるかも知れなかったオトコのウツワでワールド負けじゃなか！」

「分かつてるよ……確かに新木はすごいと思う。これ以上イジメな

いでくれよ」

そんなものに勝ち負けがあるんだろうか？

藤崎はするすると机に突っ伏してしまった。全く実感のない勝利と
いうのは出し忘れの生ゴミのようだ。置き場が無い。

「で？なんて書いてあるの？」

藤崎のフォローもせず手紙に興味津々の智花。

間違いなく心も外見もイケメンであるはずの藤崎はやはり損をする
男だった。

「ほ放課後、2年の校舎に、ここ来いって」

短くそう書かれた手紙には 組とは書かれていなかった。

「……行くの？やめといたほうがいいん」

「いい行く。話聞いてくく来る」

ちようどいい。事情を教えてくださいと言うなら行かない理由なんか
どこにもない。

「なんか……周蔵くんって最近イイね」

「？」

「前は全然喋んなくて何考えてるのか分かんなかったけど、今の周
蔵くんはいいと思うよ」

なにがいいのかサツパリ分からない。
でも反論するような事でもないし、智花がなんか満足そうに見えた
ので黙っていたんだが……やはり僕は『置き場』を探せなくて居心
地は相当良くなかった。

僕は放課後を待ち2年の教室へと向かう。

終わせられるものならさっさと終わらせてしまいたい。理子の寂しそうな背中を見かけるたびに強くそう思っていた。

訳も分からず只耐えるだけでゴールが見えないとなれば、そうそう持続するものじゃない。僕には理子が少しやつれているように見えていた。

「なんだか……緊張してきたよ」

僕の後ろから緊迫した面持ちで追従する男子生徒、リア充藤崎はそう漏らす。付いて来いと言った覚えはないのだが？

僕だって階段を昇りながら足の震えを抑えるのに必死だが、今はそんなこと構っていられないのだ。

「べべ別に藤崎は、こ来なくても」

付き合わせるつもりはない。呼び出されたのは僕だけなのだから。

「……そういう訳にもいかないよ。オトコノウツワ見せないと、ね」

そう冗談めかして少しだけ笑う藤崎。

「な殴られるかも」

僕がそう言つと急にぱつと顔を上げ泣きそうな表情をするオトコノ

ウツワの持ち主。

「まさか……そんなことしないよ……しないよね？」

「わわ分からない、けど」

そんな展開が全く可能性が無い、とは言い切れない。

僕や藤崎の得手不得手に関わらず相手はどう出てくるかわかったもんじゃない。僕らはただ呼ばれたからアホウのようにノコノコ出て行くだけなので相手にしてみたら待ち伏せし放題、いいカモなんじゃないだろうか？

この学校は偏差値が高いだけのロクデモナイ学校だと薄々気付いていた僕らは笑ってばかりいられない。

「新木。足、震えてるんじゃない？」

僕の足元に視線を送りそう呟く藤崎。

「こ声裏返ってるぞ藤崎」

僕も藤崎も……はっきり言ってビビッていた。

僕はケンカなんかしたことはないし、藤崎だって似たようなものだろう。

「……新木……やっぱり、止めとく？」

「かか帰ってもいいよ。ほ僕は行く」

「冗談だよ！行くよ！……はあ」

溜息を隠さずに吐きながらもテクテクと僕に付き従う藤崎。やはりなんだかんだ言っても藤崎はイケメンだった。本当ならばさっさと帰って明日の予習でもしていただろうに。少し申し訳なく思った。ので今度パックジューズでも奢ってやる事にしよう。

ヨロヨロと頼りない足取りながらも階段を昇りきった僕と藤崎は2年生の教室が並ぶ廊下に辿り着いた。さて。

もう放課後をとくに過ぎているので生徒の姿はまばらにしか居らず僕らを気にする風でもない。手紙には詳細は書いてなかったんだが……どうしたものか。

「おい」

一番近くの教室の扉から一人の生徒が僕らに声を掛けた。男子生徒である。手紙の差出人は女生徒、この時点で相手は複数であることが判明しがっくりと肩を落とす藤崎。

「入れよ」

僕らを教室に招き入れる微妙に筋肉質のこの生徒。DQNというわけでは無さそうだが迫力はある。何か部活でもやっているのか学ランの襟元からジャージが覗いていた。招き入れられた教室内、フワフワと落ち着きの無い足取りの僕らはその光景にしばし沈黙する。廊下の反対側の校庭に面した窓際に4人の女生徒、僕らを品定めするように覗き込む黒板の前の3人の男子生徒。

計7人の視線が遠慮の感じられない勢いで僕らに突き刺さっている。

「殴られるって」

痛いかな、そう藤崎は引きつった笑顔で呟いた。

藤崎

やめておくべきだったなあ。

僕は実際部外者だし、出しゃばって痛い目見ること無いよなあ。

「頼みがあるのよ新木君」

窓際にいた女のセンパイが新木に詰め寄る。見るからに気が強そうだ。腕組みして顔を軽く上向きに、新木の顔を眺める。背も新木より2センチ低いくらい。女子ではかなり大きい方だろう。

「ただ頼み？」

新木は口調こそオドオドしてるのにやたらと毅然とセンパイから視線を逸らさない。意外に度胸あるなあ。見習わなくちゃ。

「ホラ」

ついと視線を泳がせるセンパイ。その先には廊下の窓があり多分位置的に中庭が覗ける。

「？」

「中庭で、あんたらお昼食べてたでしょ？あんた今でも一人でいるし。やめてくれない？」

なんだ？何の話なんだ？

僕は新木を見たが新木も良く分からないだろう、訝しげな表情でセンパイを見ていた。ああ、そんな見たら失礼なんじゃないの新木

「せめてなんか言ってくれ！心臓が悪い！」

「よく分からない」

「でしょうね。まああなたにしたらどこで食事しようとなんで私らに文句言われるのか分からないでしょうけど」

「うん」

うんて！度胸があるのは分かったから、その不躰な態度はどうかと思っぞ新木！

黒板の前にいた3人の男子生徒が気たるそうにコツチ来るのは殴る？殴るために移動してくるの！？

窓から差し込む本来紅くて綺麗なはずの夕日がこんなに寂しく見えたのは初めてだ！むしろブルーだ！

「梶先輩とはどういう関係？」

新木に詰め寄ったセンパイは質問に質問を被せる。それにしても女子にあるまじき迫力。はつきりいって怖い。夕焼けが逆光になってその顔は影が差していた。

「か関係？」

アタマに右手をやり困った表情を見せる新木。仲がいいのは知っていたが改めて問われると新木自身にもよく分からないように返答に窮している。多分友達なんだろうがセンパイを友達呼ばわりしてもいいものかと考えると僕だっつうまく答えられないだろうなあ。

「今から言うことは秘密にしてもらいたいんだけど」

そう前置きした逆光のセンパイは新木の返事を待たず喋りだす。

「このコ、梶先輩と付き合ってたの」

窓際で動こうとしなかった女生徒の一人を促し、手招きして新木と僕の突っ立っている場所に誘導する。小柄で見るからに大人しそうなヒトだ。それに内気でもあるのか一度もマトモに僕らを見ない。

「……」

全く感心する。新木は沈黙を恐れない。迫力満点のセンパイに対していくらでも黙っている。

やはり新木は鉄の心臓の持ち主だった。部外者の僕が口を挟めないのとは違い、なにか凜としている。

「でさ、中庭で楽しそうにされると……ツライ訳。わかる？」

「な何が？ツライ？」

新木は本当にワカラナイといった表情で迫力のセンパイを覗き込む。眉間に皺をよせ首を傾げ。

センパイに対して失礼な行動だとは思うが、新木の気持ちも分かる。別れた彼女の心情を慮って学校生活を隠れて過ごすなんてムリだ。いいがかりに近い。

「おおげさだと思う？」

「うん」

うんて！そりゃ僕だってそう思うけど！

「このコ中絶したの」

迫力あるセンパイは自ら招いた内気な先輩の肩に優しく手のひらを乗せた。途端、糸が切れたようにペタンと座り込む内気なセンパイ。どうやら冗談の類では無さそうだ。3人の男子生徒もみんな辛そうに顔を伏せている。仲のいい友達なんだろう。

内気なセンパイは窓際にいた残り2人の女生徒に抱えられ椅子へと促される。

「ご覧の通りまだ立ち直れないのよ。全然ご飯も食べないし」

確かに少し病的な印象を受ける。元々線が細いのかも知れないが、なんとというか『脆さ』が表面に浮き上がっているようだった。

「まだ、おおげさだと思う？」

僕はオトコだし中絶の苦しみなどわからない。そんな僕でもあの内気そうな先輩が苦しんでいるのは分かる。

新木の後ろでハナシを聞いているだけの僕だが、この先輩たちの真剣さは痛いほど伝わってきた。

新木はどう思っつて今の話聞いたのか。後姿では判別が付かないが……友達である梶先輩の行為に何も思わないとは思えない。

今新木を問い詰めているセンパイも同じ事を考えているのか、新木の言葉を辛抱強く待っている。

「……ナイ」

新木の言葉をえ？と問い返す顔にはやはり迫力があつた。多分聞こ

えたんだ。聞こえたけどあえてもう一度聞いている。
とうかちよつと待て。僕にも聞こえたが、ちよつと待て新木！そ
れはダメだろ！！

僕は新木の肩を掴んで新木を止める。

「新木！？考える！おか！」

新木の顔を見た僕は……悟った。これは止まらない。

「もういっぺん言ってみなよ！」

新木の胸倉を掴み凄む女生徒。しかし。

「な何度でも言っけど」

ああ、やっぱり。

「く、くだらないって言ったんだ」

新木はなんか、怒っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4799x/>

ベクトルマン

2011年11月1日03時20分発行